

GG851

44



78410798

秘赤 密露



2



0000983000

0000983-000

GG851-44

赤露の秘密

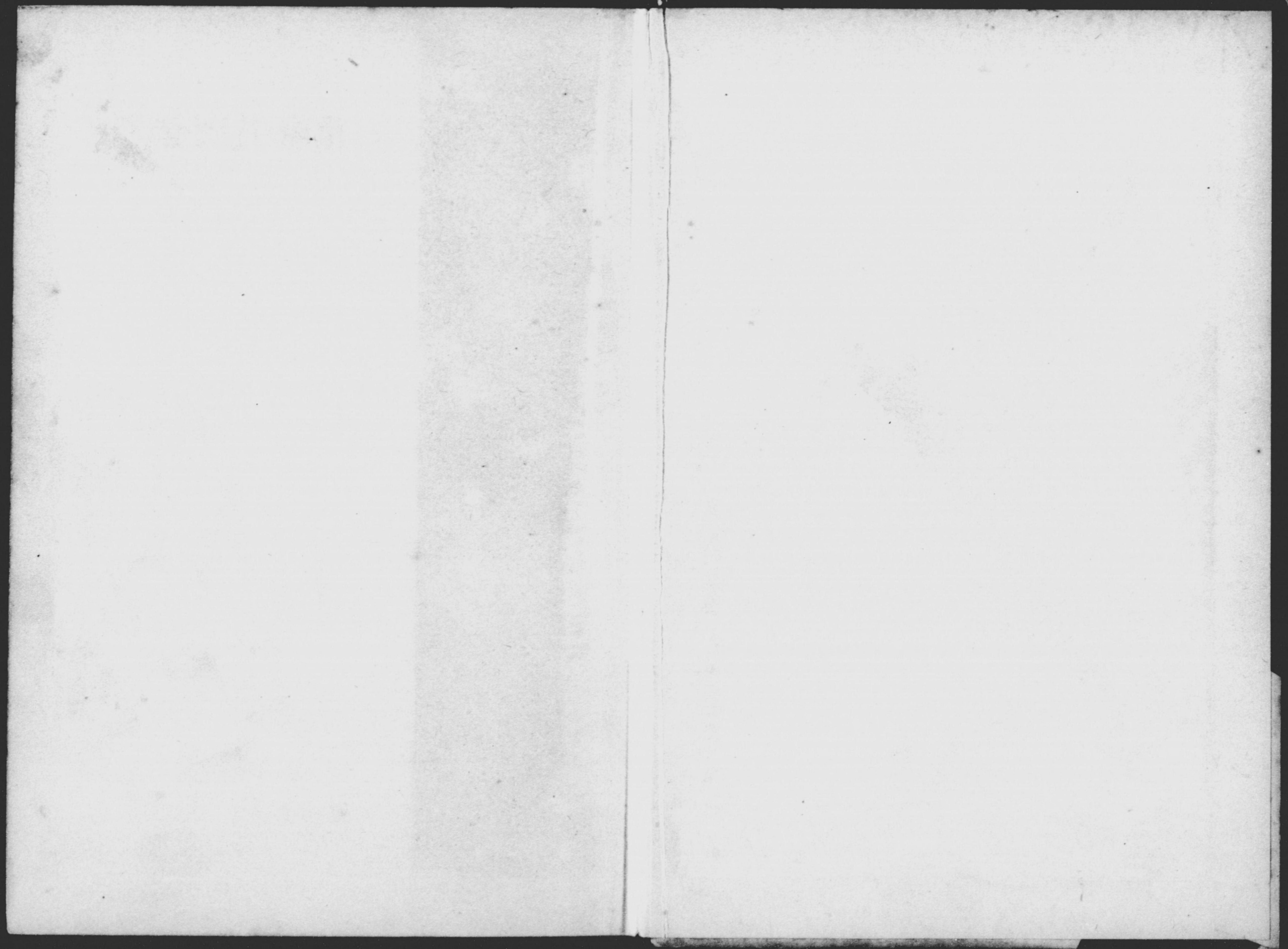
夏秋亀一・著

万里閣書房

1930. 10

AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



赤露の秘密

夏秋龜一著

京東

版房書閣里萬

66851
44



302,38

78W10798

赤露の秘密

目次

はしがき……………一

第一章 スターリンはどんな人物か……………三
——どうして彼は権力を獲得したか——

第二章 反対派との闘争……………四

第三章 スターリン権力の「カラクリ」……………七
一 権力の推移……………七
二 スターリン権力「カラクリ」の實體……………四

第四章 スターリンは何處へ行くか……………五

第五章	スターリンの兩腕	五
一	モロトフ	五
二	カヴノーウイチ	五
第六章	スターリン權力組織の急所	六
第七章	ロシア人心の機微	六
一	ロシア大衆の政治的意向	六
二	ロシア民衆の眞意	七
三	共産黨と勞働者	七
四	共産黨と農民	七
五	共産黨と知識階級	七

第八章	共産權力は何時滅亡するか	八
第九章	ゲー、ペー、ウー	八
一	ゲー、ペー、ウーの組織と幹部	八
二	經濟諜報部	九
三	ゲー、ペー、ウー外國部	一〇
四	ゲー、ペー、ウーの祕密部屋と拷問方法	一〇
第十章	最高機關政治部の内幕	一〇
第十一章	經濟政策	一一
一	經濟政策の變更と五年計畫	一一
二	社會的競争	一二

三	工場一頭制……………	二〇
四	無休操業制(工場の連続生産)……………	二三
五	五年計畫の失敗(中央委員會の檄文)……………	二七
六	新農業政策—其動機と結果……………	三六
第十二章	スターリンの退却と更生……………	四八
第十三章	スターリンが死んだらロシアは どうなる?……………	五一
第十四章	赤軍の内容……………	六一
第十五章	宗教撲滅と新十字軍……………	八二
第十六章	男女の關係と風儀……………	九五

第十七章	苛斂誅求……………	一〇〇
第十八章	教育問題……………	一〇八
一	總 說……………	一〇八
二	文相の更迭と教育の新方針……………	一一五
三	卒業生の不成績……………	一二九
四	入學生の減少……………	一三〇
五	教育上の大缺陷……………	一三一
	甲 不具の教員と大學生の非常識……………	一三一
	乙 道德の標準……………	一三三
六	學校外の教育……………	一三五
七	大學生の氣風—秘密結社……………	一三七

八 外國に對する學生の感想……………二二九

第十九章 外交政策……………二二三

一 外交政策の根本義……………二二三

二 外務省幹部の人物評……………二二七

三 赤露在外大使館の任務……………二四三

四 在亞然赤露公使館の祕密暴露……………二四六

五 巴里大使館内の暗黒室……………二五一

六 外國瞞着手段……………二五二

七 赤化宣傳、世界革命の戰術……………二五五

第二十章 赤露と諸外國との關係……………二五九

一 接壤諸國との關係……………二五九

二 獨露の關係……………二六二

三 佛露の關係……………二六四

四 英露の關係……………二六七

五 米露關係及其他……………二七〇

第二十一章 結 論……………二七九

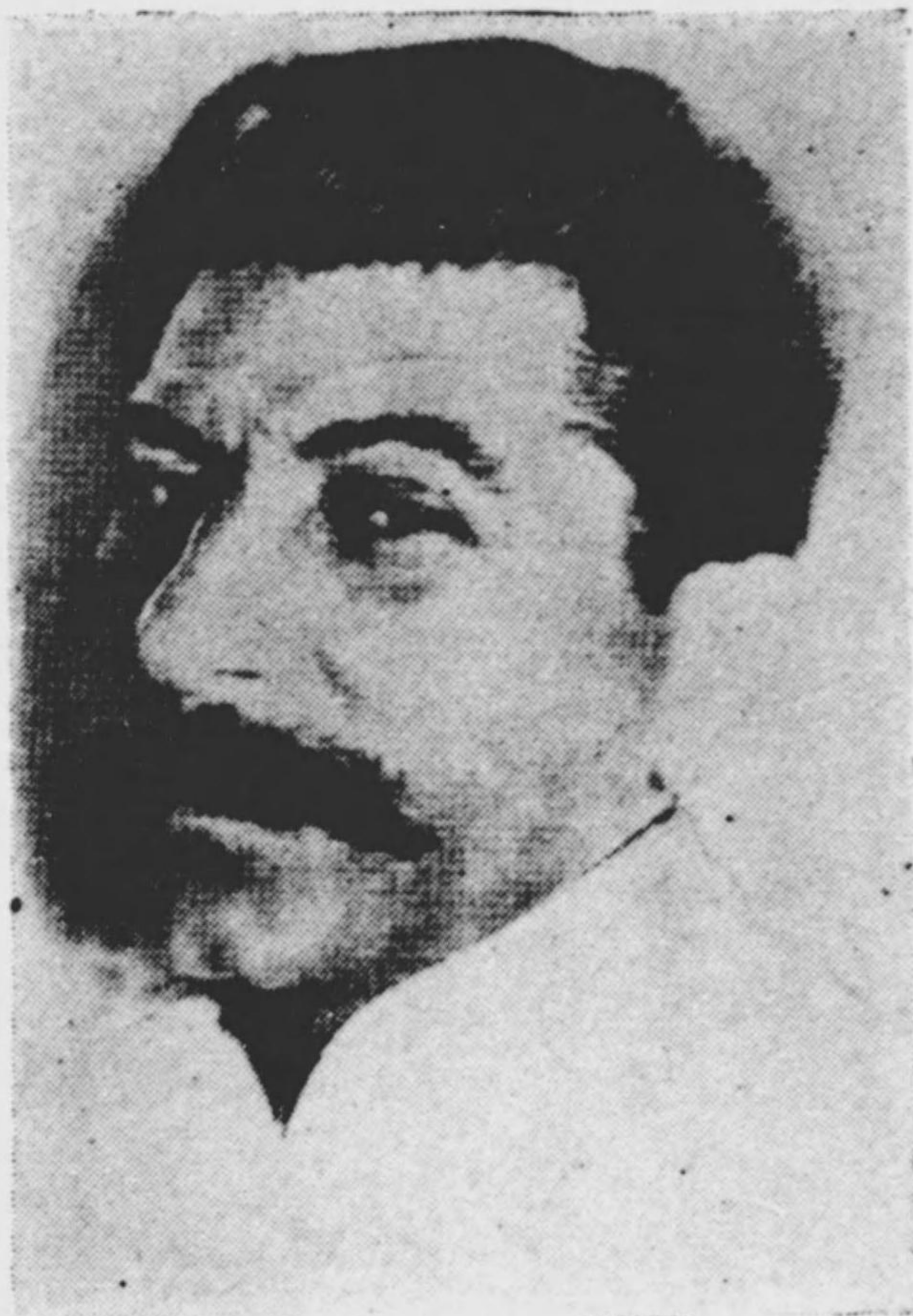
附錄 惡魔の會議(第三インター祕密會議の真相)……………二八三

はしがき

赤いロシアは謎ではないと云ふ人がある。成る程、ロシアの真相を徹底的に研究し、其將來をも判断し得る人から見れば、謎でもなんでも無いであらうが、ロシア革命以來十有餘年もかゝつて、赤露の真相を専門的に研究した人々さへ、はつきりと其真相を掴む事が出来ず、從て其將來は勿論現在に就てすら十人十色、諸説紛紛である。

ロシアの未來を知らんと欲すれば、全體を通じて先づロシアの現状を見極めねばならない。局部的若しくは皮相の觀察を得たからとて、其人はロシアの現状を知つたと云ふ事は出来ない。況んや其未來を豫言する何等の資格もないのである。

私は明治三十三年頃より、或は文書により、或は實地に就てロシアを研究して居



ンリーマス

がない。赤露の凡ゆる秘密は、スターリンと、スターリン権力の「カラクリ」に包まれて居る。スターリンとスターリン権力のカラクリを知らない限り、赤露の真相を、伏魔殿の秘密を、絶対に窺ふ事

現代の赤いロシアが謎であるのと同様、スターリンも亦謎の人物である。今や赤露に於て絶大の権力を握り、全世界を向ふに廻はして『世界革命』を夢み企つる彼スターリンは慥かに、現代に於ける大なる謎の人である。多くの人士は、ロシアの真相を探ぐる事に失敗して居る。謎の國として、復た不可解の國として、彼等は探究の困難な事をかこち、或る者は既に研究を断念した。ロシアを、殊に現代の赤露を真正面に見たゞけで、そのなぞが解かれる筈

第一章 スターリンはどんな人物か

——どうして彼は権力を獲得したか——

だが、昨年六月、〇〇〇及〇〇〇〇兼〇〇〇〇より、思想問題は勿論、我が對露政策の参考にもなるから、色眼鏡を懸けず、公平無私に、サヴェート聯邦の實況を研究調査せよとの命令を受け、サヴェート聯邦に赴き、また其隣接諸國にも旅行して、内外より出来得る限りサヴェート聯邦を視察し研究した。其間、共産黨調歌の人人々、反共産の名士、嚴正中立の學者、又は赤露より脱走した人々等種々雑多の人士に面會して意見を叩き半歳以上の調査研究の末、大膽にも、赤露の真相を臆氣乍ら見極め得たものと自信し、歸朝の途に就いた。そして歸朝の後も各方面より種々有益な報告を受取つて居る。

旅行中の調査と歸朝後受取つた材料とを本として本書を書いたのである。若し本篇が、謎を解く鍵ともならば幸甚幸甚、腐つた鍵で役に立たぬと吐責さるゝ方があらば、高教を賜はらんことを願ふ。

は出来ないのである。しかも其カラクリたるや、スターリンと其腹心の部下が全力を擧げて、秘密の嚴守に努力して居るのである。下層の共産黨員は勿論の事、トロツキー、ジノーウイエフ、カーメネフ、ルイコフ、ブハーリンの如き共産黨の元老でさへも、スターリンのカラクリを知らず彼に反抗しその一撃を受け一敗地に塗みれた位だから、瓢然とロシヤへ旅行した外國人に、そのカラクリの秘密が判からぬとしても、何等の不思議はないのである。

スターリン権力のカラクリとは何か、それを説明する前に、スターリンの傳記を書き、彼れの眞價を暴露し、何が彼に今日の権力を與へるに至つたかを記さう。これは彼のカラクリを充分理解する爲にも必要な事なのである。

スターリンは本年取て五十一歳の働き盛りである。昨年十二月二十一日、滿五十歳の祝賀を催ふし如何に其威勢の宏大なるかを民衆に示し、頗る得意であつた。彼の生國は北コーカサスの山國グルジヤで、彼の兩親は半開の蠻人グルジヤ人(蒙古人種の一族)なのである。グルジヤの隣りには、ラジスタン族と稱する獍猛無比の蠻人が住居して居る。此の蠻族は二十世紀の時代に於て少くも六名の人間を殺害しない時は、その人は嫁を貰ふ資格がないと云ふ蠻習を持続する位だから、其お隣りのグルジヤ人の文明の程度も推して知る可きだ。そしてスターリンは本春以來、ゲー・ペー・ウーの勇士十五名



の護衛にては不足危険を感じたと見え、右ラジスタン人数十名を嚴重に武装せしめ身邊の保護に當らしむる事にした、權威赫々、人を斬る事大根の様なスターリンも自分の命は餘程惜しいと見える。グルジヤ人は頗る慍悍なる人種で、帝政時代に於ても屢々ロシアに反抗し獨立を企てたが、日露戦争で有名なるクロバトキンの爲に完全に征服されてしまつた。然しながら機會だにあらば獨立せんとの氣概は中々消失せず、スターリンも生れ落ちてより此獨立的敵愾心の雰圍氣中に育てられたから、反露の意氣頗る旺盛で宗教學校を卒業するや革命團に加盟した。陰謀暴露して直ちに捕縛せられ、其後再三、再

四、或は西伯利流刑に處せられ、或は投獄せられたが、百折不撓少しも反政府心を翻へさず、遂にレーニンの幕下に投じ、レーニン死するや一、二年を出でずして大露の實權を掌握するに至つた。

扱スターリンが赤露の主人公になりました事情に就ては二つの問題を解決する必要がある。

第一、スターリンが如何にして権力ある地位に登り得たか？
第二、如何なる事情、理由によりスターリンが實権を獲得し、今尚ほ之を確保して居るか？
此二問題は決して混同してはならぬ。之を截然と區別せねば大なる誤解を來たすから、豫め茲に斷つて置く。

第一問、即ちスターリンが如何にして権力ある地位に登り得たか、正確に云へば、権力ある地位にありつき得たかに就ては、偶然と僥倖が大原因であるに相違ないが、此偶然、僥倖を招來した原因は彼れが無學（田舎の宗敎學校を卒業した程度の學問で、其後投獄流刑等相續き、勉強する暇もなかつたから致方ないが、相當の學力あるとは如何に最負目に見ても云へない）野蠻であつた事が大なる理由になつて居るから面白いではない乎。然し其反對に、實権を獲得し今尚ほ之を確保して居る事に就ては、スターリン自身の才能及特性が、最大原因なる事を承認せねばならない。

赤露内亂の終末頃、スターリンは一軍團の「革命委員會」の一員であつた。然し乍ら彼れの強情と、且軍事に關する無知識により軍の幹部及軍政治局より嫌惡せられた。レーニンも已むを得ず、彼を莫斯科に召還した。其後暫らく彼は無職失意の境遇に在つたが、レーニン腹心の部下に餘り適當の人物が無かつた爲め、レーニンは彼を勞農検査委員會及民族人民委員會の一員に任命せんと欲し、人民

委員會に此旨を發表したが、人民委員會では、スターリンは馬鹿で仕方が無いとし、彼れよりも智識あり實力ある者を推薦した處、レーニンは之を聽かず、こゝには才智ある者は無用である、スターリン位が丁度適任だらう、と。

鶴の一聲、スターリンは委員に任命せられた。

スターリンはレーニンの明察に違はず、其無能振りを發揮し、委員會には半年に一、二度位出席するのだけだつた。レーニンは何故に馬鹿無能と迄酷評されたスターリンを重寶がつて居たかと云ふに、レーニンの慣用手段として、重要な地位には才能學識の有無よりも、自己の命令を唯々諾々奉ずる者を常に採用して居た。黨中央委員會に於ても、唯自己の提案に賛成する者許りを集めて居た。而してスターリンは此唯々諾々組の一人であつたのである。無學半開のスターリンはレーニンには從順で、レーニンの命令と云へば何事も遵奉して居たから、レーニンの御氣に入つたのである。古來暴君は硬骨忠誠の人士を遠ざけ、奸佞從順の者を近づくる様だが、レーニンも御多分に洩れなかつた。

レーニンが黨政治部、黨組織局、及中央委員會の秘書役等を組織、設置した際に、老獪にして先見の明ある彼は、時勢の進行に従ひ、権力は漸次、黨の最高機關に集中し、從て中央委員會の秘書役の人物が、偉大なる役目を演ずるに至る可き事を觀破し、秘書役には自己に盲從する人物が必要である

所以を覺り、スターリン、モーロトフ、及びハイロフの三人を、最初の秘書役に任命したのである。レーニンの意中を推察するに、右三人の中、スターリンを以て、最もよく盲従し、且自己に對し反旗を翻へす憂は毫末もなしと自問自答し、其結果としてスターリンを秘書役長に昇任させたものと思はれる。此の如くスターリンは其盲従性と無智半開とにより、共産黨の最樞要地位に有り付いたのである。レーニン在世中は彼は實際の猫か、賢猫か位は察知して居たに相違ない。流石頑強のレーニンも遂に重病に罹り隠退した。ジノールウイエフとカーメネフが實権を掌握し、スターリンを味方に引き入れた。其理由はレーニンの意見と同様である。即ちスターリンは無學半開である。又政治上の意見としても別に特種の卓説を持って居ないから競争者として敢て危険でなく、後釜を狙はるゝ恐もない。従順だから利用するのが得策であると考えたのであらう。乃ちレーニン死後もスターリンは秘書役長の重位を失はなかつた。斯くてスターリンの第二段の運命は決定したのである。レーニンは生前遺言文を書いた。書中、スターリンを免職す可き旨を明記した。蓋しレーニンは自分の死後必ず共産黨内に紛擾の起る可き事を豫想し、黨の總帥としては最も才能卓越せるトロツキを自己の後継者に擬した。そしてトロツキの眞誠の競争者は、ジノールウイエフでもなければ、またカーメネフでも無く、名譽權力の爲には如何なる手段方法をも辭さぬスターリンを以てトロツキの唯一の強敵也と觀破したのは、實にレーニンのエライ所である。先生は弟子の長所缺點を察知す。乃ち遺書中にも、スターリンは野蠻で無學であるから、必ず免職せよと明記したのである。カーメネフ及ジノールウイエフの兩人は、レーニンの聖像を造り、レーニンを神に祭り上げ、萬事レーニンの遺訓、レーニンの名に於て決定實行す可しと公言し乍ら、レーニンの遺言を悉く實行する事の困難さを、察した彼等は、遺言書の公表を出來得るだけ非常に遅延せしめた。レーニンは千九百二十四年の一月に死んだが、其遺言書を全露共産黨幹部會に公表したのは實に五月の末である。スターリンの運命を決定す可き最後の日が來た。スターリンは、屠所へ往く羊の如く悄然として着席した。愈々遺言書は公表せられた。非常に沈鬱凄慘の空氣が場内に充滿した。スターリンは異常なる忍耐力あり、喜怒色に現はれぬ東洋風の豪傑ではあるが、此時斗りは顔色蒼然、悲痛の氣眉宇の間に漂ふて居た。彼は内心、實に惘然なる小人物であると悲觀して居たと思はれる。やがてジノールウイエフは立ち上り、老婆の様な聲を張り上げ、老婦としてスターリンを辯護した。友達よ！ イーリツチ（レーニンの父名、親愛と尊敬を表示する場合に此名を用ゐる）の生前の意思、イーリツチの一言一言悉く我々の法律である事は毫も疑はない。我々は屢々イーリツチの遺言

所以を覺り、スターリン、モーロトフ、及びハイロフの三人を、最初の秘書役に任命したのである。レーニンの意中を推察するに、右三人の中、スターリンを以て、最もよく盲従し、且自己に對し反旗を翻へす憂は毫末もなしと自問自答し、其結果としてスターリンを秘書役長に昇任させたものと思はれる。此の如くスターリンは其盲従性と無智半開とにより、共産黨の最樞要地位に有り付いたのである。レーニン在世中は彼は實際の猫か、賢猫か位は察知して居たに相違ない。流石頑強のレーニンも遂に重病に罹り隠退した。ジノールウイエフとカーメネフが實権を掌握し、スターリンを味方に引き入れた。其理由はレーニンの意見と同様である。即ちスターリンは無學半開である。又政治上の意見としても別に特種の卓説を持って居ないから競争者として敢て危険でなく、後釜を狙はるゝ恐もない。従順だから利用するのが得策であると考えたのであらう。乃ちレーニン死後もスターリンは秘書役長の重位を失はなかつた。斯くてスターリンの第二段の運命は決定したのである。レーニンは生前遺言文を書いた。書中、スターリンを免職す可き旨を明記した。蓋しレーニンは自分の死後必ず共産黨内に紛擾の起る可き事を豫想し、黨の總帥としては最も才能卓越せるトロツキを自己の後継者に擬した。そしてトロツキの眞誠の競争者は、ジノールウイエフでもなければ、また

を悉く實行する爲に集合した。我々が遺言を悉く實行し且完成することに就ては諸君は好く了解されて居る事と信ずる。然し茲に唯一つの例外がある。それは或る事に對するイーリツチの心配が杞憂に終はつた事である。或る事とは何んであるか、それは秘書役長の進退である。此數ヶ月間に我々が成した事に就ては諸君は何よりの證據人である、イーリツチが心配せられて居た事が實現しなかつた事は諸君の實見した所である。スターリンを現職の儘にして置く事に就て諸君には異なる事と信ずる。

非常に苦しい辯解である。漸く辯解演説を了へ彼は汗油を拭き乍ら着席した。次で議長カーメネフも極力スターリンを辯護した。幹部連中は終始沈黙を續けたが、誰も反對はしなかつた。トロツキーはと見れば、目、鼻、口、手等の動かし方にて僅かに反對を表示したに過ぎなかつた。

此の如く葬式の様な沈鬱悲哀の會議に於て彼の運命は決せられた。若し此會議に於て彼が免職されなければ、權勢は愚か彼の死生さへ疑はれやう。從てサヴェート聯邦の形勢も現今とは異なつたかも知れない。計り難いものは人の世の運命である。スターリンは匹夫より起つて大露の主人公となる。一世の風雲兒と評したいが、實は一代の幸運兒なのである。

扱てもカーメネフ、ジノーウイエフの兩人は、神ならぬ身の悲しさ、スターリンの辯護が却て身を亡ぼす原因となるとは知らず、スターリンの免職を止め凱歌を奏した。

危くも秘書役長の重職に踏み止まる事を得たスターリンはその後一年内に充分に實權を掌握し、恩人たる兩人を何んの苦もなく權力より遠ざけた。

これと並行して時勢の變遷に従ひ、權力は漸時サヴェートの機關より共產黨の方へ推移し、黨は益々中央集權に傾き、國家の政治、經濟の有ゆる糸は、愈々益々一點即ち黨中央委員會の秘書役長に集中し始めた。

此の如くにして秘書役長スターリンは權勢の地位に有り付き得たのである。

かく述べ來れば、スターリンが赤露の權勢に有り付たのは、偶然、僥倖が大部分を占めて居る事が明白になつたと思ふ。

此の如き現象は、資本主義國家或は封建時代の諸國に於ては決して見る事の出來ぬ事實で、レーニンが計畫したロシア共產黨の一種特別の組織より生じた一種特別な產物である。

然し乍らスターリンが秘書役長の重位に就いて以來、實際權力を掌握し、之を確保し、自己の地位を磐石の如く鞏固ならしめた事に就ては、決して偶然、僥倖でなく、彼れ自身の天才(?)に負ふ所が甚大なる事を認めねばならない。以下之を説明しやう。

を悉く實行する爲に集合した。我々が遺言を悉く實行し且完成することに就ては諸君は好く了解されて居る事と信ずる。然し茲に唯一つの例外がある。それは或る事に對するイーリツチの心配が杞憂に終はつた事である。或る事とは何んであるか、それは秘書役長の進退である。此數ヶ月間に我々が成した事に就ては諸君は何よりの證據人である、イーリツチが心配せられて居た事が實現しなかつた事は諸君の實見した所である。スターリンを現職の儘にして置く事に就て諸君には異なる事と信ずる。

非常に苦しい辯解である。漸く辯解演説を了へ彼は汗油を拭き乍ら着席した。次で議長カーメネフも極力スターリンを辯護した。幹部連中は終始沈黙を續けたが、誰も反對はしなかつた。トロツキーはと見れば、目、鼻、口、手等の動かし方にて僅かに反對を表示したに過ぎなかつた。

此の如く葬式の様な沈鬱悲哀の會議に於て彼の運命は決せられた。若し此會議に於て彼が免職されなければ、權勢は愚か彼の死生さへ疑はれやう。從てサヴェート聯邦の形勢も現今とは異なつたかも知れない。計り難いものは人の世の運命である。スターリンは匹夫より起つて大露の主人公となる。一世の風雲兒と評したいが、實は一代の幸運兒なのである。

扱てもカーメネフ、ジノーウイエフの兩人は、神ならぬ身の悲しさ、スターリンの辯護が却て身を

スターリンは中肉中背、好んで中學生の制服に似た粗末なる衣服をまとひ、長靴を穿いた様は、一見ロシアのお百姓である。少しも邊幅を飾らず、常に平穩にして毫も熱しない。手を上下左右に動かす事もなく、歩行するにも決してチヨコ／＼しない、悠々として徐歩する、面相は獐猛でなく、寧ろ好々爺の人相を備へて居るが、餘り上品とは申されない。

沈着、平靜、無口で別に取立て、云ふ程の奇相はないが、唯、悠々然として泰山前に崩れるれども動かざる底の態度を見て、西洋人やロシアの人々は、何か非常なる深謀遠慮を胸中深く藏しては居ないかと、彼を買被ぶるのである。我々東洋人より見れば、此の如きタイプの人は日本にも支那にもざらに有り一向珍らしくはない。特に彼がグル ज्या人なりと聞けば彼れの寫眞を見た丈でも、人物の程度を測量する事敢て困難ではないが、西歐人又はロシア人より見れば、却て奥底の知れない怪人物、大人物と思ふのは無理ではない。然し乍ら漸次接近して談話を交ゆるに至れば、其無智なるに一驚を喫するであらう。そして益々多く接近し、談話を交換し、共に仕事を爲せば、此驚きは増加する一方である。彼は無口の英雄である、否無言の英雄にして置きたい。無言の豪傑は日本にも支那にも澤山居る。口を開けばボロが出るのである。

彼は政治上の問題を理解しない。財政經濟に就ても何等の智識を持たない。外國語も知らない。口

シアの文學さへ理解出来ない。一般的學問の素養もない。政治上の小問題さへ理解出来ない事が多い。然らば國家の重要な問題、政治上又は經濟上の大問題又は理解して居るやと問ふに、此點に就ても全く無智識である。又之を研究せんとする意思もない。書物も雜誌も讀まない。唯御用新聞に目を通す位である。黨の委員會へ送付せらる可き書類さへ讀まない。他は推して知る可きだ。然らば何か天才の閃きがあるかと云ふに、夫れも無い、全く鈍重である。頓智の如きは樂にしたくも無い。一生涯に一度かも知れぬが、頓智めいた事があつた。私はスターリンの近親者から聞いた儘を次に記さう。

スターリンの個人的秘書役に、名をトフスツウハと稱し非常に丈高く大に瘦せて電信柱の様な男が居た。或る日、スターリンがそのそと自分の部屋より秘書役室のトフスツウハの方へやつて來たひよつと頭を擧げて顔色を窺ふと、顔面神経緊張して何か重大事件でも考へて居る様に思はれた。素破天下の一大事突發と一同大に緊張してスターリンの一舉一動を凝視して居ると、暫時沈黙の後スターリンはトフスツウハに接近して云ふには、

トフスツウハよ。おれのお母さんが、山羊を飼つて居たが、其山羊が寸分もお前に違はなかつた。

トフスツウハはヒー、ヒー、ヒーと御世辭笑をやつたので、スターリン御大は大に満足の態で、の

そのもと自分の部屋へ引き返へした。

これ位が彼の頓智の最大限度であらう。唯彼れにもユウモアの心理状態が有ると思へば不思議な感じがする。尤も馬も猿も笑ふと云ふから、いくらスターリンだつて人間である以上ユウモア心理もあると云へばそれ迄だが。

スターリンの特性——根本性は 一、秘密性、二、狡猾無比、三、復仇心、四、「デスポット」性、五、絶大なる耐忍力である。

自己の秘計に就ては、スターリンは決して誰れにも之を洩らさず、又た何人とも相談もしない。平生、意見、思想、感興等に就て周囲の人々と談話する事も頗る稀である。又概して必要以外決して喋舌らない。非常に狡猾で決して真意を發表しない。誠心誠意を以て談話する事は絶無と云つても差支ない。又睚眦の怨も亦必ず報すると云ふ具合で、少しでもスターリンの感情を害した者あれば決して忘却しない。極く微細な侮辱を受けても、十年も忘れないで屹度報復する。其執拗なる事、實に蛇も三舎を避けるであらう。従て東洋風の豪傑にはつき物の大度量は斷じて無い。凡人の度量もない。腐つた女の様だ。

リーニンは人を見るの明があつた。曾て衆人公坐の前に於て「スターリンを信するな、一時、已む

を得ざる場合には如何なる屈辱條件にでも服従するが、必ず欺くに相違ない。用心せよ」と高言した事は、未だ黨人の記憶に残つて居ると思ふ。スターリンの特性を觀破して餘りなした。

スターリンの天性は頗る鈍重である。又萬事蠻的で家族に對しても暴君である、此の點は蒙古人の遺傳性であらう。妻子にも終日一言の話をもしない事が度々ある。家族外の人に對しては種々様々である。部下に對する態度も先方の人物智能如何により異なつて居る。同じ部下でも相當に見識を有し自尊心ある者に對しては、頗る丁寧で注意深く、又自己に必要な者に對しては親切であるが、唯々諸々たる連中に對しては暴君的態度を持して居る。命令を下す時でも頗る簡單で、たとへば茶、マツチ、紙等と名詞をど鳴る丈である。私人的秘書役等は戦々恟々として命令一下別室に飛んで行き茶又は紙を恐るゝ奉呈するのである。

スターリンの最長所は、其異常なる忍耐力である。堅忍不拔の精神である。機熟する迄は何時迄でも凝つとして待つて居る。又常に大に平靜、沈着である。彼は南方人に似ず熱する感情が無い、彼が憤怒したとか、又は聲を荒らけた事を見聞した人が一人もない程である。如何に彼が沈着で忍耐力に富んで居るかは、これ丈でも想像する事が出来る。

彼が平常の舉動及生活状態を細密に注目研究するに、彼の慾望は非常に尠ない。唯一の例外は權

力慾である。權力慾の旺盛猛烈なる事古今無比である。權力慾の爲めに、其他の人間の慾望は悉く壓服せられて居るのかも知れない。一言すれば、彼は權力の權化である。權力を獲得し、之を把握し、之を擴張する爲には、如何なる方法手段をも撰ばない。何事をも何人をも之を犠牲に供して願みない。權力＝スターリン、スターリン＝權力である。

權力獲得に關しては、流星に彼は獨特の天才智能を有して居る。

演説家としてのスターリンは全く零點である。適當の文句さへ選定する事が出来ない。辯論、座談も駄目、前辯士に對し反對説を唱ふる場合でも、適當の論據を發見する事が出来ず、ぶつきら棒に、「夫は出来ない事だ」、「我が意見によれば實行困難である」、「我意見によれば夫は不適當だ」、「吾人は反對だ」等の漠然たる抽象的反対を爲すに過ぎない。敵の弱點を衝き、或は事實、統計等を基礎として堂々の論陣を張るが如きは彼には全然出来ない相談である。

スターリンに關する尙最後の誤解を一掃する必要がある。共產黨員ですら、スターリンを以て、非常に意思が強く、且大決斷力ある様に思つて居る位だから、外國人が左様考ふるのも敢て咎むるに及ばぬが、それは非常なる誤解である。スターリンの様に非常に注意深い者は、世界の政治家中にも頗る稀である。黨議に先つて一事件を決定する迄は、スターリンは非常に永く考へる。實際いやになる

程考へるが、下手の考へ休むに似たりで、何んの役にも立たない。而して頗る多くの場合に於て遂に自らは非善惡を決定する事能はず、他人の意見に追従して居る。彼は唯附和雷同してゐるとしか思へない事が度々ある。

表面より見れば、スターリンは一種特異の大世界觀を有し、各大問題も其世界觀を基礎とし、論理上其可否を決定し、そして一旦かうと決定すれば、斷乎として他人を自己の意見に屈服せしむる様に思はるゝが、事實は全く反對である。彼れには世界觀も無ければ、論理的根據もない。彼は總ての事に就ては常に受身である。政治部會議の場合に於ても同様である。唯一の例外は、權力に關する問題である。權力維持に關係なき問題に就ては、衆議に従つて平氣であるが、苟も彼の權力を傷ける様な問題に對しては、斷乎として反對し、一步も假借せない。

此の如くスターリンは、自家の卓見もなければ學問もなく、演説も下手、討論も駄目、一個獨立の政治家としては全く價值なきに拘はらず、遂に大露の實權を掌握し、今尙ほ之を確保して居るのは實に一の謎である。

古來、凡庸の士にして一時の僥倖から、天下の權を握り得た者も少くない。ダントン、マラ、ロベスピールあり。董卓あり、安祿山あり、光秀あり、世界各國の史に幾多の實例を見るが、その何れも

永く権力を保持し得ず、覇者となつてまた忽ちにして天下を失ふたのである。しかも凡庸の士たるスターリンが今尙ほ大露の實権を掌握して天下を睥睨し、其地位は大磐石と云ふに至ては、そこに大なる理由が無ければならぬ。

彼は素より大天才ではない。然し乍ら一種特別の才能を持つて居る。彼は抽象的、學術的、理論的問題に關しては常に恐怖の念を抱き、且之を嫌惡して居るのは、要するに彼に學問的素養が無い爲めである。從て此方面に關する彼の才能は零である。スターリンの智識は頗る簡單で、實際的で一言すれば、ロシアの百姓的である。從て彼の腦髓は各種の思想や議論の爲に攪亂せられて居ず、一種透明な點があると思はる。此透明な點がある爲に、各種の問題に對し獨斷的に實行的に決定する傾向がある。然し彼の腦髓は、多數の問題を快刀亂麻を斷つ様に發達して居ないから、又た彼は自分の弱點を充分に悉知して居る。だから、多くの問題に關係する事を避け、自分の智力の及ばざる所は成る可く之を放棄し、そして自己の利害、權力に關係ある問題文を捕へて充分の考慮を廻らし、一旦之を決すれば何處迄も勇往邁進するのである、これが即ち彼の特長——「健實なる腦髓」の然らしむる所であり、單にこれあるが爲に實権を掌握し得たのである。少々問題が抽象的になり、理解し難くなつたから、實例を擧げて説明しやう。

千九百二十三年—二十四年の頃、黨政治部の會議に於て彼は大に苦んだ、と云ふのは、彼は會議に於て討論に仲間入する事が出来ない。何となれば議題を十分に理解する事が出来ないからである。乃ち彼は辛苦慘憺の後彼れ一流の戦法を試みた。討議の際中には彼れは一言も發言せない。沈黙して諸議員の議論を謹聴した。討議終末に近づき、どの議論が多數であるか目算の立つ様になつた時、彼は漸く立ち上り、勝ち相な議論に對して簡單な賛成演説を爲したのである。討論も終はり、いざ決議となれば、第三者より見れば彼れの議論が勝利を獲た事になる。此の如くする事數十回、百數十回と度重さなるに従ひ、始めは彼を馬鹿にして居た人々も、スターリンの意見議論に對して重きを置く様になつた。何となれば彼の意見は常に可決採用せらるゝからである。スターリンの此秘訣を知らぬ者より見れば、スターリンは實に偉い所があると思ふに相違ない。此の如くにして漸次彼は政治部でも有力者の一人となり、遂に一の權威者になつたのである。從て一般世人もスターリンは實に奥底の知れない、深謀遠慮ある偉人であると思ふ様になつた。

スターリンの特長—健實なる腦髓—が其妙技を發揮するに至つたのは、一九二四—二五年の頃である。如何にせば實権を掌握する事が出来るかと云ふ實際問題が起つた。實権掌握の方法手段はスターリン自身にも最初は不明で無論確信は無かつた。たゞ彼の腦髓の透明なる部分、健實なる腦髓の指揮

する儘に實行したに過ぎないが、それが見事に適中したのであつた。

一千九百二十四年の秋反對派との争闘が開始された。カームエフ、ジノーウイエフ、は勿論、トロツキーさへも、レーニンの戦法に従ひ、争點は政治上の懸引、政見の題目、綱領等に在りとし、各方面に於て盛んに演説を試みた。反對派も交我れ劣らじと、聲をからし、口角沫を飛ばし各所に於て論戦を試みた。丁度日本の總選舉其儘の光景、唯異なる點はロシアでは範圍が非常に廣大であつた事だ。スターリンは自分の缺點即ち論戦に加はる事は出来ない事を熟知して居たから、演壇に立つて味方を助くる事を得ないと覺悟し、極秘裡に秘書役長たる地位を利用し、黨の機關より反對派の者を放逐し、味方の者を引き入れたのである。而して戦は政見論戦に非ずして遂に黨機關内に於て決し、ジノーウイエフ、カームエフ、スターリンの三人組は凱歌を奏したのである。然し、彼等はスターリンの秘密を覺らず、唯自分等の論戦が勝を制したものと思ひ、得々鼻を高ふしたが、スターリンは、自己の秘計圖に當りたるを知り、之を嚴秘し、窃かに毒牙を磨き、更に好機會の來たるを待つた。レーニンの死後露國內の形勢は一變した。レーニンは大衆を基礎とし、政治上の懸引政策により、人民の一部を味方に引き入れ、第三者を局外中立に立たしめ、目指す反對者を撃滅して權力を獲得した。即ち政治上の題目政策が萬事を解決したのである。所が時勢は變遷黙移し、前述の事情がスターリンを權

かに近づけた頃より、大衆と權力を結付けるものは、政治上の題目、政綱ではなく、ロシア全國を引き包んだ無數の組織即ち軍隊、ゲーペー・ウー。職業組合、消費組合、數十萬の青年共産黨、サヴェエト行政機關等であつたのである。而して此等の組織は全く共産黨に屈服し、共産黨内には中央集權が行はれ、黨全體は黨の機關に服従しつゝあつた。故にロシアの主人公は、政治上の懸引に妙を得た者でなく、黨機關を左右する事を得る者が、全露の實權者となり得る状態であつた。そして黨の機關は、黨中央委員會の秘書役長が、黨の樞要部に味方を入れて置けば、之を自由に利用する事を得る様に變化しつゝあつたのである。

此形勢の變化に着眼したのはスターリンの健實なる腦髓であつた。千九百二十四年の末葉の政戦に勝利を得て以來、スターリンは十分に自信を得窃かに組織的に此方策に向て突進した。其結果、彼は黨の機關の主人となり、從て大露の主人公となり得たのである。

今やスターリンは大赤露の唯一の實權者—獨裁者で其地位は大磐石の如く、其權力の強固なる事レーニン以上である。悲觀論者は、スターリン一派は一方右傾派、左傾派より挾撃せられ他方人民の平爆發蜂起と相待つて、今にも壊滅する様に思ふて居るが、反對派で彼を倒す可能性を有する者はただの一人も無い。何者も彼を倒す事は出来ない。其理由は如何、之を解釋するには、現代の赤露に於

けるスターリン権力のからくり及共産黨の幹部を説明せねばならぬ。而して此解釋はスターリンは何處に往くか？と云ふ重要な問題をも解釋する事になる。又ロシアを常道に復する事が出来るか、所謂改革は可能性あるかの大問題も解釋する事になるのである。

スターリンは其秘計により共産黨を手足の様に取扱ひ、黨の最高機關、及國際共産黨密計の本源たる政治部を全く盲從機關とし現今に於ては唯だ黨の規約を保存し或は内外國人の目を晦ます爲の飾物として置いて居るに過ぎない。實際上無限の獨裁者になつたが、此權力からくりの秘策の外に、彼が黨員個々に對し非常なる威力を有して居るのは、實に闇魔帳の賜物である。共産黨員には刑餘の罪人多く、又其罪惡が發表せられなくとも、大小の罪惡を犯した者は十中九分九厘と云つても差支ない。此内情を悉知せる彼は、秘書役長に任命せらるゝや、窃かにゲ、ベ、ウーに内命を下して、黨員の秘密罪惡を調査せしめ細大洩らさず之を記載して、黨員の経歴書を作り、丁寧にアルハベツト順に整理し、之を厳密に保管して居たが、現今に於ては之が非常な大部に達して居る。若し黨員にして彼に反對を試みる者ある時は、彼を窃かに呼び付け此闇魔王の過去帳を示さんか、如何に悍猛な黨員も、忽ち顔色蒼然慄へ上り彼に絶對服従を誓ふのである。何となれば若し之を發表し黨議に附せんか、彼は少くも免職、追放、甚だしきに至つては死刑に處せらるゝからである。スターリンの睨みのきくのは

想像以上である、ルイコフ、トームスキーの如き黨内の猛者連も一度彼れに睨まれて縮み上がったと云ふ噂もある。他人の生命を塵芥の如く輕んずる惡黨程、自分の生命を惜む事甚大なるものはない。動物にしてもそうだ。然り、獅子、虎、罍の如き肉食猛獸は、自己の生命を保護し惜む事他の動物よりも甚だしい。此の如く惡漢動物の心理状態を觀破し、闇魔帳を作製したスターリンの慧眼恐る可し。彼は實に權力の權化である。權力の獲得、維持、擴張に就ては、常人の及ばざる一種の天才を持つて居る。

第二章 反対派との闘争

千九百一七、八年頃だつたと考へる。赤露幹部と反対派との闘争について、歐米でも日本でもあらゆる新聞が大々的に報道したものである。そして彼等のほとんど全部は今にもロシアに大騒動が引起されるかの様に考へるのであつた。一方ロシアの新聞にも幹部と反対派との争論、政見の相異などについての記事が紙面を一杯にうづめたものである。

反対派はがうくと幹部を攻撃した。けれども彼等の紛々たる議論、演説等はかへつてスターリンの爲に有利なるものとなつた。事實上存在しない政治上の意見をデッチ上げ、これを出来得る限り誇張して反対派は攻撃したのだが、これはスターリンを利するに役立つのみであつた。

深謀限りなきスターリンは、早くもこれを見抜いた。そして反対派のむしろ滑稽に近い議論を自己の機關紙に掲載させたものである、この事はちよつと考へると不審に思はれようが、反対派を放逐するには一番いゝ手段なのである。即ちこれによつて政治上意見の相違があるといふ口實がつくられるのである。

反対派がうるさく騒ぐ間に、スターリンは少しでも不利なる者は黨の機關より放逐し、味方を部下

反対派との闘争

に引入れて結束を固める事に専念した。中央委員會を反対派の攪亂より救ふたのは、實にスターリン一人である。スターリンは勿論の事、その部下も、反対派はたゞ口先ばかりの強がり、何等の實力なき事を知つてゐた。けれど氣の早い部下は速かに反対派を撃滅せん事を要求した。が、スターリンは出来るだけ長く反対派の喧騒と論戦を永引かせんと企てた。

反対派を撲滅しこれを處罰する事は、スターリンにとつては何の手間暇もいらぬ事である。しかも、これを敢しなかつたスターリンの眞意は何處にあつたのだらうか？

公然、反対派だと名乗るを揚げ無能なるジノヴィエフ指揮の下に、何等價値のない反対論を唱へて共産黨の集會や演説會で喧騒を極める者は、スターリンにとつては蚊の鳴く程にも感じなかつたのである。彼が最も恐れ、最も警戒したものは、反対派の喧騒の中に黙々として機會の來るを待たはゆる、獅子身中の虫を發見する爲にスターリンは全力を傾注したのである。彼が反対派の喧騒を永引かせ、これに何等の彈壓も加へなかつたのは實にこの爲であり、またスターリンの深謀あるゆゑもある。

果せる哉反対派の愚策はスターリンの思ふ壺に拵つたのである。

ジノヴィエフは、再三再四、幹部に反対なる者は一人残らず戦線に立ち、極力中央委員會の多數派を攻撃すべき事を命じた。そして胸中深く秘計を抱く者即ちスターリンより見ればいはゆる獅子身

中の虫なる者が、つひにこれに呼應して立つた時は最早スターリンには恐ろしくないのである。彼等は忽ちブラックリストに記されてあるひは直ちに放逐され、あるひは反對派を全滅せしめるまで、そのまゝにしておかれるのである。

かくの如くにして、時を経るに従ひ、身中の虫を發見し黨の基礎を固めんと企てた。しかしスターリンの遠謀を知らぬ部下は、反對派の喧騒が永引くにつれ次第にあせり出し、速かにこれを撲滅されたいとスターリンに進言したのである。だがスターリンは一向彼等の言に耳を傾けようとはしなかつた。そして、いつも「あわてるな、待て」と教へた。

反對派の言論が共産黨の機關紙にデカ／＼と載せられ出した頃、ロシア國內においても事情が餘程切迫したと考へる者が少くなかつたのであるから、諸外國が事すこぶる重大と見たのも無理はない。しかし、スターリンは黨の機關を完全に握つてゐるから、如何に反對派の言論を掲載させてもその権力が微動だにするところではない、表面から見ると何だか重大な政争が行はれてゐるやうに思はれるのだが、その實スターリンの見地からすると、黨の機關内より不純分子即ちスターリン派に敵意を持つものが漸次驅逐され、同時に味方、部下が益々増加する結果となつた。これを短くいふと、政争の喧騒は黨の淨化を助けたといふ事が出来る。



ンリーハア

スターリンの計畫が見事圖に當り、その最も恐れた身中の虫が、いよ／＼全部發見されるや、スターリンは一撃の下にジノヴィエフ一派の反對派を粉砕したのである。つゞいて昨年即ち昭和四年の春から冬にかけて、紛糾を極めたいはゆる右傾派も、スターリンの秘策を知らず、一敗地に塗れ。その首領株たるルイコフ、ブハーリン、カメネフ等は見苦しくも、謝罪狀を公開してスターリンの膝下に屈服し、漸く流刑を免るゝを得たのである。

スターリンの権力と地位とは今や確定された。よし黨内において、左右兩派の動きがあるとしても——實際にあるのだが——非常な天變地異か、若くは外國との激烈な戦争が

ない限り、スターリン及びその一派の勢力は微動だにしない事をこゝに斷言する。スターリンは今や赤露の権力を掌中に收めた。しかしながら、彼が今日の勢力を得るまでには決して生易しい事ではなかつた。時には非常な危機に出會した事もある。今しばらく過去に遡つて、その

大要を記して見よう。

一九二三年の終り、レーニンは病を得て隠退した。よつてジノヴィエフは共産黨の參謀長格となるのだつた。一九二二年から三年にかけて、彼はレーニンの秘命に従ひ、インテリゲンチヤに對して闘争を開始し、黨内においても教育ある者を排除せんと企てた。

スターリンもまたその秘命に従ひ、黨内の機關から教育階級を驅逐するに盡力すると共に、他方ひそかに味方、部下の選擇に腐心するのであつた。

この事は、権力から知識階級を遠ざけるにあるのだから、黨内のインテリゲンチヤは、非常な不満を抱き、二十三年の秋頃には、彼等の不平が漸く極度に達し、まさに共産黨の危機となつた。

この時分黨の教育ある部分において、最初からの黨員だつた者は甚だしく、その大部分は革命後入黨した青年であつた。これはいふまでもなくロシアの青年にして政治に關係したいと望むなら、共産黨に入黨する外全く方法がなかつたからである。そして當時のこれら青年黨員は、その政治的趣味に驅られて共産黨に加はつたものゝ、心中共産主義に反對の意見を抱くものが大部分を占める有様であつた。従つて彼等は機會にあらば右傾する傾向を持つてゐた事は事實である。

そしてまた、黨内において中央集權が行はれつゝある間に、これら教育ある青年の集團が反共産主

争闘のと派對反

義の重要因子となりつゝあるのだつた。革命戦を漸く終へたロシアを、またも反革命に導く事の出来る力は、實にこれら知識階級たる青年共産黨員以外にはなかつた。

レーニンは早くもこの流れを察知した。彼がひそかに知識階級征伐の命令を發したのは一にこの爲めである。

こゝにおいて、黨内の青年達は憤つた。二十三年の秋に至つて。彼等の不平と不満とは俄然爆發し、黨の中央委員會と猛烈なる衝突が始まつたのである。青年反對派の旗幟は鮮明を缺き、且彼等は黨首もなければ、また何等の組織もなかつた。しかしながら彼等はよく戦ひ、モスコウ委員會において多數を占め、モスコウ附近の地方委員會等においてもその秘書役は彼等の手中に歸するのであつた。

しかしながら彼等の最も欲したものは、頭腦ある黨首であつた。適當の指揮を受けて行動しない限り、最後の勝利は覺えない事を、彼等は知つてゐたのである。

この時、トロツキーは如何なる態度をとつたかといふ事は、甚だ重大であり且興味深い事である。當時のトロツキーは、そのすぐれた才能により、赤軍内にも黨内にも、非常な人望を集めてゐた。若しも彼が、青年達の黨首として起つたであらうならば、ナボレオン流の變革をもたらす事は容易であ

事なく、終始沈黙を續けたものと私は考へてゐるのである。
 青年黨は何とかして、トロツキーをその首領に戴かんものと苦心した。けれどもトロツキーは前述の理由により頑として動かさず、彼等の願ひを素氣なく拒絶した。一方トロツキーを驅逐せんとするジノヴィエフ、カリーメネフ達は、今こそ絶好の機會であると考へたのである。即ち反對派をトロツキ

んかといふ問題は、一切彼の眼中になかつたのである。元來が先見の明を持つてゐた彼の事だから、ナポレオンの變革が可能であり、またこの變革のため共産主義革命が終りを告げる事になるといふ事を、想像してゐたものと私は考へてゐる。
 しかしその結果彼自身はどんな立場におかれるか、といふ事、即ち彼自身の利害得失について深く考慮をめぐらしたに相違ない。そして恐らく次の二について熟慮した事であらう。
 一、彼はレーニンと共に十一月革命に關する責任がある。二、彼はユダヤ人である。従つてよし彼が果斷の下に赤軍を率ゐ、青年黨を幕下として政權を乗取り、方向を右に向けたとしても、彼の權力和權勢が永續する筈はない。長くも二三年の後にはロシア國民的思想が旺盛となりユダヤ人である彼が放逐さるべき運命に陥るであらう事は明かである。
 トロツキーは、この二つ、わけて第二について深い思慮をめぐらした結果、折角の機會にも乗する

つたらう。

そしてジノヴィエフ、カリーメネフ及びスターリンの三名は、極力トロツキーを攻撃し、彼を權力より遠ざけんものと腐心した事は明白だつた。従つてトロツキーが斷然反旗を翻して起つとしても、



一部の者が唱へる如く、臆病者であつたらうか、また右傾する事を欲しなかつたであらうか、そこに何等かの理由がなければならぬ。
 今にして、當時のトロツキーが懐いてゐた考へを推察すると、ロシアの將來とか、民衆の幸不幸な

何人も不思議に思ふ者はないばかりか、赤軍は勿論の事、これらの幹部反對派は喜んでトロツキーの旗下に馳せ集まつた事であらう。
 トロツキーにとつては、またと得難き好機だつた。その機會だに握つて起つたなら、彼は全露の實權を易々と手中に收める事が出来たと考へる。しかも彼は全く沈黙を守り、拱手傍觀の態度をとつたのである。果して彼は

ズムとなし、トロツキーを彼等の首領であると毒づき、盛んにトロツキズムを攻撃したものだ。しかし、これは單なる一方的論戰なるに止まり、トロツキーはあくまで沈黙を守つた事は世人の知る處である。何故にトロツキーはかくも沈黙を守らねばならなかつたか。

若しも、トロツキーが論戰の渦中に加はるならば、彼は公然と青年達と共に反對を名乗り出るか、しからざれば反對派でない事を斷然表明するか、何れかの一つを選ばねばならなかつた。彼が公然反對を唱へ得なかつた理由は、既に前回に説明した通りである。しかも反對派でない事を公表し得なかつた理由は、彼を首領に戴かんとする一派即ち赤軍と、教育ある青年共産黨員の人望を失ふ事を心配したからである。

その結果は、いふまでもなくトロツキーをして沈黙を守る事を餘儀なくさせたのであつた。トロツキーは沈黙を守つた。そして赤軍や青年黨員の期待にそむいて首領たる事を承諾しなかつた。しかしながら青年黨員は、トロツキーを首領に戴く事も出来ず且見るべき組織がなかつたにも拘はらず、彼等は素晴らしい勝利を獲得したのである。

だが、この時スターリンの怪腕が縦横に揮はれてつひに形勢を挽回するに至つた。

トロツキーが赤軍でも引連れて反革命を執行しない限り、闘争の勝負は黨の機關を手中にをさめる

かどうかによつて決定されるであらうといふ事を、ジノヴィエフもカーメネフも、反對派も幹部派も見抜き得なかつた。

だがたゞ一人、スターリンだけは、その實際的頭腦から割り出して、黨の機關が闘争の最高點であり最も重要な役割を演ずるといふ事を明かに見てとつたのである。従つて彼はたゞ一路黨の機關から反對派を追ひ出し、味方を引入れる事に努力するのだつた。その目的を遂行する爲には、手段も方法も選ばなかつた。そして中央委員會の秘書役長といふ樞要な地位は、彼の目的遂行に非常な好都合だつた。

カーメネフ、ジノヴィエフ達が口角あわを飛ばしてトロツキズムを攻撃し、トロツキーがその攻撃の中に依然深き沈黙を続ける時、スターリンは着々と目的を遂行しつゝあつた。彼が目的を達する爲には毫も手段と方法を選ばなかつたといふ事は周知の事實であるが、便宜上一の實例をあける事にしよう。

ナザレーチャンは、スターリンに取つては實に、秘書だつた。彼の怪腕はスターリンをして今日あらしめた一の力であつたともいふ事が出来る。スターリンはナザレーチャンの手腕を見抜いて黨の機關紙「プラウダ」に派し「黨生活部」の支配人たらしめた。黨生活部といふのは、黨の組織内にお

ける闘争の結果を黨に報告するのが重大な職責である。

ブラウダ紙に入つたナザレチヤンは物凄い活躍を行つた。彼は中央委員会をして常に優勢を保たしめる爲、ひそかに一の奇計をめぐらすのであつた。即ち黨の一集會が中央委員会に對し反對の決議を行ふやうな場合には、實際の投票結果がどうあらうと頓着せず、これを中央委員会に有利なるやう勝手に變更しブラウダ紙に掲載したのである。

例へば中央委員会に反對五〇〇賛成一〇〇あつたとする。彼はこの數字を逆に賛成五〇〇、反對一〇〇に變更し、紙上に公表したのである。だから實際においては反對派が勝を占めてゐるにしても、紙上で見ると幹部派が勝つてゐるやうな結果になる。これを言換へると、表面的に見て常に中央委員會が優勢であるかに思はれ、反對派の意氣はますます消沈するに反し、幹部派の氣勢は次第に上るのであつた。

處が、スターリンの部下にユーリヤクと呼ばれる男があつた。派はひそかに氣脈を反對派と通じてゐるのである。

ユーリヤクは小才の利く男であつた。彼はブラウダ紙に入つたナザレチヤンに何等かの奇計があるものにとらみ、巧みにブラウダ社に入込んだ。その結果、ナザレチヤンが前述の如き策略を遂

行しつゝ、ある事を知つたのである。そこで彼は、證據物を懐にしてトロツキーを訪れ、この事實を訴へるのだつた。

こゝにおいてトロツキーは、ピヤタコフ及びラーデツクの同志と共に、政治部に對し嚴重に説明を



一キスムト老元黨産共

要求した。政治部でも、相手が相手であるだけ、捨置く事もならず、中央委員会をして、事件の調査に當らせる事となつた。

しかしながら、この中央委員会なるものは元來スターリンの従順なる機關であつた爲め何かと口實を設けては調査を引延ばした。そ

としてナザレチヤンを告發した。スターリンは表面あたかも驚いたかのやうな風を装つて、不都合だがそれはあくまでも表面的の芝居に過ぎなかつた。スターリンは裏面においてはこつそりと手を

廻し、ナザレーチヤンをコーカサス委員會議長に昇進させたのである。彼がモスコウを出發する頃には最早その任務を十分に盡くしてしまつたのだから、今更トロツキーが抗議したからとて何の役にも立つ筈がなかつた。ナザレーチヤンは、恐らくコーカサスで長い舌を出してトロツキーをあざ笑つた事であらう。

かうした方法により、スターリンは黨の機關を掌中にをさめ、反對派を撲滅するであつた。と同時に黨の内部から、共產主義に反抗しこれを滅し得る唯一の力は、政治界より全く失はれたのである。實に二九二三年秋の騒動は、ロシアの運命を永久に決したといふも過言ではなからう。

この騒動があつて後も、反對派はしばしば騒いだ。しかしながら何れも微弱なものであり、二十三年のそれと比較すべくもない。むしろ彼等が騒ぐにつれて黨内に残る知識階級は驅逐され、スターリンの危険と脅威はそれだけ減少した事になつたのである。

一九二五年の終りカーメネフ及びジノヴィエフは、スターリンの爲めに權力から遠ざけられた。彼等の憤りはいふまでもない。だが自らの力量を餘りにも買被つた彼等は、スターリン反對の名乗を揚げ黨大會において醜雄を決せんとしたのである。しかしその時は最早スターリンの敵ではあり得なかつた。彼等が如何に惨敗したかは、今更こゝに記す必要もなからう。

第三章 スターリン權力のカラクリ

一 權力の推移

赤露の直相を知るには、先づ第一にその骨格の構成と變化とを研究調査する事が必要なのである。赤露全土に互つて組織構成された共產黨の組織は即ち赤露の骨格で、その骨格の樞要部は共產黨の機關であり、共產黨の機關の中樞は即ちスターリン權力の「カラクリ」なのである。だから結局スターリン權力の「カラクリ」を知らない者は、赤露の真相、伏魔殿の秘密を知らない者といつて宜いのである。

スターリン權力の「カラクリ」を説く前に、先づスターリン權力を構成した作用を説明する必要がある。其作用は之を三段に分つて説明するを便とする。

第一作用、「サヴェート權力」なるものは既にロシアには無い。「サヴェート、ロシア」は既に滅亡したと云ふも決して新奇、矯激な評ではない。地理的大ロシアに於ては、共產黨の絶對的全能の權力があるのみで、あらゆるサヴェートの機關、職業組合、その他官廳、設備等は悉く黨に服従して居

るのである。サヴェートの中央執行委員会、各人民委員会（我が各省の様なもの）等は悉く共産黨の中央委員会に屈服し、サヴェートの機關は、共産黨の中央委員会の政治部に服従して居るのみならず、各州、縣に在るサヴェートの官廳は、州、縣の黨委員会に服従し、郡に於ても工場に於ても、行政及經營は黨の細胞に服従して居る。サヴェートより共産黨への權力の移轉は、即ち第一段の作用であつて、赤露の政治的生活のあらゆる現象を研究する場合には、頭中に之を明記して置く必要がある。そして此作用は、上部より漸次下層に及んだ事も忘却してはならぬ。千九百十八年—十九年頃、黨の會議が表面上、政治的權威者である様に見えたが、然し實際に於ては、千九百二十二年迄は人民委員会が權力を有して居た。千九百二十二年—二十三年に至り、中央に於ては、黨の政治部が人民委員会より全く權力を奪取し、人民委員会は單純なる事務實行機關となつた。此作用は漸次下層に及び、黨の州委員会は千九百二十三年—二十四年頃州の權力を掌握し、二十四—五年頃縣の黨委員会は縣の權力、郡の黨委員会は二十六年頃、而して最後に二十七年頃、サヴェートの官廳は、黨の最下層機關、即ち黨細胞の爲に全く其官廳を奪取せられたのである。總ての官廳、權力が黨の統一集中せられたる最後の道程を讀者に明瞭ならしむる爲に一州を舉げて之を示さう。

一千九百二十七年春、黨の中央委員会は「サヴェート及其他官廳の行爲に對し、其長たる黨員は

責任を負はず、其官廳に關係ある黨員全部（即ち黨細胞）が責任を負ふ」可き旨の秘密命令書を廻付して以來、細胞への權力推移が容易く且速かに實現せられた。常識より判断すれば、中央の官廳、たとへば、人民委員会（我が省）の主人公が黨細胞の部下であるのは奇怪事である。國家の財政は誰が



フノハーユリア臣大藏大

財政に關する報告を爲す可しと提言した。大藏大臣はその提言に従ひ報告を爲したが、細胞の辯士約二十人（彼等は下層の黨員で無學半開）は、財政の何ものたるかを理解せぬが、兎に角、大藏大臣の行爲を嚴酷に批評する事が彼等の權利義務なるかの様に誤解し、無茶苦茶な命令的決議書を大藏大臣

之を司る可きか。大藏大臣（財政人民委員長）か又は細胞か、諸外國に於ては大藏大臣が無論財政を管掌するのであるが、ロシアに於ては黨の細胞が其任に當つて居る。常識を以て判断の出來ぬのが赤露の特徴である。千九百二十七年の夏、人民財政委員会の「黨細胞課」は人民財政委員長（即ち大藏大臣）プリユハーノフに對し、細胞の總會に、

につきつけた。省の役人ブズエッキーは大に驚き、全く財政を理解せぬ者が財政を管理するの不可なる所以を、細胞に向て敢然申し出た、其後一ヶ月も経たない中にブズエッキーは細胞の秘書役より遠僻の地へ左遷された。大蔵大臣は此勇敢なる部下を辯護する事も出来なかつた。爾來ロシアの財政は全く細胞の手に歸したのである。

第二作用、右は第一作用の概略で、赤露研究上重大事件であるが、第二作用も決して観過してはならぬ。第二作用とは、党内に於て、権力が漸次黨の機關に移轉した事である。赤露に於ては總ての黨員が権力に關係を持たなくなつた。微分作用(Differentiation)が常に行はれ、今尙ほ實現せられつゝある。此徴候は従前より現はれ、漸次、黨の機關内に椅子を占むる黨員のみが實際上權勢に關與し、其他の黨員は各種の問題の決定に參與する事を得ず、段々權勢に遠ざかり、單純なる事務員に過ぎない様になりつゝあつた。

此第二作用は、略言するならば第一作用の半面なのである。サヴェートから(人民會議)共產黨に權力が移轉した場合に、其権力は實際上サヴェート官廳の長たる黨員より、黨の機關を組成する黨員に移つたのである。一例を挙げれば、チエリンを其長に戴いた外務省が、外交問題を決定するのではなく、中央委員の政治部が之を決定し外務大臣以下悉く實行役人たるに過ぎない。教育事業も

同様、文部大臣ブノフ以下文部省が教育問題を決定するのではなく、中央委員會の煽動宣傳部が之を決定し、大臣以下屬僚は、此決定を實行するのみで、何等の決定力もないのである。

第一作用の重大なる所以を理解すれば、第二作用も亦赤露の内幕を知るには大事件たる事を了解するであらう。権力が、共產黨全體でなく、其一小部分たる黨の幹部即ち黨の機關に集中する事は、全露に亘り権力が益々中央に集まる作用、即ち中央集權を益々確定的ならしむるものである。赤露内に於ては、全く権力もない、自由もない人民の大衆が住居し、而して此大衆は各種の官廳及組織(會議、職業組合、デーベーター、赤軍、消費組合、青年共產黨等等)の無數の網を以て抱き締められて居るが、總て此等の官廳組織等は、共產黨に服従し、共產黨全體は又黨の機關に服従し、権力は益々中央に集中され、遂に少數の點に集まつたのである。

第三作用。以上の趨勢の結果として第三の作用が起つた。即ち権力は、黨委員會より黨の機關に移り、黨の機關より委員會の秘書役の手に移つたのである。換言すれば、黨細胞に於ては、實權は其課より秘書役に移り、縣、州の黨委員會に於ては、委員會、局より其秘書役に移り、中央に於ては、中央委員會より政治部、政治部より、中央委員會の秘書役長たるスターリンに移つたのである。

此第三作用は、漸次時日を追ふて行はれ、先づ第一に中央より始まつた。千九百二十三年二十四年

頃には、権力は政治部ではなく、實際上、ジノウイエフ、カーメネフ、及スターリンの三人組の掌中に在つたが、千九百二十五年の末葉、スターリン一人が實権者になつたのである。州及縣に於ては、實権は千九百二十五年二十六年頃、州縣委員會の秘書役の手に移り、郡に於ては漸く千九百二十七年頃細胞秘書役の手に歸した。現今のロシアは即ち實に前代未聞の秘書役長專制の時代である。

以上の作用を十分に理解する事は、とりも直さず現代赤露の重大問題を解決する鍵を握ると同様である。

此作用は約言すれば、全露の全権を徹底的に獨裁執政官 (Dietator) の一本に掌握せしめた。而して執政官の助役は委員會の秘書役である。其他の黨員は、スターリンとの距離の遠近に従ひ、権力に參與する程度に差等を生ずるのに過ぎない。

以上スターリン権力「カラクリ」が構成された事實——作用を歴史的に述べたのが、左に如何なる方法、策略を以てスターリンが實権を掌握したかを説明しよう。

二年に一回 (普通大會は一年に一回)、全露共產黨大會が莫斯科に開催さる、を例とす。此大會は、提案や、政治的議論を戦はす爲に召集せらる、ものではなく、又は政治の大綱を決し、或は演説をな

す爲めでもない。否、世人を欺瞞するが爲めに政治問題を議論し、或は經濟政策に關し意見を述べること事はあるが、これ皆當局が豫め決定した範圍内で大言壯語し、其實は政治部の原案を鵜呑みにするのである。大會の取扱ふ最大重要な事項は、黨中央委員會各員の選舉である。そして新中央委員會は、其秘書役長及政治部各員を選舉する、故にスターリンが其権力を保持する爲に必要な條件は、中央委員會に於て、多數の味方、部下を有する事である事は明白である。中央委員會に於て、多數の味方、部下を有する場合に於てのみ、自己に盲従する政治部員を選定し、及秘書役長 (即ちスターリン自身) を選舉する事を得るのは自明である。

溯つて、中央委員會に於て多數の味方、部下を有する爲めには大會に出席する者の多數が自分の味方、部下であらねばならぬ。然らば如何なる方法策略を以てせば、大會に於て多數の味方、部下を有する事が出来るか、これが即ちスターリン権力の「カラクリ」の實體其もの、問題なのである。

ニ スターリン権力「カラクリ」の實體

スターリン権力の實體は——重要な點——先づ第一に黨の機關内に自分の味方、部下を撰定し置く事である。

スターリンは、政治上、經濟上の問題に就ては、餘り興味を以て居ない、否、政治上、經濟上の大問題は、理解出来ぬと評する方が適切である。然し彼は毎日、机に倚り、或は廊下を徐歩し乍ら頻りに考へて居る。何を考へて居るか、唯黨員の撰定に就て頭が一パイになつて居る。彼がレーニンの死ぬ前、中央委員會の祕書役長に任命せられて以來、實権は漸次黨の機關に集中され、黨の機關を左右する爲には、即ち實権を掌握する爲には、黨機關内に、自分の味方、部下を配置し、自己に反對する者、又は頼むに足らない者を遠ざける事が甚だ緊要である理由を悟し、爾來此事にのみ熱中し始め、數年間辛苦慘憺の結果、遂に其目的を達し實権を掌握したのである。

州、縣に於ける黨機關の上層部に、スターリンが自分の味方を植付けたとせよ、此上層の黨員は全露共産黨大會に出席する權利と名譽を有するものである。大會に出席者の大部分が味方だとすれば、大願成就、もう占めたものだ、大會に於て選舉する中央委員會、次で政治部員及祕書役長の選舉も意の儘である。チクタイトルも隨意だ。此點がスターリン權力「カラクリ」の根本義である。斯く打明ければ實に簡單明瞭である。此簡單明瞭なる事情を、下層の陣笠連が察知せないのは致し方ないとしても、黨の元老たるトロツキーも、ジノウイエフ、カメネフ、ブハーリン、ルイコフ等も之に氣が付かなかつたのは不思議である。又彼等に取つては不覺千萬と云はねばならぬ。序に大會の内幕を

暴露しやう。

大會が鵜呑みの議事を了はり、愈々其大團圓の重大幕—中央委員會々員の選舉日定に入つたとする。是より先き、スターリンは中央委員會々員全部及大會出席者の指導者たる州、縣委員會の祕書役等を別室に召集して新會員候補者全部を選定し、其姓名を印刷し、之を大會の決議に附するのである。大會の議員は、右候補者の姓名を塗り消し、其代りに他の姓名を記入する事を得る權限を有して居るが、實際上は御無理御尤で、スターリン撰定の候補者全部が當選するのを例とする。と云ふのは、大會出席者は豫め其筆蹟を取られ、スターリンが嚴重に之を保存して居るから、選舉は無記投票を原則とはするが、改竄者は其筆跡により直ちに發見せられ、後日ヒドイ目に遭ふから實際は改竄する者はなく、印刷に附せられた候補者全部が當選するのである。萬一、二三の變更があつても大勢には少しも影響を及ぼさない。

第一段の最も重要な中央委員會の選舉が終了し、其結果スターリンの味方が大多數を占めたとすれば、新中央委員會が選舉する政治部員及祕書役長の選舉は意の儘である。スターリンの「カラクリ」の實體は大略右の通り。打明けて見れば何人の變哲も無いが中央委員會へ味方部下の大多數を入れる迄の實際上の苦心慘憺は、並大抵ではない。スターリンは之が爲めに、

毎日朝から夜迄、脳漿を搾り、全露に亘り黨員特に上層黨員の一舉一動に對し、大なる注意を拂ふて居るのは當然であるが、其苦心慘膽は大に買つてやらねばならぬ。

西歐諸國に於ては黨政治部を目して共產黨の最高機關なりとし、全露の實權は政治部が掌握して居る様に思つて居るが、其實際を見れば政治部は單にスターリンの命令を遵奉する無力の看板に過ぎないのである。歴史的に、ロシアの實權者—及政府が如何に變遷したかを示せば左の通り。

千九百十八年—廿二年頃 人民委員會
千九百廿三年—廿四年頃 政治部
レニン時代—レニン專權

千九百廿四年—廿五年頃 三人組……ジノウイエフ・カーメネフ及スターリン
千九百廿六年—卅一年頃 祕書役長……スターリン專制

政府委員—(大臣級)

千九百十八—廿二年……人民委員會員

千九百廿二—廿三年……政治部員

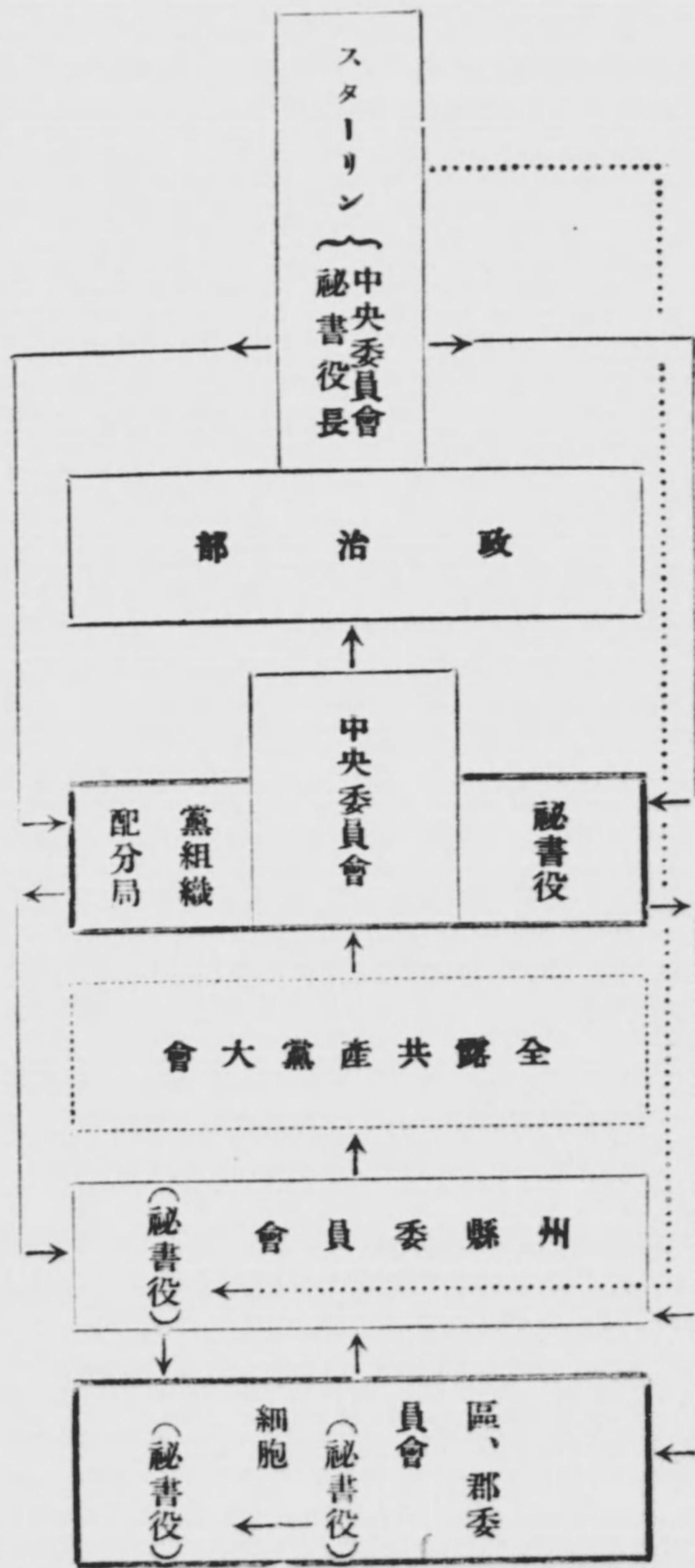
千九百廿四—廿五年……政治部員三人組

千九百廿六—三十年……スターリンの部下助役、即中央及州縣委員會の祕書役等

右の様に赤露實權者の内部は變化した。名は勞農政府、プロレタリア獨裁と稱するが、それは全く嘘の皮で、實際は蒙古人種の一たるグルジャヤ人スターリンが全權を掌握し、彼に盲従する少數の共產黨員が彼を助けて一萬數千萬の民衆を苦しめて居るのである。

レニンの死後所謂幹部反對説は、スターリンの政策はマルクス主義に反す、或はレニンの遺志に背いて居る等と口實を設けて反旗を翻がへし、屢々喧騒を極め、諸外國では頗る之を重大視して居たが、政策に關する實際的の大相違は殆んど發見する事を得ない。政策上の反對は唯表看板に過ぎず、其實は全く醜惡なる權力の爭奪である。そして反對派は、スターリン權力の「カラクリ」を知らないで、唯議論や演説を以て勝を制しやうとしたが悉く失敗に了はつた。スターリンを屈服するには、先づ第一に黨の機關を占領し、之を味方にする必要あるに拘はらず、反對派は全く之に氣付かず唯徒らに蟬騒蛙鳴を極めたが、スターリンは其間悠然として黨の掃治を爲し、自己の不利なる者を放逐して、部下を各地黨委員會の樞要部に入れ、益々其地盤を固め、遂にレニン以上の鞏固なる權力を獲得したのである。昨年所謂右傾派(スターリンの極端なる共產政策に反對し其緩和を希望した一派)ブハリシ、ルイコフ、カーメネフ等の鏘々たる共產黨連中が、轡を並べ、スターリンに向て突喊した秋には、諸外國人は勿論、祖國復興の爲めに拾數年來辛苦慘憺中のロシア亡命の知識階級の大

ゲー、ペー、ウーの嚴重な綱に引懸かり、直ちに風の様に捲り潰されてしまふ。かう云ふ風なわけでスターリン権力は益々鞏固で微動たもせないのである。非常なる天變地異か、又は外國との大戦でも無ければスターリン政權を倒す事は不可能である。内部の政治問題位ではスターリンを動かす事は全然出来ない。政治の善悪、人心の向背は、スターリンには何等の刺戟をも與へ



部、及獨逸隨一のロシア通セツフェルすら、此政戰を重大視し、今にもロシアには革命が勃發するかの如く期待して居た。私は之に反し、右傾派の敗北は、唯時日の問題であると高をく、り毫も念頭に置かなかつたが、果せる哉、スターリンは、反對派の喧々囂々を極むる間に、着々黨の淨化を行ひ、機熟するや一撃の下に右傾派を粉碎した。彼等の敗北は實に悲惨を極め、ルイコフ、ブハリン、トームスキー、カーメネフ等は、自分等の議論、反對は全く誤解に基いて居たと新聞紙上に公表し、スターリンに向けて憐を乞ひ、漸く放逐、流罪を免ぬかれ、特にルイコフの如きは見苦しくも屢々集會又は新聞紙上にスターリン謳歌の太鼓を叩き、漸く免職を免ぬかれたのである。

スターリン権力「カラクリ」を一層明かにする爲に圖にて示めさう。

スターリンは州及縣の黨委員會の秘書役に、自分に最も從順な者を選定し、中央委員會の黨組織配分局は、スターリンの直接監督の下に、スターリンの腹心部下中より州縣委員會の上層部、幹部を選定する。州縣委員會の秘書役は、郡區委員會の幹事を任命する。そして郡區委員會の秘書は細胞の秘書を選定するのである。組織整然、上より下に向て貫通し、スターリンは黨機關の樞要部をしつかりと手に握り、挺でも動かない。そして黨全部に對しては常に充分な注意を拂ひ、疑はしい分子を放逐し、自己に忠實な者を選抜して居る。不平分子が事を起さうとしても、他方、全國に張りつめられた

ない。右傾左傾何ものぞ、スターリンが欲すれば、右傾も出来れば、更に左傾も出来る、資本主義を採用せんと思はゞ、それも出来ない事はない。然らば將來スターリンは右傾するか、左傾するか、一部の人士が想像する様に共産黨は改革の途に上り得るか、私は次の章に於て、スターリンは何處へ往くかと云ふ大問題に對し、大膽にも明答を與へやうと思ふ。

第四章 スターリンは何處へ行くか

前項に於てスターリン權力の「カラクリ」が、如何に構成せられ、如何に動作するやを示した、更に之を概言すれば、中央委員會の祕書役長は、州縣の共産黨委員會の祕書役を任命し、委員會の祕書役は、黨の機關、幹部、及下屬委員會の幹事を撰定するのである。此方法によりスターリン及其部下は自分等に從順なる黨員を全露共産黨大會に出席せしむる事が出来るのであるから、全露共産黨大會は實はスターリンの大會と稱しても差支ない。のみならず、前に述べた様に、萬一の場合の爲めに、候補者印刷紙配布の方法も講じてあるから、大會はスターリンの欲する儘に中央委員會員を選挙し、中央委員會は無論スターリンを其祕書役長に選舉する。

スターリン權力「カラクリ」は、此の如く至極簡單である、そして其根本義は、權力を黨の機關に集中する、一層明白に言へば、委員會の祕書役に集中する事である。「カラクリ」の實體は、組織的に黨の樞要部に自己の黨員を据ゑ置く事である。

權力の「カラクリ」は、しかく簡單ではあるが、中央委員會會員さへも、此祕密を知らない。無論彼等は、スターリンが、各所に其部下を撰定分布して居る事實を知つて居るが、此組織的撰定分布が、

權力確保の唯一の方法であつて、政治の良否、經濟政策の當否は、權力とは全く無關係である事を諒解して居ない位だから、外國人が之を知らないのは無理ならぬ事だが、然し此點を了解する事が赤露の真相を知るには第一の必要條件である。

此装置を十分了解すれば、如何なるものがスターリン權力に對し危険であり、又何ものが危険でないかも察知する事が出来、又一面、政治部の價值及國內に於ける所謂反對派の勢力を知り、他面、赤露に於ける政府當局は如何なるものを察知するを得るのである。

以上を十分諒解して後始めて共產黨の急所、致命點を發見する事が出来るのである。例令、サヴェート權力の轉覆を企てても何にもならぬ、サヴェート權力は最早存在して居ないからである、政府の大任大官等を暗殺しても何んの役にも立たない、奴婢を殺害したと同様の價值しかない。現存のチクタートル及其幕僚の權力を撃滅する事は敢て出来ない事はないが、先づ其急所を知り、何處の點を攻撃す可きかを研究せねばならぬ。

最後に「カラクリ」の内情を充分に悉知すれば、全露の政治上の方針方向を誤りなく察知する事が出来る。スターリンが何處へ行くかと云ふ問題は、取りも直さず、共產黨は何處へ行くかと云ふ事を意味し、共產黨が何處へ行くかは即ち全ロシアが何處へ行くかとの問題になるのである。資本主義へ

逆轉か、或は共產主義の深淵に向て突進するか？

スターリン及其與黨は何處へ行くか、疑もなく共產主義に向て突進するのである。一派の唱導する改革の如きは夢想だも出来ない。在外露人及諸外國人の對露觀には常に一定の標準が無い。故に表面に現はれたる出來事、現象を基礎として論評、結論を下すから正鵠を失する憾みがある、まゝ當る事あるも、當るも八卦、當らぬも八卦の類である。

閑話休題、スターリンは何處へ行くかの本問題を説明しやう。此問題に對しては二個の標準を要する
第一、スターリン自身の利害問題。

今やスターリンは全露の實權を一手に掌握して居るから、右せんと欲すれば右し、左せんと欲せば左へ向ふ事も出来るが、右するが是か、左するが非か、彼れにはマルクスの理論を理解するの頭腦がない、知識がない。又資本主義の利害得失を判別する學問もない。唯だ彼は自己一身の立場より思へらく、予は今全ロシアのチクタートルである、今若しロシアを右方へ向け常道に立ち歸らんか、諸列強特に英、米、佛に屈服せねばならぬ。予は今國際場裡に於ては、ロシアを兩手に握り世界政治上の重要な大因子となり、世界脅威の勇者である、世界五分の一の全露の重さに加ふるに、國際共產黨の重さを以てし、予の一舉一動は、世界の驚嘆凝視の的となつて居るではないか。今若しロシアを常

道に歸し、諸外國の賛同を得て權力を保持する事を得るとするも、コミンテルンを解散せねばならぬ。のみならずロシアは産業頗る幼稚且疲弊して居るから歐米の資本家の前に膝を屈し、從て國際政治上の舞臺に於ても花形役者たる事を得ず、漸く馬の脚を演ずるに過ぎなくなる。これ予の到底堪ゆる所でない、のみならず國內關係に於ても、半狂氣、無向見すの共產黨青年あり、無鐵砲に反噬するやも知れない、よしや彼等を壓迫して漸く權力を保持するとしても、予の權力が薄弱に赴くは必然である。若し左せんか、無論大露の主人公として專權を恣にする事を得るのみならず、アワヨクば世界革命の大波に乘じ、世界の獨裁官となり得る期待があるではないか、左りせん、左りせん哉」とは彼の心理状態である、此の如き心理状態は半狂氣の黨員中にも敢て慚くない様に思はる。

前に述べた通り、スターリンはマルクス主義やレーニンズムを理解し、之を批評し其是非善惡を論定する知識がない丈、却て彼等の言動を迷信し、從て世界革命の勃發をも盲信して居る、世に馬鹿程恐ろしい者はないとはこの事であらう。

右スターリン左傾説は、彼の心理状態より割り出した斷定であるが、人の心は秋の空と同様、何時如何なる場合に變化動搖せぬとも限らぬ、從て此結論も必ず一定不動とは斷言出来ない恐れがあるから、茲に一定不動の事實的標準により最後の結論を下さう。

第二、スターリン部下の撰定。

スターリン權力「カラクリ」の實體は其部下の撰定にありとは前項に述べた、即ちスターリンが如何なる黨員を採用し、如何なる人物を各樞要部に配置しつゝあるか、此等の黨員人物の如何により、スターリンが右するか、左するかの問題のみならず、何處へ行かねばならぬかを斷定する事を得る明白な標準を見出す事が出来る。

スターリンが政治部員、各省大臣級、黨委員會の秘書役等の重要な地位に如何なる人物を撰定採用しつゝあるか、ルズダーク、ミコヤン、モロトフ、フゾノフ、ウオロシロフ、リトウイノフ、ヤゴードア等を接近重用して居るのを見れば、スターリンは數年來、組織的に多少教育あり才智ある者は之を排斥し、無學無能の者を樞要なる地位に拔擢重用しつゝある事争ふ可からざる事實である事を發見するであらう。此等の人物はスターリンと個人的關係がある許りでなく、共產革命と密接離る可からざる關係を有して居る。彼等は共產革命騒動のどさくさ紛れに出身した者で、平常の時代に於ては卑劣無用の長物である。リトウイノフは小店主に過ぎず、ウオロシロフは軍曹以上の人物ではない、ヤゴードアは勘當を受けた無賴漢で、ウグラノフは裏切り者である。他は概して知る可し。スターリンの左傾、共產主義の深淵に向て猪突しつゝあるのは事實之を證明して餘りありだ。

第五章 スターリンの兩腕

前述の如くスターリンは大露の主人公である、唯一の主権者であるが、一人では何事も出来ない、如何に彼が三面六臂、精力絶倫でも、萬事を見、萬物を整理し、萬人を指揮する事は體力上出来るものではない。助役兩腕が必要である所以である、彼の兩腕は中央委員會の祕書役たるモーロトフ、及カバノーウイチである。

一 モーロトフ

日本では宜く、四天王とか虎龍とか、懷刀などと名付けるのが普通であるが、ロシアにはロシア相當のしい、こ名がある、ロシア共産黨内では、モーロトフの事を「石の背面」と呼んで居る、即ちスターリンが椅子にかゝる際、其背部をウーント石造の背面にもたれると云ふ意味であらう。彼は年四十二、三の不細工な壯漢で、御面相は上品でなく、寧ろ百姓面、面、舉動も敏捷でなく、熊の様にノソリノソリとして居る、然し非常に勤勉で忍耐力あり、権力が飯よりもすきた、此等の點は主人公に酷似して居る。外交政策及農業問題が彼の得意とする所のものであると政治部では噂して

兩腕のスターリン

のである。

彼はスターリンの後釜を襲ってロシアの主人公たる事を夢みて居る。彼は得堡大學の經濟課を卒業した男だから、スターリンよりも高等の教育を受けて居る。政治部ではスターリン太陽の後光を受けて、



スターリンの右腕 フロロモ

居るが、これは疑問だ。

ブハーリン失脚の後政策の理論部をも引受けて居るが餘り負擔が重過ぎはせない乎。彼が果して衷心よりマルクス主義、レーニンズムを信仰して居るか、これも疑問である。外面より見れば純然たる

官僚である。極く眞面目な人間で菜食主義を實行し、酒も飲まず、煙草も吸はない。然しカルタ遊びは大きく、徹夜する事もある。妻ノロジで、町人的生活をして居る。世界革命、社會主義的建設等は勿論信じて居ない様だ。然しスターリンのまねをして居れば威張れて生活の安全が保たれるから、世界革命、社會主義的建設の爲に日夜盡瘁して居る

月の様に光つて居る。スターリンは彼の勤勉、役人的従順な點を尊重して居るが、餘り信用を措て居ない。又愛しても居ない様である。彼はスターリンの家には餘り行かない。役所で毎日而會して居る丈である。スターリンの虎威を藉つて威張るから、個人的敵も可成り有る様だ。第三秘書役たるカヴノーウイチとの仲は頗る悪い。彼と度々爭論する事がある。老獪なるスターリンは見ても見ぬ振りをして居る。

政治部をスターリンの従順なる機關にする爲に大に盡力した彼は、其功勞を鼻にかけ、第二位以下の問題に就ては頑張る事もあるが、第一位の重大問題決定に就ては唯スターリンの意を迎へる丈である。黨内の経歴より見れば縣委員會の秘書役にしか當らない彼がレーニンの一聲で中央委員會の第二秘書に成り上りチクタートルの後繼者とも呼ばる、程の高位に昇進したから、黨の古參者は勿論彼を嫉視して居る。特にチチエリン、リトウイノフは大に彼を嫌惡して居る。兩人は外交問題に關し直接にモーロトフより一般方針を授けらるゝのであるから益々以て氣を悪くして居るのである。外交問題に關しては古靴屋程も智識のない彼が、傲然と訓令を與へるが、スターリンが石造の椅子によりかゝつて居る間は、一言半句も口答へが出来ないので外務大臣も次官も燒きもきして居るのは御氣の毒であるが、致方がない。

スターリンはモーロトフが凡庸の人物である事を見抜て居るが、彼の従順及勤勉を尊重して居るから、當分彼れの地位も安全であるが、彼がスターリンの後釜を狙て居る事が少しでも露骨になれば何時左遷されぬとも限らない。近來大分重みがついて來たからスターリンの後繼者たる事も出來そうだ。十年も立てば立派なチクタートル候補者だ。

二 カガノーウイチ

スターリンの左腕たるカヴノーウイチは高等の教育を受けて居ない。ロシアの南方ゴメル町の猶太人職人の貧家に生れ、生來政治運動が飯よりも好きである。彼が猶太人であると云ふ點からして帝政に反對し、革命の當初、年齢僅かに二十三歳であつたが、共産黨に入り、大に黨の爲に盡力した。人を引きつける力あり、軀軀堂々として、聲、鐘の如く雄辯家である。且時勢を観るの眼あり。其普通ならざる天才と勤勉は、若年に似ず、多數の年長者を超越して黨の幹部に迄昇進せしめた。

千九百十九年には早くもネージニゴロツドの縣委員會議長、及ゴメル職業組合の代表者となり千九百二十三年には中央委員會委員に選舉せられ黨員の進退を司る重職を負はされ、主として農村に於て働く事になつた。

千九百二十六年ウクライナ地方に於て黨秘書中に危機の生じた時、ウクライナ共産黨の秘書役長として、莫斯科より三人の候補者、モーロトフ、カヴノーウイチ、オルヂョニキイチエを推薦した時、ウクライナの代表者ベトロフスキーはカヴノーウイチを若年と侮り彼を採用した、たが、彼れは年が氣鋭であるから黙從せず、ベトロフスキーと衝突して莫斯科に召喚され、スターリンの愛顧を受け遂に現在の地位、第三秘書役の重職に任命せられ今日に及んで居る。彼の欠點は無教育なる事にあるが、彼れよりも年長の妻君が大に内助の功を奏して居る。彼れの主なる職務は黨の組織に關する仕事であるから、スターリンの例に習ひ、自分の味方を密かに引入れて居るが、若しスターリンが氣付けば大變だ、或は首が飛ぶかも知れぬから、非常な注意を持って居る事は言明の限りでない、入黨した當時は熱烈なるマルクス主義者であつたが、今や熱も少しく冷めたから、百パーセントの共産主義者であるとなれば誰か保證するものぞ、況んや社會民主黨たる妻君の影響を蒙る事頗る大なるものあるに於ておやだ。

彼の生活状態は頗る質素で小ブル的の生計を營み、細君とは琴瑟相和して居る。水泳と漕舟は彼の好む遊戯であるが御多分に洩れず、カルタ遊びも大好物である。酒は餘り多く飲まないが、煙草に至ては大好きで口から、長い吸口のある紙巻煙草を離した事がない。

若しモーロトフをスターリンの椅子の石背部にすれば、カヴノーウイチはスターリンの腕である。然しスターリンが兩名の中、誰を多く信用してゐるかとは問は、カヴノーウイチ最良の人はカヴノーウイチの信用が大なりと答ふるが、これは全然アテにならない、私はスターリンの性格より見て、鋭敏ではあるが反骨ある猶太人のカヴノーウイチよりも、鈍重ではあるが従順なるモーロトフの方が信用厚いと想像する。但しカヴノーウイチは猶太人であるからアンチセミチズムの旺盛なる今日、聰明なる彼れは大露の主人公となる様な大それた野心は抱くまいと思ふ、即ちスターリンのアト釜を狙ふ様な恐れがない點より見れば、スターリンも安心して、彼と色々な下相談を爲す事が、モーロトフよりも多い様に思はる。これ彼が、度々スターリンの住家へ參上する所以である。

第六章 スターリン権力組織の急所

國家機關及共產黨組織の樞要部に自分の味方及部下を選定するに當り、スターリンはモロトフを以て第一助役とした。第二助役は最初カシヨールであつたが、その後カガノーウィチが任命せられた。そしてスターリンは政治部の方面を引き受け、モロトフは黨の組織部の議長として其指導監督に當り、カガノーウィチは中央委員會秘書會の議長となつた。

黨の上層及幹部の選定に關し重大なる役目を演ずる者は中央委員會の組織配分局長である。次に組織配分局の次長及其助役及秘書役も亦重要な権限を有して居る。

スターリン自身は中央委員會々員、州及縣委員會の秘書役、各人民委員會長及次長(即ち各大臣、次官格)の任免を司てゐるが、これ文でも中々時間が足りないから、モロトフ及カガノーウィチが補佐して居るのである。次官級以下の大官(人民委員の同僚、縣黨組織の上層部等)は、スターリン及其兩腕の指揮監督の下に選定せらるゝを常例とする。

これによつて觀れば「組織配分局」が、如何に重要な職責を持つて居るか、判明するであらう。この局の部長、次長及助役の権限權力は益々擴大する傾向がある。スターリンは此點を充分に察知し

て居るから、モスクウインなる者を局長に任命し、表面上彼の手を経て任免黜擄を實行して居るが、モスクウインは非常に病弱で到底この重任を果たす事が出来ないから、局長の仕事は、次長が實行するのである。そして次官を補佐する者は助役なのである。助役は黨の實行事務員及州縣黨機關の幹部上層を選定する権限を有して居る。即ち組織配分局の次長及助役は、共產黨權力組織の特性により實に容易ならざる権限を有して居るのである。これがスターリン権力カラクリの急所である。若し非常に耐忍力あり組織的頭腦の持主たる野心家が、此地位の一に就き得たとせば、彼は漸次、縣の委員會の上層部に味方を入れ、遂に之を全國各地の委員會に及ぼし、數年若くは十數年の後、黨の全露大會に於て味方の大部分を得、中央委員會の改選、政治部員、秘書役長の選舉の際、味方を當選せしめスターリン一派を驅逐し、スターリンをアツと云せる事も敢て出来ない相談ではないのである。然し乍ら此陰謀秘計には、非常なる秘密、絶大なる耐忍、及巧妙なる懸引策戦が必要條件であるから、非凡な人物が出で来ない限りは、現實頗る困難である。第二の急所は、昨午行政區劃變更の結果として數十縣を廢合して少數の州となしたから、若し各州の有力なる黨員廿餘名が莫斯科に集會し一致團結すればスターリンを倒す事が出来るやうな間隙が生じたのである。然し乍ら權力の權化たるスターリンは早くも此缺陷を觀破し、各州の有力者が屢々會合する事の出来ない様な方法を講じたから、此急所たる價值を失つたのである。

第七章 ロシア人心の機微

一 ロシア大衆の政治的意向

現代の赤露に於ては言論出版の自由は絶対に無いのである。また人民はロシア特別の政治的生活と體驗により非常なる艱難辛苦を嘗め來つてゐるから、今やよく沈黙を守る事を覚え、自分の意見や考へを少しも喋らない、のみならず密告、教唆、反問及ゲー、ペー、ウー、の周密なる網と、共產權力の絶對的專横により四方八方より取り巻かれ、いつ如何なる場合に監禁或は銃殺せらるゝやも知れないから、人民は絶対に自分の意思を發表しない。であるからロシア人の政治的意向及共產か否やを知る事だけでも不可能である。それなのにこゝに大膽にもロシア民衆の政治的意向に就て執筆する所以は、聊か確信が出來たからである。

全露の津々浦々隅々迄も擴けられたゲー、ペー、ウーの巨大にして且つ細密なる情報網は、民衆の政治上に關する種々様々の事實現象を一々政治部に報告して居る。そしてゲー、ペー、ウーの結論が萬一誤解であるとしても、尙ほこの外に二つの重要な材料がある。第一、全國の政治的生活を反射

する莫大なる材料。第二、民衆の政治的意向に關する政治部の意見。この外尙ほ無念無想の直覺がある。無念無想の第六感は十中八、九的中するものである。この直覺が果して誤解であるか、ないかを私の最近蒐集した事實と参照し、無念無想の結論を茲に發表するのである。いゝ加減なあてすつほうと混同してはいけません。過激派(後に共產黨と改稱)が天下を取つて以來數年間、所謂白系露人と交戦したが、此の間過激派は、白系露人の政治的意見を無價値なものとして一顧だも與へず、政治的強敵は社會革命黨及社會民主黨なりと考へた。即ち社會革命黨の政策は農村に於て、社會民主黨の政綱は都會に於て勢力を有するものと推定したのである。しかしながら内亂鎮定の後、知識階級の政治的意見は變更しはじめた。この變更に氣が附かず、政治上の大敵、權力の競争者は社會主義黨派であると推定し血眼になつて社會黨派の後をつけ廻はつた。ゲー、ペー、ウーは徒らに空中に拳骨を振つて居た事を覺つた。各種の社會黨は恐る可き敵でもなんでも無かつたのである。その故は、過激派の政權と彈壓が、他の社會黨派の政見の擴張を妨害したと云ふよりも、社會主義、社會黨派は最早大衆の同情及後援を失つたからである。言ひ換へれば、ロシア大衆は社會主義者を信用せず、否、社會主義を嫌惡する様になつたのである。人心の機微を察しなかつたゲー、ペー、ウーの幹部は呆然自失した。

過激派—共産黨—及ゲー、ペー、ウーが其失策を悟とり、誰が、何者が大衆の同情を集め得たかを、充分に注意して研究調査中、大衆の意向は右傾した事を覺つた。そしてその中堅は、獨佛諸國に亡命したミリュコフ一派だらうと想像した。これは千九百二十三、四年頃の大勢であつたが、千九百二十五年頃には大勢更に右傾した。ゲー、ペー、ウーの蒐集した事實が、大勢は明かに益々右傾する事を證明し、赤露當局は其對策を知らなかつた。革命八年、民心は愈々益々社會主義、共産主義より離れ行くのである。これは過激派の革命が全然失敗に了はつた事を如實に證明するものに外ならない。然しながら之を公言する事は出来ない。どうすればいゝのか？

この時代に、スターリンより漸次敬遠されつゝあつたジノウイエフはとに角、過激派中の政治的戰術家と看做されてゐた。彼は此機會に乘じ名聲と勢力を恢復せんと欲し、「時代哲學」と稱する一書を著し、民衆は平等を希望するものであると、結論したのである。

政治部員一同はこの冊子を一讀して一笑に附した。彼等は高尚なる理論を了解し得る學識はないが國民の實際的生活とジノウイエフの理論は全く背馳する事を知つて居た。勞働者はその受取る可き賃銀の益々増加されん事を希望し、農民はその農經濟の繁榮を願ひ、知識的勞力者は非常に低落した生計の程度を高めんと欲し、黨員、役人、使用人等は他人を蹴飛ばしても自分等の幸福安寧を確保せん

ものと腦漿を搾つてゐる事は、三尺の童子も知る所である。馬鹿か狂者でない限りは、空想的平等を願ふ者があらうか。政治部がジノウイエフの提案を一蹴したのは當然である。だが、どうすればいゝか？、如何なる方策を執る可きか。大勢に順應して右傾す可きか。否、否、今更ら資本主義に降參は出来ない。まゝよ毒皿、左方へ突進せよ！と、滿場一致、可決したのである。

二 ロシア民衆の眞意

千九百二十六年の初葉、たゞ右傾派のみが一般民衆の同情及後援を得可き見込ありとの事實材料が山積した。政治部の實際家は之に對して實際的結論を下した。即ち、思想的方面より見れば、この右傾的事實は世界の帝國主義的思想が蘇聯邦にも侵入したものと想像し、自分等の誤れる政策が民心を失した最大原因である事は全く之を棚に上げ、右傾的思想との戰鬥に主力を注ぐ可し、と、ゲー、ペー、ウーに嚴命を下したのである。數年來日本の當局が、自分等の失政には氣が附かず、盲目的に左傾的思想特に共産主義思想に對して戰鬥を開始したのと、正反對の好一對である。

爾來、この戰鬥の外面に現はれたる事實は枚舉に違あらずだ。赤露機關新聞の公表文でも、間諜事件に連座した二十名の死刑、シユリギン及帝政派三人組の銃殺、レーニングラッド俱樂部の爆發、リ



ーキスレーケ

ロシアに實施して居る政策、主義は決して社會主義なるものではないと論定して居るが、ロシア國內の民衆はそうは思つて居ないのである。ロシアの共産黨は彼等が實行してゐる制度、政策は社會主義制度なのであると、朝から夜迄、毎日、毎月、耳にたこの出来る程に宣傳してゐるから、民衆も不知

醒して居ないのである。共産主義より國粹主義これは當然の勢であらねばならぬ。若しこの論斷を以て、餘りにドグマチックとするものならば其證據を示さう。日本人は證據裁判が好きだから。
ロシアの大衆は今や甚だしく共産主義及其他の社會主義を憎惡して居る。赤露研究中の諸外國人及ロシア亡命の人々は、共産黨が

ユビヤンカ、オベルフード、トレスト等の爆撃、晩近に至つては、砲兵工廠の重要人物たる五將軍の死刑、大學教授二百餘名の免職、北高架索十二人組の死刑、等々數へ来ればこれ丈でも大冊子を成すであらう。これ等の事件は要するに、政治部及ゲー、ペー、ウーがその最も恐る可き敵は右傾的思想であると斷定し、之に對して盲滅法に砲火を向けたる明かなる證據である。
この右傾的思想(ブハーリン、ルイコフ一派の右傾と混同してはならぬ。彼等の所謂右傾は共産線上に於ける政策の小異に過ぎない)人心の意向は、どの點迄右方に向ひ進展して居るかと問はんに、實は非常の大問題であるが、私は一種特別のロシア式ファシズム迄進展してゐるものと斷言するものである。在西歐のロシア亡命の諸名士が、社會革命黨、社會民主黨、或は立憲民主主義共和制度がロシア大衆の輿論であるかの如く推定して居るのには要するに、彼等の從來の履歴々史に囚はれたる御都合主義より出發したものと斷定する。極端なる專制帝國より急轉直下、ドン底の共産專制に墮落したロシアが、今度はその正反對に、共産主義より國粹主義へ上進するのはこれ勢である。勢の激する所中間の何ものをも許さない。ロシア革命當時私は露都に滞在して居た。連合内閣の總理大臣ケーレンスキー(社會民主黨領袖)、農務大臣チヨルノフ(社會革命黨首領)等の微温極まる政策を見て私は、ロシアはドン底に陥る可し、過激派レーニン一派が必ず天下を取る可しと斷言してロシア人の

反對激怒を買つた事があつたが、其結果は果してどうだ。天下の勢を知らない者は政治家ではない。その後辛ふじて過激派の毒手より免ぬかれフランスに逃亡したケーレンスキーが巴里に於て、ロシア亡命有志家より亡國の張本人だとして撲殺されんとしたのは事實である。彼等社會黨一派はまだ覺

不識の間に赤露共産黨の施設は悉く社會主義の制度であると盲信してしまつたのである。そして十數年來共産權の下に塗炭の苦しみを嘗め來つた實驗よりして、社會主義と云へば身ぶるひして、社會主義とはこんなものか、凡そこの世に於て最も恐ろしい、最も警戒せなければならぬものは社會主義なのであると斷定したのである。

又共産黨はレーニンの死後、彼を神扱して居る。ロシア大衆もレーニンは實に偉い人物であると信じた。しかし其結論として、一個人の人物が大英雄が世界の歴史、人民の利害休戚に如何に大なる關係を有するものであるかを確信するに至つた。だから、元來英雄崇拜の遺傳性を有するロシア人は、大豪傑出現して彼等を救済するであらうとの迷信をさへ抱く様になつたのである。此秋この際ロシアに於て最も人氣ある現代の人物—英雄が現出した。それは外でもない、ムツソリニーとフォードである。特に多少文字ある者のムツソリニー崇拜と來たら想像以上である。フォードの著書『予の生活と成功』、『今日と明日』及『ムツソリニー傳』は非常な賣行であつた(近來發賣禁止か)しかるにムツソリニーは共産主義、社會主義征伐の爲に現出した人物ではないか。ムツソリニー崇拜よりファシズム禮讚は自然の勢である。

こゝに不思議なるは、共産黨の機關紙はブライヤン、チャンパーレン、蔣介石等をくそ味噌に罵詈

謗して居るが、ムツソリニーに對しては一言一句も誹謗の言を發せないのは、彼れの人物人格に敬服し政敵ではありながら不知不識の間に頭の上からない證據ではあるまいか。天に向つて救済者の現出を待つてゐるロシア大衆が、帝政又は共和制に就ては全く無關心であるのは、一寸不思議不可解の感

を與へるが、その真相を研究すれば不思議でもなんでもないのである。十數年の長い間、共産黨の啓政をこらえにこらえ來つたロシア民衆は切かに思つて居る『帝政或は共和制、そんな名稱はどうでもいゝ。英國は元首として帝王を戴てるが英國程自由な國は何處にある。ロシアは人民會議の共和國聯邦と稱してゐるが、其實は共産黨の獨裁政治なのである。土耳其は共和國であるが其政治は嚴酷である。名義はどうでも宜い。共産專制を倒して常道に復し善政を實行して貰へばそれで澤山である、満足である。國家の代表者或は實權者の名義を帝王と稱するも、或は大統領と名付け様が、それは重要な問題ではない。若し大人物大英雄が現出して共産黨を倒して呉れるならば、その人は我々の救済主なのである。救済主が皇帝と名乗るとも我々には之を拒む權利はない。』

右の觀念は民衆心理を簡單に説明したに過ぎないが、この様な意見はロシア大多數の民衆の代表的意向であると稱して少しも差支ない。

又た國會に關するロシア人の感想は一種特別である。と云ふのは、共産黨が、國會は饒舌を弄する無用の長物である。と民衆に向つて宣傳頗る努めたその結果として、ロシア人は之を信じ國會に對しては頗る無關心である。たゞ、非常に鞏固なる中央集權の權力にのみ國政を托する事が最上であると信じてゐる。即ちファシスト權力の様な強大なる權力か或は大英雄が共産黨を殲滅し得るものと思つてゐるのである。

政治的自由に就ても一種特別の見解を持つて居る。な—に、言論出版の自由か、これは誰の爲めか過激派が再び天下を攪亂し得る爲めか。そんな自由は、サウエート市民に提供せよ。共産黨の覆の後に共産黨擡頭の道具は眞平御免だ！

ロシア民衆は獨裁政治にも反對せない。共産黨獨裁には大反對であるが、反共産黨の獨裁政治には賛成である。共産黨のゲー、ペー、ウー組織には反對であるが、反共産主義—善政主義のゲー、ペー、ウーには賛意を表するのである。

ファシスト主義氣分は、全露全人民の政治的意向と看做す事は出来ないが、反共産陣營の活動部分の意向は慥かにファシスト氣分である。全露全人民の中には、共産主義と反共産主義との中間に、受働的分子が多數存在する事は無論である。たゞにロシアのみではない。洋の東西を問はず時の古今を

論ぜず、その政治的歴史を見れば、兩極端の中間には、必ず受働的分子が多分にある。そして現代のロシアに於ては政治に全く關係のない中間分子を除き、苟も政治的趣味を持つて居るものは、十有餘年の間にこの兩極端—ロシア式一種のファシズムと、共産主義とに岐かれたのだ。社會民主黨や、社會革命黨の如きは全く其影を没した。そしてこの中間分子は内心共産黨の暴政には反對であるから、共産黨が倒れた曉には箠食壺醬してファシスト黨を歓迎するのは火を踏るよりも明かである。

三 共産黨と労働者

前に述べた様にロシア國內の政治的生活に於て活動的能動的分子の外に受働的分子が多分に存在して居る。この受働的分子の意向は如何。先づ労働階級より之を分析して見やう。

労働階級は明かに兩分されて居る。その活動的分子は共産黨が天下を取つて以來黨の方へ誘引せられ、其中昇進した者は、或は黨の幹部となり、或は役人、或は職業組合等の幹部となり、若い労働者は共産青年黨員となりましたが、其他の者は政治的には全く労働者態度を持つて居る。レーニンの死後「労働者はイーリチの黨に入らねばならぬ」との標語の下に、種々の特權を與へて頗る入黨を勸誘したが、入黨者は二百餘萬の労働者中僅かに二十餘萬人に過ぎない。種々の特權や便宜を與へたの

に拘はらず入黨者が其後も餘り増加せない理由は、要するに労働者の大多数が共産黨の主義政策に同意せないものと解釋するより外はない。

四 共産黨と農民

共産黨の農業政策程不思議なものはない。農産物生産高の増減がロシア全國民の生活に至大の影響を與ふる位は、共産黨員も知りぬいてゐるだらうが、これはまたどうした事か？ 共産黨の均等分配主義は農民の資産を殆んど全部同等にし同様に貧乏にした。然しながら人間の生活は一日も停止せない。勤勉なる農民は奮然として起ち、苦辛慘憺奮闘の結果として多少の餘裕を得人間らしい生計を営む様になつたかと思へば、鬼の様な共産黨の役人は、階級争闘の大刀を眞向にふりかざし、彼をクラーク（富農）と名付け、色々の名義の下に苛斂誅求を敢行するのである。累進農業税、地方税罰金等を始めとし遂には選舉權市民權其他公權をも剝奪せられ果ては投獄流刑とくる、誰れも働く氣にはなれないのである。生活を繼續する爲には協同農場に加入して農奴となるより外に途がない。之に反し横着、泥酔、怠惰なる農民は所謂「貧農」とあがめられ政府より色々の保護を受くるのである。勤勉なる農民より取り上げた物資の一部は、必ずこの懶惰なる横着な百姓が受取るのである。そして

共産黨は彼等を味方と信じて居る。

この様にして農民全體は農奴か或は乞食同様になつてしまふ。これ以上の悪政は誰れしも案出する事は出来まい。

農村の不良分子は、數年間の經驗の後に、共産黨力を支持し其保護の下に怠惰の生活をつける事が、働いて食ふよりもましであると確信する様になつた。

所謂「中農」（水呑百姓程度）は心中、共産黨を憎んで居るが、甚だしく受働的で沈黙して居る。勤勉なる農民—クラーク—は無論共産黨を惡魔の様で憎んで居る。特に一昨年以來共産黨が農村に於て號呼する階級的争闘の標語は、人間らしい生活を営む勤勉なる農民をいぢめる口實を作るもので愈々愈益々健全なる農民の不平不満を激發して居る。然しながら彼等の力を過信してはならない。亡命のロシア人の中には、農民の力を過信し、農民は必ず其強大なる肩を聳かして一撃の下に共産黨を倒すであらうなど、信じてゐるが、これは一の空想に過ぎない。残念ながら彼等の肩は左程強大ではない實は甚だしく脆弱である。特に彼等の缺點として、組織的に事を成す事が出来ない。ロシアの民衆は秩序整然たる共産黨の組織を見て、大事を成すには組織的行爲が必要條件である事を悟つては居るが壁に耳を有し、床下天井にも眼を持つゲー、ペー、ウーの監視の下に何人の組織が出来やうか、特に

農民には出来ない相談である。ロシアの革命を成したものは戦線と都會であつた。十月革命を清算するものも戦線と都會でなければならぬ。

都會と戦線及農民の意向との連絡は無論必要である。そして最後の勝利を獲るには農民の後援が必ず要なる事は言明の限りではないが、第一の烽火を擧げるものは必ず都會及戦線である。田舎はロシアの運命を決する事を得ない。百姓は、共産黨を倒す事は出来ないと断定するのである。

五 共産黨と知識階級

現代赤露の政治的生活に於て、最も重大なる關係を有するものは知識階級なのである。この階級の大部は右へ右へと進み、非常なる苦しい経験の結果として、社會主義の如き空想的見解を棄て、遂に一種特別のファシズムを謳歌するに至つたのである。

現代ロシアの知識階級は、帝政時代のそれとは全く面目を一新した。赤露市民の悲惨なる生活状態は實に想像以上である。外國人は勿論亡命露人と雖も其惨状を想見する事は出来まいと思ふのである。然しこの悲壯なる状態は他面大なるプラスを持て居る。數年間毎日黒パンの一片を得んが爲めに甚大なる苦心慘憺を續けて居る知識階級は、昔日の知識階級とは全く異なつた特質を持つ様になつた

のである。往昔多辯を弄して愉快さうに、のん氣さうに見えた知識階級は今や全く沈黙に陥り、一舉手一投足に就ても多大の注意を拂つて居る。赤露知識階級の生活状態の慘状はどんな形容詞を以て言ひ表はしていいか、到底紙筆を以て之を表現する事が出来ないのである。若し教養ある奉職人、小役人等が、自己及家族を飢餓より免ぬかれしめんが爲に、後生大事に其職にかじりつかんとせば、心にもなき共産主義を謳歌せねばならぬ。しかしこれとても非常に手加減が入る。餘り餘計に謳歌すれば、野心家として睨まれ、左らばとて少なければ怠惰者として讖首せらるゝ恐れがある、職務實行に就ても同様である。餘り勤勉努力しても駄目、なまければ御眼王を頂戴する。襟飾をつけるにも細心の注意を要する。餘りきちんと付けて居ればブル臭味ありと睨まれ、横にしてゐればだらしがないと嘲けらるゝ、小生意氣な女共産黨員に對しても餘り丁寧な言葉をつかつてはいけない。さればとて怒らせては大變だ。本當にやりきれない。隣人又は同居人に對しても甚大なる注意を要する。下手にすると、ある事ない事ゲー、ペー、ウーに密告さるゝ恐れがある。いゝ加減な密告をされたが最後、それが本當であらうと、嘘であらうと、ゲー、ペー、ウーにちよつと來いだ。運が悪るけりや本當に首が飛ぶかも知れない。毎時、毎日、毎夜、毎月、毎年、この様な小心抑々、戦々競々の生活を續けねばならぬ。針の山に坐はるとは、眞實之を指すのではなからうか。自殺した方がましかも知れない。

然し自殺すれば自分丈は實際安樂になるだらうが、後に残つた妻や子は餓死するか、乞食になる外行き道がないのである。生か、死か、進退兩難とは實にこの事だ。不平不満の極、一年以上も机を並べて事務に従事して居る隣者に打ち明けて見よ、この隣人は、ゲー、ペー、ウーの手先かも知れないぞ。大變々々、沈黙を嚴命するに若かずだ。

か様な難業苦業に堪えざる者は或は死亡し、或は免職され、或は極刑に處せられ、残る所の者は、心身共に充分に鍛錬された勇士のみだ。これ等の勇士は、將來何を成さねばならぬかを知り、好機會の來るを待つて居るのである。彼等は既に其行く可き場所を知つて居る。何處だ、何處だ？、反共産ファシズムの陣營！

以上の所説は、餘りに抽象的だと抗議を申込む讀者があるかも知れないから、少しく具體的に述べやう。

共産主義組織—赤露共産政策—は知識階級に對して全く古今未曾有の死巷を作つた。彼等は、赤露に於ては最早行く可き處がないのである。共産以外の組織、たとへば、資本主義組織の社會國家に於ては、才能藝術ある者には、多くの道が開かれて居る。或は政治界へ、或は實業界へ、或は教育界へ、彼等の行く可き道は多々ある。其奮發努力如何により、餘裕ある楽しい生活を營み得る期待は充分に

存在して居るが、現代赤露の共産組織に於ては、彼等の行く可き道は全然杜絶して居る。現今に於ては、知識階級は全く入黨を許されない。以前うまく入黨した者も、其戸籍身分を洗つて種々様々の口實の下に放逐された。知識階級の放逐壓迫は、組織的に用意周到の下に實行されて居る。私は昨年入露するや、各所に於て各種の新聞を披見したが、工場、學校及諸官廳等に於て大淨化をやつて居る事がすぐに目についた。その後數ヶ月の間、淨化の内情を研究調査して見ると、所謂淨化の主なる目的は、知識階級の驅逐であつた事が判明したのである。そして其中活動的分子は、ソローフカ島に流され、或は投獄、或はゲー、ペー、ウーに監禁せられた。

政府に雇はれる事が出来ないとなれば、個人的商人になつてはどうかと云ふに、ゲー、ペー、ウーは直に眼をつけ始め、多少にても餘裕が出来れば、色々の口實の下に資産は全部沒收されるのが落である。知識階級には今や行く可き道は全然無い。若しありとすれば、其唯一の道は、共産主義—共産權力憎悪あるのみだ。憎悪の極は、中間の社會民主主義等には、一顧だも考へず、共産黨の大敵たるファシズムへ直行！これは必然の勢である。帝政から共産主義へ直下したと同様に、今度は、共産主義よりファシズムへ急行。これは避くる事の出来ない勢である。そして其徴候は、前に述べた様に、歴々として私の眼底に映じて居るのである。

第八章 共產權力は何時滅亡するか

知識階級の大々多数は共產黨權力を嫌悪し、農民の大部分は共產黨を敵視し、共產黨の味方と目せらる、労働者の多数さへも共產主義に反対だとすれば、何が故に共產黨力は倒れないか、彼を撃滅するは一擧手一投足の勞ではないか。最後に、知識階級が共產黨に對し敵意を含むものとし、そして智能的勞力者、専門家が無ければ、如何に共產黨でも何事をも爲す事は出来ないのは明かである。然るにも拘はらずロシアの行政は進行し、國家經濟、國民經濟も破滅せず、どうやらこうやら維持してゐるのは何故か、自家撞着の意見ではないか、との疑問が出るのは御尤も千萬ではあるが、底には底あり、秃筆を呵してこの疑問に對する解決を試みよう。

第一、知識階級が共產黨に對して敵意を挾んでても、共產黨の國家的機關及經濟的組織が潰滅せない理由は、知識階級が共產黨の爲に大に働いてゐるからである。悪んでは居るが實際働いて居る。無論働く可く餘儀なくされて居るのである。即ち強制的に働かされて居るが、其強制的組織は用意周到で、一點の隙もない事は賞賛に値する。

横槍を入れる者あり、曰く、共產黨の上層部は馬鹿者共の集團である。そして此馬鹿者共の選定採

用が黨の上より下迄貫通して居るとすれば、どうして馬鹿者共が國家を支配して行けるか、と。

成る程一應御尤の議論である。だが、實際上監督支配して行くのは左程困難ではない。のみならず彼等は我々の常識より判断せば、馬鹿であり、低能であり、半狂者ではあるが、奸智には非常に長けて居る。特に自家防衛、自分の利益の爲には我々以上の才能を持て居る。だから此馬鹿者共は、自ら進んで建設的仕事には取り懸からない。たゞ監督して居るのである。彼等は無學未開であるから建設する能力も無ければ、働く事も出来ない、試みにやらせた所で失敗するのは受合ひだ。自己の弱點は彼等は充分に之を知り抜いて居る。だから教養ある者、専門の技能ある者を使役して、工業、財政、教育事業等に從事せしめ、彼等はたゞ監督の地位に立て居るのである。昨年以來、大に外國の技師をも利用する事にした。

教育ある役人、技師等に對しては無教育の共產黨員が嚴重に監視し監督して居る。これ等、監督人は、無論、事業に就ては理解力を持たないが、また充分理解する必要もない。たとへば、某企業が繁榮し利益を生じ生産額増加すれば、此企業は成功したものと馬鹿者にも合點が行く。之に反し、一事業が損失を招き生産減少すれば、此事業は失敗に歸した位は無學文盲の者にも判かるから、御目付役の共產黨員—コンミサー—は怒號して受持の技師、技師等を免職し他の者を以て之に代はらしむる

のである。馬鹿者が監視し、喇叭者が働く、か様な仕組が何事にも組織的に適用されて居る。駿馬痴漢を乗せて走るとは正にこの事だ。

然らば何が故に知識階級はボイコットせないか、共産黨の爲に働く事を止めたらどうか。との質問が起るだらうが、ボイコット、ストライキ等は最早時代遅れだ、革命の初葉には出来たかも知れないが、如何せん今や其時機ではない、全く不可能になつてしまつたのである。

現代のロシア全土は、共産黨の監督機關の強大無邊なる網を以て包圍されて居る。ゲー、ペー、ウー、コムソモール（青年共産黨）、職業組合、勞農監督委員等が津々浦々迄設定せられ、四方八方より數百萬の眼光が、知識階級の一舉一動を見張つて居る。少しでもサボリ、仕事がかどらねば直ちに罷免！、路頭に迷ひ、自分丈ならまだしも家族一同飢餓に陥るのは目に見えて居る。赤露に於ては外國と異なり、就職口は、政府に雇はるゝ外絶無である事を、よく念頭に置いて貰ひたい。

ボイコット、ストライキ等は夢想だも出来ない。同盟罷業には、多少、時日と組織が必要なのである。その萌芽丈でも、ゲー、ペー、ウーの魔手がぬ一つと出て直ちに撲滅してしまふ。

人民の勤勞を強制する組織制度は頗る巧妙に出来て居るが、近來に至り愈々益々完成の域に達した一例を舉げて見れば、技能卓越した頑強の一人の技師が月給五百留を受取て居た。月給五百留と云へ

ば、大臣級以上の俸給ではあるが致方がない。他に適當の人物がない。又た免職すれば他の工場に行く恐れがある。そこで共産當局は秘策を講じ、一日、中央委員會に於て秘密訓令を制定した。其内容に曰く、「一官廳又は工場を辭退した技師を、他の官廳又は工場に於て採用する事を得ず、之を犯したる當局者は嚴罰に處す」。

事態一變した、監督官は右技師に向ひ、右訓令を示し、減俸を申し渡した。承諾しなければ路頭に迷ふより他に途がない。流石の技師もギャフン。

爾來益々嚴峻を極めた。若し奉職人が監督人より見て充分に働いて居ないと睨まれるれば、直ちに飢餓に襲はるる恐れがある。イヤ／＼ながらも薄給に甘んじ全力を舉げて働く外ないではないか。

か様な巧妙なる「勤勞強制度」の存するが故に、赤露の行政も、經濟界も曲りなりに進展繼續して居るのである。

第二、知識階級は勿論、人民の大部分が共産黨を悪んで居る、中には不倶戴天の仇敵視して居る者もあるが、それに拘はらず共産權力が繼續する理由は、政治的不満不平は、共産權力に取つては少しも危険でないからである。個々の人民が、内心如何に不平でも不満でも、それが組織的になつて一大勢力—一大權力とならない限りは、共産當局は蚊の鳴く程にも痛痒を感じない。ゲー、ペー、ウーの

千里眼、順耳風は想像以上に恐る可きもので、組織的行動の「ソ」の臭ひもせない中に直ちに撲滅せらるゝのである。

平時に於ては此等の巧妙なる組織制度は、圓滑に運轉し、共產権力は微動だもせない。在外露人或はロシア研究の外國人が、經濟上の行詰りより共產黨の滅亡は今日か明日か、たゞ時期の問題なのであると、判断して居るのは大なる誤解である。然し乍ら戦時に於ては、形勢全く一變する。外國との大戦一度起らうものなら、不平不満をこらえにこらえて居た知識階級は時機來れりと許りに、必ずや俄かに勢を得て活動を開始し、サボタージュ、ボイコットは勿論、鐵道鐵橋等の破壊を試み、或は勞働者農民を煽動し、共產黨を蛇蝎視して居た農民も、勞働者も、冬眠よりさめた熊の様に活動し始め、飢餓を忍びつゝ、窃かに時機を狙つて居た後備豫備の將校連中は、召集に應じて武器を手にするや、敵本主義を斷行するに相違ない。赤軍の一部も動搖し來るは必定である。鬱積せる不平不満の大勢力は、こゝに勃然として起り、意氣斗牛を衝き、其勢狂漠怒濤の如く、澎湃として全露を席捲し、何ものも之を支ふる事は出來ない。又他方、虎視眈々、獨立の機を狙つて居るウクライナ、高架案、中央亞細亞等の勇悍なる人民は、此機に乗じて必ずや獨立の旗を擧ぐるであらう。共產黨は内外より猛撃を受け、其巧妙なる機關も組織も、唯一の牙城たるゲー、ペー、ウーも亦疾風枯葉を捲くが如く飛

散し、共產黨は積惡の報ひを受けてこゝに悲惨な最後をとぐるであらう。其慘狀、之を想像するだも肌に乗れば右の様な大勢力を有する不平不満の潜勢力は、平時に於ては全く其片鱗すら現はす事

の出來ないのは要するに、共產黨の機關が全國に亘て其網を張つて居り、人民は網にかつた魚と同様であるからである。そして其機關中最も偉大にして恐ろしきものは、ゲー、ペー、ウーなのである。

第九章 ゲー、ペー、ウー

一 ゲー、ペー、ウーの組織と幹部

全世界の耳目をそばたしめてゐるあのゲー・ペー・ウーとは一體どんな組織をもつてゐるか。日本では、これを國家保安部または國家政治部と直譯してゐるが、實際はその名稱の様な、なまやさしいものではないのである。幕下に十萬の精兵を擁するゲー・ペー・ウーは、警視廳、警保局、憲兵部及び司法省の一部の権限を合併したものより更に強大なる勢力をもつてゐる。

ゲー・ペー・ウーには外國部といふ一部分が設けられてゐるが、これは在外の露國大使を尻目にかけ、間諜、赤化宣傳、革命運動を行ふものである。

ゲー・ペー・ウーの前身は非常局である。これは、レーニンが天下の權を握つてから、反對黨を倒す爲に設けた一種特別の機關で、本部をモスコウの中心におき、その長官には有名なる殺人魔デルゼンスキーを任命した、彼の爲に殺害されたものはたゞに反對派だけではなく、罪なき老若男女實に數十萬に上つた。これは、流星に神經のにぶいロシア人にも驚きとなり、戦慄させるのであつた。

デルゼンスキーが死んで後、非常局を改稱してゲー・ペー・ウーと呼びメアゼンスキーをその長官に任命した。彼もデルゼンスキーに劣らぬ凶暴な男であつた。その本部は従前と同様ルビヤンカ廣場にある元のロシア保險會社の大建物を占領してゐる。帝政時代にはこの大建物の一部にホテルがあつたものである。

このホテルは、私にはなつかしい記憶である。私が大學を出てしばらくの後、初めてロシアを訪れたのは明治卅三年の事であつた。思へば随分古い事である。私が最初に乗り込んだのはモスコウで、その時に泊つたのが即ちこのホテルであつた。そのホテルが、ゲー・ペー・ウーの本部にならうなどとは夢にさへ考へられなかつた事である。以來ずつと私はロシアに滞在した。もつともその間には、ドイツ、英國、フランス等と歩きまはつたが最も多く滞在したのはロシアである。

それから數年経つて日露戦争が起つた。しかし私は、日本へは歸らず、モスコウに滞在してゐた。その時、ロシア人から見れば私は敵國人であるのだが、ホテルの主人だけは常に變らず私にあらゆる厚意を示してくれた。當時の事を回顧するにつけても、主人が敵國人である私に示してくれたあの親切が限りなくなつかしい。私の廿年近くの海外生活中、色々な思ひ出の中に、これだけはどうしても忘れる事が出来ない。

昨年(きょねん)の七月(しちがつ)、私(わたし)がロシア(ロシア)を訪(まわ)つた時(とき)、この思(おも)ひ出(で)の建(た)物(もの)をなつかしけに見(み)入(い)つたものである。しかし昔(むかし)と違(ちが)つてたゞ往(わ)来(らい)に立(た)止(と)つて、外(ぐわい)部(ぶ)から眺(なが)めたに過(す)ぎない。

建(た)物(もの)はたゞ古(ふる)びただけで、依(い)然(ぜん)當(た)時(とき)のまゝ残(のこ)つてゐる。しかし世(よ)の中(なか)の變(へん)轉(てん)の激(げき)しさに、私(わたし)は限(かぎ)りなき淋(しみ)しさを懷(いだ)かずには居(ゐ)られなかつた。街(まち)路(ぢ)に面(めん)した澤(たく)山(さん)な商(しょう)店(てん)は全(ぜん)く閉(ひ)鎖(さ)されてゐた。私(わたし)が、明治(めいし)三十三年(しんじゅうさんねん)に初(はじめて)このホテ(ホ)ルに宿(と)つた時(とき)、その附(か)近(きん)にある澤(たく)山(さん)な美(うつく)しい店(みせ)は、いづれも電(でん)燈(とう)の光(ひかり)を競(きそ)つて實(じつ)に賑(にぎ)やかな事(こと)たつた。それが昨(きの)年(ねん)訪(たづ)ねた時(とき)には、昔(むかし)の面(おも)影(かげ)一(ひと)つ止(と)めず、眞(ま)つ暗(くら)で陰(いん)鬱(うつ)の限(かぎ)りだつた。過(くわ)去(こ)を回(くわい)想(じやう)しながら往(わ)来(らい)を散(さん)歩(ほ)する私(わたし)の心(こゝろ)の中(なか)は實(じつ)に感(かん)慨(がい)無(む)量(りやう)のものがあつた。

さて非(ひ)常(じょう)局(きよく)がゲ(ゲ)ー・ベ(ベ)ー・ウ(ウ)ーと改(か)稱(しやう)されてから、その組(そ)織(し)及(およ)び制(せい)度(ど)は益(ますます)々(々)改(か)良(りやう)され、擴(くわ)張(ちやう)され現在(げんざい)では遂(つい)に外(ぐわい)國(こく)にまで魔(ま)手(て)を伸(の)ばすに至(いた)つたのである。今(いま)その部(ぶ)門(もん)を記(しる)すと次(つぎ)の様(やう)だ。

第一(だいいち) 軍(ぐん) 隊(たい)
— 赤(せき) 軍(ぐん) 内(ない)
— 國(こく) 内(ない) 軍(ぐん)
— 國(こく) 境(けい) 軍(ぐん)

第二(だいに) 外(がい) 國(こく) 部(ぶ) 密(みつ) 偵(てい)、赤(せき) 化(か) 宣(せん) 傳(でん)、革(かく) 命(めい) 宣(せん) 傳(でん)、在(ざい) 外(がい) ロ(ロ) シ(シ) ア(ア) 役(やく) 人(にん) 目(め) 付(け)

第三(だいに) 情(じやう) 報(ほう) 部(ぶ) — 經(けい) 濟(ぎ) 部(ぶ)
— 各(かく) 種(しゆ) 情(じやう) 報(ほう)

第四 行政部

第五 出版印刷部

更(さら)に本年(ほんねん)二(に)月(げつ)民(みん)警(けい)もゲ(ゲ)ー・ベ(ベ)ー・ウ(ウ)ーの直(ちやく)轄(かつかつ)となつた。

ゲ(ゲ)ー・ベ(ベ)ー・ウ(ウ)ーの幹(かん)部(ぶ)は多(た)少(せう)異(い)動(どう)があつたが、現(げん)在(ざい)では長(ちやう)官(くわん)ウ(ウ)・メ(メ)ンゼ(ゼ)ンスキ(スキ)、第(だい)一(いち)次(じ)長(ちやう)ゲ(ゲ)ー・ベ(ベ)ー・ウ(ウ)ーの幹(かん)部(ぶ)エ(エ)・エ(エ)ウ(ウ)ドキ(キ)モ(モ)ク、ゲ(ゲ)ー・ボ(ボ)ーキ(キ)ー、ヴ(ヴ)エ(エ)・バ(バ)リツキ(キ)エ(エ)ス・レ(レ)ーテツク(ツク)ス、ゲ(ゲ)ー・ブ(ブ)ロコ(コ)ーフイ(フイ)エ(エ)フ、ゲ(ゲ)ー・ブ(ブ)ラゴ(ゴ)ク(ク)ラ(ラ)ーノ(ノ)フ等(とう)である。

ソ(ソ)イヴ(ヴ)エツト(ツト)・ロ(ロ)シ(シ)ア(ア)内(ない)に不(ふ)平(へい)と不(ふ)満(まん)の氣(き)が満(み)ち、經(けい)濟(ぎ)政(せい)策(さく)は全(ぜん)く行(い)きつ(つ)まり、今(いま)にも共(きやう)産(さん)黨(たう)が倒(たふ)壊(くわい)するかに見(み)えるにかゝはらず、共(きやう)産(さん)政(せい)府(ふ)が微(ひ)動(どう)だもせず、世(せ)界(かい)革(かく)命(めい)をさへ夢(ゆめ)みる事(こと)の出(で)來(き)るゆゑ(ゆゑ)は、實(じつ)にこのゲ(ゲ)ー・ベ(ベ)ー・ウ(ウ)ーのお蔭(かげ)であるといふも過(くわ)言(ごん)ではあるまい。

長(ちやう)官(くわん)メ(メ)ンゼ(ゼ)ンスキ(スキ)は、その經(けい)歷(れき)から見(み)るとス(ス)ターリ(リ)ン(ン)の上(うへ)にあるが、今(いま)や病(や)み(み)て激(げき)務(む)に堪(た)へず、たゞ長(ちやう)官(くわん)の虚(きよ)位(い)を擁(よう)するに過(す)ぎない。ゲ(ゲ)ー・ベ(ベ)ー・ウ(ウ)ーの實(じつ)權(けん)は全(ぜん)く次(じ)長(ちやう)キ(キ)ゴ(ゴ)ーダ(ダ)に移(うつ)つてゐるのである。ツ(ツ)リリツ(ツ)セル(ル)はかつて外(ぐわい)國(こく)部(ぶ)長(ちやう)として大(おほ)いに怪(くわい)腕(わん)を揮(ふる)つたが昨(きの)年(ねん)八(はち)月(げつ)一(いち)日(にち)、西(せい)歐(おう)諸(しよ)國(こく)におけ(け)る革(かく)命(めい)宣(せん)傳(でん)がほ(ほと)んどその効(かう)を奏(そう)しないため、左(さ)遷(せん)さるゝに至(いた)つた。

ヤ(ヤ)ゴ(ゴ)ーダ(ダ)は、ニ(ニ)ージ(ジ)ニ(ニ)・ノ(ノ)ブ(ブ)ゴ(ゴ)ーロ(ロ)ッ(ッ)ド(ド)に生(う)まれた。父(ちち)は革(かく)命(めい)家(か)であり、彫(てう)刻(こく)家(か)であるス(ス)ヴ(ヴ)エ(エ)ル(ル)ド(ド)

ーフである。元來ヤゴダは放蕩無頼の徒で、遊ぶ金に窮してはよく親爺の器具を盗み出し、賣り飛ばしたものだ。度重なるにつれて親爺はかん／＼に怒り出し、とう／＼息子に勘當した。所が母親は目に入れても痛くない程可愛いヤゴダが、よしドラ息子であるにしても勘當とはあまりなといった風に頑固なハゲ親爺をかきくどき、やつとこさで歸省の許しを得た。しかしヤゴダの放蕩は中々止まず、器具を盗み出しては賣飛ばし、酒色の費にあてたものだから、とう／＼親爺の勘忍袋もブツツリ切れ、今度こそは誰が何んといはうとも永久に家へよせ付けぬと勘當をいひ渡した。家を追ひ出されたドラ息子ヤゴダは、以來諸所を流浪した。たま／＼革命に出會はしたが別段の功もなかつた。後ボヅウオイスキーの部下となつて青少年の軍事教育に徒事したが一向昇進も出來ずゐた。所がゲー・ペー・ウーに入るや、スターリンのお覚え目出度ければ立身出世疑ひなしと考へ、寢食を忘れて努力した甲斐あつてゲン／＼出世し、つひに次長の榮職を勝ち得たばかりか、今では、ゲー・ペー・ウーの實權をさへ握るに至つたのである。

ゲー・ペー・ウーの幹部にはこれ以外別に取り立て、いふ程の人物もゐないが、ペーレンスキーといふ男は下役ながら、スターリンから少なからず信用されてゐるやうだ。彼は元來人物としては下劣で横着で大した教養もないが、スターリンの秘書役の信用を得れば出世は出來ると考へ、秘書役の部

屋のあたりを暇さへあればウロツキまはり、つひに機會を捕らへて秘書役に取つたものだ。以來漸次信用を得て共産黨大會出席者保護、中央委員會幹部の護衛及び政治部會議の警衛といった風な結構なる役に有りついたのである。

ゲー・ペー・ウー中の屈指の亂暴者の大部分は他の官廳に轉職したが、ゲー・ペー・ウーの役人としての職務を捨てた譯ではない。依然名譽あるチエキスト（ゲー・ペー・ウーの役人または手先をチエキストと稱するのである）であり、他の官廳内においてひそかにゲー・ペー・ウーの仕事に従事してゐるのである。

たとへば人相學より見ても典型的罪人の面相を有するペテールスの如きは、勞農検査委員會長及び黨務に關する中央監督委員會幹部の重職にあるが、その實、この官衛はゲー・ペー・ウーの職務をつかさどるものであるから、ペテールスはたゞその職名を變更したに過ぎない。

チエキストは、内外人の目をくらすため、その名義を變更する必要が度々ある。たとへば、在外大公使館内より、不良分子、反革命分子を驅逐せんとする時經驗なきチエキストを派遣する事は危険でありまたチエキストと表向きに名乗れば外國へ入る事が困難で且入國しても先方の受けが悪いのは定つてゐる。だから、こんな場合には敏腕なるチエキストをつれて勞農検査委員會長とか、中央監督

委員會幹部とか堂々たる名乗を上げて外國へ乗り込むのである。

ゲー・ペー・ウーが毎年使ふ經費は實に莫大な額に上つてゐる。毎年豫算に公然計上される經費の外に他の諸官廳の經費が秘密にゲー・ペー・ウーの經費として支出される額も決して少ないものではない。



フロドフルエウス家命革

たとへば、在外大使館、商務官領事館、外國貿易館の經費の過半は外國に赴くキストの經費と稱して差支へはない。また國內においても諸官廳の經費よりチキストに支拂ふ金額は實に莫大である。

これを以て獨立不可侵の組織または官廳と見なすは大なる誤りである。それは共產黨の爪牙に過ぎないものだ。

中央においては勿論の事、地方にあつても、ゲー・ペー・ウーは黨の委員會、更に的確にいへば黨

委員會の秘書役に服従してゐる。たゞ黨より與へられた権限と活動の範圍が強大であるに過ぎない。たとへば、縣のゲー・ペー・ウーの隊長は縣委員會の秘書役に比すれば、その地位においては遙かに下であり、秘書役は自由にこれを免職にする事が出来るのである。で、たとへば秘書役に首切られても、これに對してゲー・ペー・ウーの本部は異議を申し立てる事が出来ない。

かうした調子で、ゲー・ペー・ウーも共產黨に對しては絶対に頭が上らぬが、一般民衆に對しては大した権力をもつてゐる。ゲー・ペー・ウーが取扱ふ重大な問題の解決には、必ず黨委員會の裁決を仰がねばならない。ゲー・ペー・ウーはその集めた材料を毎日黨委員會に報告する義務がある。この報告書はすこぶる膨大なもので、縣の政治上の形勢、人心の意向、各官衙、工場等における一切の出來事を包含してゐる。モスコイにおけるゲー・ペー・ウーの本部はスターリン直轄である。

ゲー・ペー・ウーの最も重大な部門は牒報部である。その牒報部はソヴィエット・ロシアの全體にわたつて嚴重に張られ、これに従事する役人は實に數十萬の多きに達してゐる。この外、個人的密偵の網が張り廻されてゐるが、これに従事する人々は百萬を以て數へられるであらう。

共產黨員は、黨の規則によつて反共產思想、共產權力に反對する會話等、いやしくも自分の聞いた事は大小にかゝはらず、そのことごとくを無料でゲー・ペー・ウーに報告する義務をもつてゐる。

そしてこれは青年共産黨員にあつても同じである。

これが即ちゲー・ペー・ウーの秘密の耳目である。個人的密偵である。それらの網が全露にわたつて如何に大きく張りまはされてゐるかといふ事は、黨員以外の者の絶對に知り得ない所である。ゲー・ペー・ウーは機會ある毎に、その密偵の網を擴大せんと努力してゐる。しからば、如何にして彼等は、その密偵の數を増しつゝあるか。

先づ、ゲー・ペー・ウーは大小に關せず、非共産黨と覺しいものに目をつけ、これをブラック・リストに記載するのである。そして最初はその目的の人物に向つて、若し彼が密偵たる事を承知しないなら、直に免職するであらうといふうはさを放つのである。これは小心者にとつては大變な驚きとなる事はいふまでもない。何となれば、失職者の多い今日、一度び職を失へば容易に他の職にありつけないからである。

従つて、中にはそのうはさだけでへこたれて一も二もなく密偵たる事を承知する者もある。しかしそれはことごとくの場合ではない。彼等の申出でを言下に拒絶する氣概ある者が少くないのである。そして、これを拒絶したなら、その人はいふまでもなく職を失はねばならぬ。彼は、數ヶ月の凡ゆる苦心に酬はれて幸福にも就職口を探し得る事がある。

職を得てホツと一息つくのも束の間、あの恐ろしいゲー・ペー・ウーは早くもその彼を見出すのである。

「何故密偵とならないのだ。それを承知しないなら、お前はまた職を失つて苦勞しなげりやなるまい」
ゲー・ペー・ウーはあくまで彼を口説きにかゝる。こゝに至つては、最早氣概の男子も考へない譯には行かない。

「今度職を失つたら、おれは二度とは職にありつけまい。何の罪もない妻や子に、あの血の出る様な失職の憂き目を、再びそして永久に味はすといふ事が、どうして出来るものか。いやでも高が密偵の役目だ。お茶を濁せばいゝだらう」

彼は考へ抜いた揚句、やつと密偵たる事を承諾するのである。だが一度び密偵となつたが最後、その場限りの報告では濟まされぬ。いや通してはくれないのである。ゲー・ペー・ウーのにらみが恐ろしさに、勢ひ彼は活動的な密偵たらざるを得ないのである。

斯の如くにして、一人の密偵を増し、更に同様な方法を繰り返して次から次へと密偵の網の目を全露にひろげて行く。そして現在では、あらゆる官廳の役人はほとんど全部が密偵の役を兼ねてゐるといつてもいゝ程である。

しかも密偵は、官廳の役人のみではない。ホテルにおいても、料理店においても洋服屋でも、學校でもその他ありとあらゆる工場においてもゲー・ペー・ウーの手先である多くの密偵を見る事であらう。

ソヴィエット・ロシアにあつては賣笑は許されない。けれどその女が密偵たる事を承諾し、活動するならば、賣笑的行爲を默許されるのである。小學校の生徒の中にさへ密偵が居るといふのだから、全く驚かざるを得ない。ロシア全國到處密偵のゐない所はないのである。露人三人集まればその中何人が密偵なるか判らない。あるひは三人共密偵であるかも知れぬ。用心あつて、しかるべきである。

二 經濟諜報部

ゲー・ペー・ウーの一機關に經濟諜報部なるものがある。ゲー・ペー・ウーをして、今日の如き強大なる組織となしたのは、實にこの諜報部活動の結果であるといふ事が出来る。

經濟諜報部員が最も注意を拂ふ點は民衆の金錢使用である。いふまでもなく共産黨が最も憎むものはブルジョア階級であるから、細心の注意を以て、各個人の金錢消費方法及び金高を調査し、彼等の敵であるブルジョアを探索するのである。ちよつと考へるとこの仕事は甚だ困難である様に思はれる

が、その實た、面倒さがあるばかりであるといふのは現在のソヴィエット・ロシアにおいては一月間に二、三百ルーブルといふ金額は何人も消費しないからである。

従つて一度に二、三十ルーブルも費消すれば直ぐ眼につくのである。そればかりではない。少しでも上等の服をつけて外出すれば彼の後には諜報部員がつけまはすのだ。料理店においては、すべての計算勘定書には必ずその謄寫があり、これをゲー・ペー・ウーに送附する事になつてゐる。若し料理店で一度に五ルーブル、十ルーブルを消費する者があると、直ちにゲー・ペー・ウーの眼に止りその人は必ず餘分な金を所持してゐるものと推察し、金錢の出所をつき止めなければ承知しない。この僅かな事から失敗する外國の間諜も少くはない。

諜報部員がつけまはすのはたゞに一般民衆のみではない。共産黨員といへどもまた後をつけられてゐるのである。一九二七年の秋、交通省に勤めてゐた有力なる二名の黨員が捕縛された事がある。二人は非常に憤慨して黨員を何と考へるかとはかりに抗議するのであつた。

所が、ゲー・ペー・ウーはかねてから、この二人は鐵道工事でも甘い汁を吸つたらしいといふ事を感じ、根氣よくその證據を集める事に努力してゐた。彼等の根氣と細心の注意とで、つひに各所における料理店での二人の一年消費額をつきつけ、ギュー〜と問ひつめた結果、流石の黨員も

自白せざるを得なくなつたのである。

外國から來る手紙も、外國へ出す書面も、必ずゲー・ペー・ウーが一通り目を通す事になつてゐる。國內の手紙もその大部分はこれを檢閲するのである。そして、もし少しでも疑はしい様な事が書いてあると、一寸來いとやるから手紙を書くにも餘程注意しなければならぬのである。

ゲー・ペー・ウーの力は非常に強大であるから、たとひ反共産政府の陰謀を企てる者があつたからとて周章狼狽し直ぐ様陰謀者を引つ張るといふ様なケチなまねはしないのである。さういふ事があるとならぬその中にスパイを潜入させ、陰謀の助長に努力させ、最早これ以上擴大する見込みがない、そして陰謀加擔者も増加する見込みがないといふ最後の所まで行かした時、こゝに初めてゲー・ペー・ウーは積極的に大活動を起こし、陰謀者を根こそぎ洗ひ立てるのである。

甚だしい場合には反政府の陰謀がない場合でも、ひそかに煽動者を派遣し不平不満の念を抱いてゐる様な疑ひあるものを教唆し、平地に波瀾を起させるのである。即ちこれによつて、共産政府に内心の不平を持ち不満を抱くものを徹底的に根絶させるのである。

昨年キエフ大學の學生中に平滿の徒がある事を感じたゲー・ペー・ウーの支部は直ぐ様學生中にスパイを放ち、教唆、煽動を企てるのであつた。

だが、スパイの入り込んだのを早くも見てとつた學生達は、誰一人その煽動に乗らず、知らぬ顔の半兵衛をきめこんだから、半年間のスパイの策動もつひに水泡に歸し、ゲー・ペー・ウーの支部長は微笑をもらしながらスパイ達に引揚げを命じたといふうその様な事實がある。

既に述べた様にゲー・ペー・ウーの勢力が強大になつた一つの原因は經濟牒報部の設置にあるが、この牒報部が強大になつた原因はいはゆる「經濟的反革命」との争闘である。

ゲー・ペー・ウー經濟牒報部の重大な職務は「經濟以外の商業調節」である。その意味は個人資本の増大を妨げ、個人の貯蓄と戦ふといふ事である。しかも一方においては貯蓄獎勵の宣傳を行つてゐるから奇妙ではないか。

經濟牒報部がどんな方法でこの職責を遂行してゐるかといふと、そのスパイが常に商人または小企業家の後をつけ廻すのである。そして若し、彼等が才能手腕により、多少なりとも資本を蓄積し、あるひは貯蓄した場合、スパイは「投機」または「國家政治の價値を傷害」したといふ變手古な罪名の下に、彼を捕縛しその資本または財産を沒收するのである。

捕らへられた男は牢獄にぶちこまれるか、あるひはソローフカ島に流されて奴隷以上に酷使されるか、餘程幸運の者でも都會から放逐されねばならない。この追放の程度には特別の文句さへ出來てゐる

るのである。即ち『マイナス五を與へる』とか『マイナス七を與へる』といった風である。マイナス五といふのは五大都會即ちモスコ、レーニングラード、オデッサ、ハリコフ及びキエフに居住する事を禁じ、マイナス七の場合は、これら五大都會の外更に他の二都會にも居住する事を禁ずる意味なのである。

この方法はすこぶる廣汎に採用され没收したる資本、貯金は國家收入の一に計上されてゐるのである。共產當局は、この様な惡らつ手段が存在する事を知りながら、商業の自由を妨げざる風をして巧みに世人を欺き、最初は寛大の態度をとり、多少の貯蓄をなさしめ、つひにこれを没收するのである。つまり鶏や豚を肥らして最後にこれを食ふのと同じ事である。

だがお人好しのロシア人中にはこの事實を知らない者が多いのには驚かざるを得ない。よしさうした實例を見ても、彼等はお互に自分達だけは大丈夫だらうと考へてゐる中、つひにそのワナに引つかつてしまふのである。

この惡らつたる方法は、レーニンが潰した新經濟政策中の『商業の自由』を悪用したものである。ロシアの無邪氣な人達は、今なほ新經濟政策が繼續され實力を有してゐるものと誤信し、このワナに引つかゝるのであらうが、この新經濟政策は既に消滅し、その中残存するものは僅かに國立銀行と紙幣發行

行位である。一九二二年から五、六年頃までは、新經濟政策が行はれてゐたがその後漸次消滅し、その一部は全く變化して前述の如き亂暴なものとなつたのである。

最近に至つてはこの方法も面倒臭いと考へたと見え、今年の一月モスコにおいて、各商店に陳列中の價格二百ルーブル以上の商品を沒收し、次いで金屬製品、織物、化學及び電氣的製造品、ガラス、ラヂオ用品、石油製品、砂糖、タバコ等の個人商賣を嚴禁するに至つた。これ等の商賣で細い煙りを立てゝゐた多くの人達は一體どうすればいゝのだ。それでなくても失業者數は百六十萬と公表されてゐるのに、彼等の前途は餓死か乞食以外に道はないのだ。

筆の序に赤露特有の實例を擧げて讀者の參考に供しよう。

千九百二十七年の夏、機關新聞は民心を緊張せしむる目的を以て、外國との戰爭の危機切迫すと書き立てた。だが、全く予想に反し、民心は緊張するどころか、人民は大に驚き、拾留の金貨を買入れ萬一の場合に備へんとした。夫れが爲め拾留の金貨が、紙幣留の拾一留より二十一留迄も暴騰した。此場合、唯需要供給の原則に従て金貨が騰貴した迄で、別に議論の餘地はないが、他面、金留の騰貴は即ち紙幣の下落である。紙幣の下落は即ち國家政府の威信を傷けるものであると曲解し、當路者はゲー・ペー・ウーに命じて、紙幣下落の張本人——罪人を搜索せしめた、實に滑稽千萬

である。當局の無智蒙昧呆れざるを得ない。ゲー・ペー・ウーは血眼になつて罪人を探索したが、無論見つかるとは道理はない。最初から罪人は無いのである。如何にゲー・ペー・ウーでも無から有を生ずる事は出来ない。其頃國家銀行の頭取セイマン（共產黨員）は、人民財政部外國貨幣課長ウォーリン及び其助役チエイトリン（兩人共、非黨員）と不和で誠首するつもりで居たが口實が無いのに苦心し、遂に此兩人を紙幣下落の張本人なりとゲー・ペー・ウーに申告した。ゲー・ペー・ウーは直ちに兩人を拘留し、訊問の末、何等の罪状をも認めなかつたが、亂暴にも死刑の宣告を下した。然し責任を免ぬかるゝ爲めに、政治部に伺を立たした所、政治部では、ゲー・ペー・ウーの判決を是認した。其罪名は、留投機者紙幣下落の張本人經濟的革新陰謀者と云ふ事であつた。蓋し當局の眞意を測るに、財政は鞏固であるのに紙幣が下落したのは、兩人が投機した爲めであると、況く人民に知らしめんが爲に外ならないと思ふ。人民財政部では、兩人が無罪なる旨を説明したが何んの役にも立たず、兩人は銃殺された。實に亂暴至極、言語同斷、非黨員の生命鴻毛よりも輕し。

千九百二十八年四月、相互信用會社の重役八名及國家銀行の財政經濟部支配人チャルフウチャンの九人が、國家基金を亂用したとの嫌疑の下にゲー・ペー・ウーの手にて拘引せられた。チャルフウチャンは才能ある經濟學者で、地代の原理の研究に就て一生を捧げた眞面目な人である。其職名は財

政經濟部支配人とは云へ、實際に従事した仕事は、全く學問的研究の方であつたから、基金とは全く無關係で、又之を亂用しやうとしても實行不可能の地位に在つたのであるが、九人共遂に銃殺せられた。

相互信用會社の重役を死刑に處した理由、元來此會社は商人の資金及貯金を集むる爲に、特に政府が許可したものである。會社が目的を達して集金に成功するや、政府は其假面を脱して會社の重役を捕縛し、資本金及預金全部を沒收した。重役連中は無論國家の基金には手の届かない地位に在るか無罪なる事は明白であるが、後日の紛絃を絶つ爲めに銃殺したのである。重役連中は帝政時代以來住民より信用せられ尊敬を受けた人々である。

此の如く色々な必死の下に、共產當局が知識階級を葬り、金錢を強奪するのは敢て珍らしい事ではない。

三、ゲー、ペー、ウー外國部

赤露國內に於けるゲー・ペー・ウーの密偵組織が完備して居るのみならず、外國に於ける密偵も亦用意周到に組織せられて居る。往年北京政府が某大國と秘密條約を訂結した際、時の赤露大使カラハン

はゲー・ペー・ウーの密偵を呼び、二十四時間内に、右秘密條約の謄寫を入手する様依頼した。密偵は十二時間を出でずして之をカラハンに渡すのであつた。カラハンは大に悦び早速右條約の重要個條を抗議書内に挿入して支那當局に一驚を喫せしめた。千九百二十七年八月、王黨三人組が暴露した際にも、ゲー・ペー・ウーは之を二週間以前に偵知し、芬蘭土國境に於て右三人を迎へ、窺かに之を銃殺した。本年一月二十七日クテーボフ大將が白晝巴里の中央部に於て、ゲー・ペー・ウーの爲に誘拐せられ、賞金七十萬法を懸け搜索中であるが今だに其真相が判からない。佛蘭西當局も、ゲー・ペー・ウーの手先の神出鬼没の怪腕には舌を捲て驚て居る。

波斯の獨逸大使館の親展書、秘密書類でもそれらが伯林に到着する前に、ゲー・ペー・ウーの手先が、窺かに手を廻はして、ちやんと其寫眞を取り、原書はそうつと其儘返へして置くから、流石の獨逸人も氣が附かないのである。エジプトや印度の事情は、ゲー・ペー・ウーの手先が、英國の外務省よりも細密に且つ迅速に悉知して居るとは、最近迄此方面の仕事を受け居たチエキストのアガベークコフの告白する所である。

此の如き事實は、ゲー・ペー・ウーの密偵が外國の内部にも餘程奥深く侵入し、如何に活躍して居るかを明かに證明するものである。

世界の擾亂、革命は赤露共産黨の綱領である。そして共産黨の爪牙たるゲー・ペー・ウーの手先がコンミンテルンの指揮の下に外國に於て世界各國の擾亂と革命を企てつゝあるのは不思議でもなんでもない。寧ろ當然の事である。彼らの行動には種々ある。諸外國の軍事、經濟上の探査調査、赤化宣傳、革命騒動の準備、労働者失業者の煽動、サボタージユ、ストライキ、勞資爭議、資本家攻撃、小作爭議官憲に反對運動の教唆後援等千種萬別である。赤軍參謀部が、外國の軍事探偵に従事して居る外、ゲー・ペー・ウーも盛んに此方面に活動して居る。

ゲー・ペー・ウーが外國の革命と騒動の爲に如何に盡力して居るかは、ウンシリフトが、敏腕の「チエキスト」を引率して獨逸に乗り込み共産的革命を企てた一事でも明白である。支那、印度、安南、波斯、亞富汗方面に於ても、コンミンテルンの指導の下に、如何にゲー・ペー・ウーの手先が内亂と革命の爲に盡力して居るかは、既に世人の知る所である。

尤もゲー・ペー・ウーの力丈ではこんな大事業を成す事は困難であるから、チエキストは無論、當該國の共産黨員及惡漢を大に利用して居る。これは説明する迄もなく賢明なる方法である。どこの國でも金錢に目が眩み國を賣る惡黨が少くない。チエキストは大公使館員、商務館員、領事館員又は

特別の商業取引員等の名義にて正面より堂々と目指す國に乘込むは勿論、贋造の證券にて入國する等は朝飯前の事である。元東京駐在露大使館一等書記官ベセドールスキーの言によれば、大公館の二等三等書記官は大抵「チエキスト」だと云ふ事だ。此の外、日本、朝鮮、支那等には米國人に化けて居る「チエキスト」も敢て尠くない。赤化宣傳費用も米國から送附する事が往々ある。弗の御客様だと大に歓迎すると、豈圖らんや、恐る可きゲー・ペー・ウーの犬が其中に居ないとも限らぬ、大に用心す可きだ。ゲー・ペー・ウー本部には旅券贋造部があり、何國の旅券でも自由に贋造し得るが、コミンテルンの印刷機械の方が遙かに精巧なりとの評判である。外國の入國許可證を偽造する事も左して困難ではない。必要なる材料は預め十分に準備して有り、外國官廳の印鑑偽造の如きは容易である。

右の外種々の方法によつて外國に乘込む事もある。例せば、ゲー・ペー・ウーの敏腕家パローチンは競馬會々長としてスカヂネビヤ半島に乘込んだ。又俳優や音樂師に化け、藝術、文化研究交換等の美名の下に赤化宣傳や密偵に従事する事もある。

外國部の毎年の支出は驚く勿れ金六千萬圓也である。この中約半額は買収に消費せられ、諸外國の領事もその駐在國の有ゆる秘密を賣付ける事實があるから、實に油斷も隙もあつたものではない。尤

もゲー・ペー・ウーの手先が外國に於て浪費或は着服する額も頗る莫大なのである。

四 ゲー・ペー・ウーの秘密部屋と拷問方法

死刑宣告を公表する場合は、共産當局に有利なりと思考する時にのみ限られて居る。或は少くも、恐怖心を人民に起さしめんとする場合に限らるゝが、公表以外に殺害せられた者は頗る多數に上つて居る。そして殺害を秘密にする場合には、本部の特別秘密部屋に監禁するを常例とす。又捕縛する際にも極秘を要する場合には、被告の家にて捕縛せない。却て往來頻繁なる街上で、鳥渡、警察迄來なさいと至極軽く申渡して、手輕にゲー・ペー・ウー本部に連れて行き、秘密部屋に投するのである。だから人騒ぎも何にも起らない。家庭も拘留された事を知らない。數日經て家人が心配し出し、ゲー・ペー・ウーに問合はせに行くと、平常は劍もほろゝの挨拶をするが、此時に限り馬鹿丁寧に取り扱ひ、殊更に數冊の書冊を繰り返し見て、どうもそんな人は、ゲー・ペー・ウーには居りませんと體良く家人を追返す。扱愈々死刑に處する場合には、被告に向て、あなたの荷物を纏めなさい、外に移しますからと申渡す。被告は死刑の宣告を受けて居るとは、神ならぬ身の、夢にも知らないから、荷物をかかへて、平氣で示された方面へ向つて徐行する、ぐるぐる廊下を廻り歩み、狭い暗黒な廊下を経て示

された一室に入らんとするや、そこには預め仕掛があり、狙い誤たず、後頭部をズドンと一發、それで萬事休す。當事者の外誰れも知らない。事件は永久に祕密に葬り去られるのである。祕密室に監禁された者の中一人でも生還した者はない。これは作り事でもなんでもない。ゲー・ペー・ウーの祕書ペーレンキイの實話である。

ゲー・ペー・ウーの役人が反逆を企てた場合に其者が非共産黨員の時は、幹部は會議の上直ちに之を射殺するが、黨員の時は、黨委員會の許可を要する。

ロシア人が、外國人と交際するのは極めて危険である。汽車の車掌さへ、外國人の旅客と必要以外に尾行し、何かの口實を設けて遂に銃殺するを常例とする。チャルフリーシャノフなる者は日本大使館に出入し、其友人の繪畫を日本人に見せた事が本となり、千九百二十七年七月拘留せられ、翌年四月銃殺せられた。其罪名は相互信用會社重役の犯罪に關係せる故と公表されたが、其實、彼は此事件には全く無關係であつた。日本人に赤露の祕密を洩らしたとの嫌疑文で一命を失つたのである。

ゲー・ペー・ウーの拷問方法は一種特別である。普通の場合に於ては、被告の訊問も形式のみにて無論辯護士などは許さない。預審掛が勝手に調査し、勝手に判決を下し、又被告に外界との交通を許

さないが、本人の自白を必要と認むる場合には拷問にける事がある。ロシアの探偵小説などには、ロシア一流の拷問方法として、被告に數日間、鹽物許りを食はせて、一滴の水をも與へない、すると渴は飢餓よりも苦しいと見え、如何なる悪人、如何に強情な者でも、渴の苦痛に堪えず、水一杯を要求して一切を白狀すると書いてあるが、ゲー・ペー・ウーでは此方法を採用して居ない様だ。これよりも尙ほ即効ありと云ふ方法は、被告に一睡もさせない事だ。被告の眼前に光の強い電氣ランプをさしつけ、被告が眠らんとすれば一夜の中に何十回でもより起し電氣ランプをさしつけるのである。此新方法には誰れも叶はない。如何に頑強な者でも、二、三日の中には必ず神經衰弱、半狂氣となり、不眠の苦痛には一刻も堪ゆる事出来ず、此苦痛より免ぬかるゝ爲めに、ゲー・ペー・ウー役人の言ふなり次第、ウー、ウーと白狀し署名すると云ふ。實に恐る可き拷問手段もあつたものだ。

此の如くロシア人民の運命は、數年間の殺人の爲めに神經に異狀を來たした渴血鬼「チエキスト」の手に握ぎられて居るのである。壹億數千萬人のロシア人を此恐る可き地獄より救出する事は、文明國人の義務、天賦ではあるまいか、私は文明國人の忌憚なき意見を聴きたい。

第十章 最高機關政治部の内幕

全露共産黨大會は、ロシア國內では全知全能と稱せられて居るが、其開會期間が短いため、其全知全能は、黨中央委員會に移る、然し中央委員會の開會時に限りがあるので、其閉會中は、全知全能が黨の最高機關たる政治部に移るのである。共産黨中滑稽と饒舌とで有名なユー、ラーリンは「政治部は全知全能で、男を女に變する事も出来る」とヨタを飛ばした事程左様に、政治部は全知全能である。故に其會議の様相を讀者に報告するのも敢て無駄ではないと思ふ。

政治部會議は一週一回、木曜日、クレムリン宮殿内の大廣間に開かるゝを常例とする。

元のレーニンの椅子に議長が坐はり、其左方にスターリンが黙々として椅子に倚つて居る。スターリンは一回も議長になつた事はない。彼は其不適任なる事を自覺して居るからと思はる。従前はカーメネフが議長であつたが、其後ルイコフ、時としてはルズダーク代理議長が議長席に着き、議長の方には、元レーニンの秘書役であつた小文のせむいエム、イ、グレイヤーセル女史（政治部の秘書）が狡猾なる眼を光らして着席し、少しく離れて、愚鈍の様に見ゆるモーロトフ、カバノーウイチヤ、勞農の長老、裝飾物たるカーニン、陸海軍大臣、元の軍曹ウオロレーロフ、泥酔常習人クープイセ



政治部員アラツク

フ、耳の遠いトームスキー、其他政治部員一同、中央検査委員會幹事三名、及中央委員會の若干名合計約二十五名の者が、赤毛布を以て被はれた長方形の大椅子を圍んで、鹿爪らしく着席する。綺羅星の如く威風堂々あたりを拂ひ、壯嚴の氣堂に満つと書きたい處であるが、一向其氣持になれないで一種憫憐輕侮の情を催ふさしむるのは何故か。

隣室、應接間に於ては數十名の者が、蜂蠅の様に蠢動して呼出しを待つて居る。此蠢動して居る人物は如何なるものであるかと一瞥を與ふれば、こはそも如何に、人民委員長、次長、聯邦國の大官、外國で云ふなら大臣、次官親任官連中が、小さくなつて何かブツブツ密語して居るではないか。彼等は其役目として待つて居るのである。數時間の永い間、呼出しの來る迄、高い聲も出し得ず辛棒

そ高位にあるが會議室に入る事を得ない。として待つて居るのである。應接間で待合室の入口に番して居る助役（女給）に向て呼鈴を鳴ら

すと、女給は急いで祕書の傍へ飛び来り飛び去り金切聲を上げて、友達メンゼンスキー、ヤゴードア、あなたの番ですと呼ぶ、兩人は飛鳥の様に會議室に走り来り、數分間其提案を説明して直ちに退出する。次は何々大臣、次官と云ふ風に呼び立てられ、これ亦數分の説明をして倉皇退場するを常例とする。大事件の場合には勿論例外である。政治部には各方面よりの議事や事件が輻輳山積して居るから、提出者に長時間の説明を許さない。時間は頗る貴重である、タイム、イズ、ゴールドが茲では實現されて居る。提出案に對する決議も早いものだ。提出者は、ノー、又はイエスの決議を受けて退場するのを例とする。大臣、大官連中は何等の権力もない、政治部の決議又は命令を受けて之を實行する丈である。

扱てこの共產黨の最高機關全知全能の政治部の會議室に入つて一見するに、誰が此會議室の主人公であるか、指導者であるか、一向見當が竹かない。ブハーリンが未だ失脚せない間は、彼はスターリンの内命を受け、内命の範圍内に於て大に高論卓説(?)をなしたから、ブハーリンが主人公の如き觀を呈したが、彼れのなき後は、誰が會議室でハシヤイで居るのか判明せない。スターリンはと見れば、彼は例の如く黙々として着席して居る。討論には加はらない。然し彼がヤチラ立ち上るや、直ちに疑問は消滅する。彼れが唯一の主人公である事が判明する。彼は冗長の辯を弄せないが、彼の結論は

滿場一致直ちに可決せらるのである。彼れの意見はたとひ無價値であつても、それは問題ではない。前に述べた様に、スターリンが共產黨の上下を貫通して、黨の機關を一手に掌握するや、彼れの権力は保險附けられたのである。機關把握の實績が擧がるに従ひ、政治部の権限は漸次縮少せられ、遂に無力になつたのではあるが、権限の縮少と反比例して其掌管事務は愈々益々増加し、終に全露の政治上の事件は大小となく悉く政治部に集中する様になつたのは、常識では判断する事の出来ない一奇觀ではないか。ロシア人が政治部を目して全知全能と呼び、諸外國人も亦政治部を以て全露の最高機關なりと認定して居る。

現時赤露に於ける唯一の政治上の至高機關は即ちスターリンの手足たる政治部に外ならない。政治上の意味を有する大小の問題は、其起りたる地方の官廳が、之を決定する権能がない。必ず政治部に裁決を仰ぐ事になつた。政治部は又た國家の豫算及其配分を決定し、大小の外交問題全部を決議し、全露大官の任免黜擄をも之を司つて居る。非常なる権能を有するゲ、ペー、ウーさへ反革命運動を發見した場合には之を獨斷にて判決する事が出来ない、必ず政治部の裁判を経ねばならない。裁判官も獨斷で判決する事が出来ない。司法權の獨立などは夢想だに出来ないのである。所謂裁判所の判決なるものは、豫め、政治部に於て決定した判決を、人民又は諸外國人の目を瞞ます爲めに、裁判所

の名に於て、法文を巧妙に適用して公表するに過ぎないのである。犬もコソ泥や政治上に全く關係なき犯罪は此限りではない、裁判官が之を判決するのである。

以上述べた如く政治部に於て取扱ふ事項は全露より輻輳し來り實に千種萬様であるから、政治部は實際全知全能でなければならぬが、其内容を調査すれば、如何に最眞目に見ても憫れ至極と云はねばならぬ。トロツキー始めレーニン直參の敏腕家や、學者其他多少教養ある者は悉く失脚し或は免職せられて政治部には全く其影を没し、殘存又は新入者の人格は益々低下し其終局する所を知らない有様である。本第七月改選された政治部員も悉く吳下の舊亞蒙である。スターリンは毎年、自分に從順でない人物を遠ざけ、其撰拔した人物は彼れには盲從するが、無學半開無能無恥の者である。敏捷なる猶太人も既に排斥せられ、猶太人中多少巾をきかして居る者は、祕書役カヴノーウイチ一人位であらう。佞人を近づけ、硬骨の忠臣賢士を遠ざけるは、これ滅亡の原因なりとは東洋の格言であるが、スターリンは全く格言の反對を實行して愈々益々其權力を固め、政治部も遂に彼れの手足となつた、これが將來、彼の滅亡の原因となるや否や、今茲に斷言するを憚るが、彼は無學無恥或はマルクス主義中毒の半狂者を手足の如く使ひ、全露に君臨し、世界革命の陰謀さへ企て、居る。ロシアは將來果してどうなるであらうか。

第十一章 經濟政策

一 經濟政策の變更と五年計畫

赤露の經濟政策は、共産黨が天下を取て以來、未だ滿十三年を経ないのに既に三變した。多くの人は共産權力は今尙共産主義的社會建設を實施して居ると思つてゐる様であるが、それは皮相の見解に過ぎない。尤も世人は社會主義とは如何なるものなるか、共産主義とは如何なる主義であるかを十分に研究せず、また赤露の眞相を十分に知らないから、唯赤露共産當局が大聲叱呼する其聲に迷はされ、今尙は赤露はマルクス主義を守本尊とし、レーニズムを實行して居ると考ふるのも敢て無理ではない。だが、一度其眞相を分析し深く研究するならば、社會主義の本體は既に空虚となり、マルクス主義中最も害毒ある「階級的争闘」を國內に於ては最早目指す敵なきに拘はらず之を號叫してお茶を濁し、世界革命を夢みて自らを慰め、民衆を欺瞞して居る事を察知するであらう。

レーニン一派がロシアの實權を掌握するや、マルクス主義、共産主義を眞向に振り翳さし、全國の工場、製造所を沒收し、土地、銀行、家屋等を強奪して資本階級を撲滅した。そして其經濟政策とし

ては平等分配主義を高唱し、生産力の發達増進に就ては一顧だも與へず、レーニズムの綱領^カ他の草より高く成長せる草の萌芽を摘み取る^ニ政策を斷行し、特に農業政策としては、「強制割當法」を實行せし以來、農民は自家を養ふに足る丈しか耕作せず、耕作地は益々減少し且苛斂誅求の爲め愈々貧困に陥り、都會の住民や労働者も食糧缺乏に脅かされ、製造工業は當局の言によるも非常手段を講じない限り到底復興の見込なき迄に衰頽した。國民の經濟的生活を平等均一にする社會主義者の夢想は一朝にして破れ、加ふるに大凶作あり、ロシア聯邦は經濟上全く行詰つた、強情無類のレーニンも愕然として驚き「働かざるものは食ふ可からず」、「一の専門家は十人の社會黨員よりも貴し」とのレーニン一流のローズンク（標語）を絶叫した。製造工業の範圍内に於ては、社會主義—共產主義の本領を一擲し、分配問題を生産問題に服従せしめ、農業問題に於ても強制割當法を廢止し、社會主義より見れば、勞力搾取と目せらるゝ小作法をも復舊し、遂に衆議を排して、方向を右轉し、一時の辨法なりと胡麻化しながら所謂新經濟政策を實行した。然らば其新經濟政策とは如何なるものであるか、其内容は左の通りである。

一、農民其他に對する強制的徵發及沒收を廢止し、一定量の穀物を租税として徵收し、土地は全部國有とするも、農民に對しては原則として農夫一家族が自力を以て耕作し得る面積を限り土地の永

久利用を許可した。此の他農具供給の圓滑を計り、又種子貸附豫備資金を設けて種子の貸附を爲し、荒地開拓をも獎勵した（千九百二十一年五月）

二、農産物税法を改正し、小麦又は麥を單位とする單一税法を制定し、税額は、農夫各自の收穫に對する一定率に限定し、剩餘農産物の自由處分を許可した。

三、勞農政府は曩に沒收したる各種大小事業中、直接國家の需要を充たし、又は國家に重大の利害ある企業「例令、兵器、機關車等の製造家、金屬大工業、燃料業、鐵道運輸業等は國營」以外のものは之を民間に貸下け、個人又は法人に其經營を許可した、之に關する千九百二十年七月發布の國有工場拂下命令は左の如し。

一、五十人以下の労働者を有する工場を私營の爲め開放す。

二、政府直轄の工場を貸附し、租借者には、自由に民間の註文に應ずる事を許す。

尙二十一年末に於ては更に右傾し、石炭、石油、製鐵、織物及機械工業のみを國營とし、其他は個人に貸下ぐる事にした。

四、農産物及製造品の自由賣買を許可せる結果として産業の自由を認める事になつた。

五、外國貿易に至つては、國家獨占主義を標榜して居たが、實際に於ては、政府の許可さへあれば

組合、私立會社、及個人も外國貿易に従事する事を得る様になつた。

六、外國貿易復活と共に、關稅法を制定發布した。

七、豫算制度を復活し、關稅、現物稅以外にも各種稅目を設け、貨幣を以て之を徵收する事とした。

八、労働者に對する現品給與制を廢止して賃金制度となし、當初は現品金錢混合給與制なりしが、更に修正して金錢給與制とした。

九、上述の如くにして「勞農ロシア」は貨幣經濟（註、理想的社會主義國に於ては貨幣は無用である）に復歸したるを以て、政府は貨幣發行に關する各種の法律を發布し（千九百二十一年四月、六月）國立銀行に銀行券の發行を許し以て金融界調節の任に當らしめ、其他金融機關として國立工業銀行、コーペラチーブ銀行、極東に於ては極東銀行を創設した。

以上新經濟策の骨子である。この内容を十分に研究し、且社會主義の根本たる平等分配主義を廢棄して、私有財産を認めたる點等より結論を下げば、如何に最眞目に見ても、赤露共產權力は資本主義の軍門に降伏したと評せざるを得ないのである。

通稱、蘇聯邦、即ち S.S.R. 之を直譯すればサヴェート、社會主義聯合共和國となるが其中の「社會主義」は消滅した、而して「サヴェート」(會議—人民代表者たる委員の會議)なるものも有名無實

(虚器を擁す)となり、共產黨の機關が實權を握り、遂に黨の中央委員會の秘書役長が全共和國の主人公となり、名は聯邦共和國と稱するが、これも亦有名無實となり、實際に於て既述の様に前代未聞の「秘書役專制國」となつたのである。

共和國の加入者たるウクライナ、白露、高架索、トルクメン、ウズベツク等の共和國は機會だにあらば獨立せんと焦慮して居るのである。

右の如きより實質の消滅したサヴェート、社會主義、及聯合共和國の名詞を除いたら一體何が残るんだ。實權者たる共產黨中央委員會の秘書役長たるスターリンが残る丈ではないか。換言すれば、社會主義消滅し「サヴェート」消滅し、共和各國も滅亡同様である、聯合共和國亡びて黨獨り存す、と稱するも、決して過言でも、獨斷でも、復た敢て奇矯の言でもない、事實其通りである、事實より慥かなものはない。現に共產黨員中には「サヴェート、ロシア」は既に滅亡したと高言して居る者もある。然らば現今の地理的大ロシアは一體何ものであるか？それは世界革命を實現する爲めの一の足場に過ぎないのである。而して彼等の夢想に従へば、世界革命後は、共產主義を實施する一の世界的社會又は國家(？)が現出し彼等が其主權者となるのである。そこにはロシアもなく、支那もなく、日本もなく、歐洲列國、南北米も、濠洲も印度もなく、阿弗利加もなく、無論人種的差別もなく國際的

繁煩もない共産主義の大傘下に唯一の理想的社會主義國か又は社會が出来るのである、何んとすばらしいものではないか。此の大々の大理想の下に、彼等共産黨員は汗水を流がし、虐殺を敢行して居るのである國民の利害とか幸福とかは、何等考へない許りか、一億餘萬の農民が乞食同様にならうと、數十萬の勞働者が行倒れやうと、數十百萬人の無辜の市民がゲーペーウの毒手にかゝらうと、そんな小事は一切彼等の眼中にはない。唯一路邁進、世界革命！共産主義現實！大目的の爲めには何等の手段方法も選ばない、詐欺、瞞着、權謀術數、強盜盜手當り次第にやつける！、國際信義？ そんなものは馬鹿に飲ませる價値もない、何處迄も赤化宣傳、外國の紛擾、戰爭を煽動助長せよと、意氣軒昂天を衝くの慨があつたが、ヒヨット足下を見ると、サア大變、こは如何に？、新經濟策が實施され社會主義共産主義は何時の間にか消失して居たのである。

レーニン在世中は如何に狂暴な共産黨員でも沈黙して居たが、彼の死後はトロツキー先づ第一に右傾説を唱へ、次でスターリン一派の幹部も新經濟策の撲滅に取りかゝつた。

新經濟政策實施後三、四年の間は農民もホット一息つく事が出来た、其中勤勉なる者は多少の餘裕を得てクラーク（富農？）となり、又個人商工業者中には所謂ネツプマン（新經濟策成金）が出来、莫斯科始め重要な都會は再び殷盛の徴候を示したが、又もや政策一變？ クラーク征伐、成金撲滅、

外國貿易政府獨占と来たから、たまつたものではない、耕地は再び減少し、大農の耕地は家族に分割耕作せられ、穀物の生産高及剩餘も亦從て減少し、世は戰時共産專制（新經濟政策實施以前の虐政を指す）時代に逆戻り、食糧不足、物資缺乏、生活の大難となり、都會は火の消えた様に淋れ始めたのは當然の事である。

サア、かうなつては又もや一大事！。如何に癡狂な共産黨員でも、腹が減つては仕事も手につかず、金が無ければ赤化宣傳も出来ない。四苦八苦のあけく國家計畫局に命じて無理やりに製作せしめたのが、例の有名な産業五ヶ年計畫である。然らば共産黨死起回生の妙藥（？）たる五年計畫とはそも如何なるものであるか、既に各國の諸新聞にも掲載せられあるから、讀者も先刻御承知の事ではあらうが、之を批評する前に、赤露當局の公表に従ひ其大要を左に掲ぐる（尤も是に類似の計畫は公表以前にも少しく實施して居たとの事）。

策 政 濟 經

千九百二十八年より三十三年の五ヶ年間に、國民經濟の各部門に投資する可き固定資本は、六百四十六億留で其中工業百六十四億、農業二百三十二億、交通運輸百億、電氣事業三十億、文化教育十九億留等也。

右の結果、國民經濟運用の爲めの固定資本は、千九百二十七、八年度の總額七百億留から、千九百

三十二、三年度の一千二百八十億留となる、而して工業資金は右期限に九十二億留から二百三十億留となり、電気事業資金は十億から五十億、鐵道は百億から百七十億、農業二百八十七億から三百八十九億留と夫れ々増加するのである。

右投資の結果、生産額も激増し、工業生産額は千九百二十七、八年度の百八十三億から四百三十二億、農産物は百六十六億から二百五十八億留、鐵道の運輸能力八百八十億噸から一千六百三十億噸とそれ々増加する。

工業投資は、工業合理化方針の理想實現に資せらる可きものであるから、其投資總額の七割八分は生産機關の生産事業に充當せらる可く、從て其生産額は二、三倍に増加するであらう。

電気事業投資は、全國に四十二ヶ所の大發電所建設に充てらるゝもので、其結果電力は現在の五十億キロワットから、二百二十キロワットに激増するであらう。

鑛石精鍊所は現在の精鍊所以外に大精鍊所を建設す可く、其結果銑鐵生産額は三百五十萬噸から一千萬噸に増加する。

炭坑はドンバス以下現在の各炭坑を擴張し、其産額は三千五百萬噸から七千五百萬噸の増産、機械製造工業の生産額は三倍半、農業用機械生産額は四倍となる。

化學工業殊に化學肥料の生産額は千九百二十七、八年度の十七萬五千噸から、千九百三十二、三年には八百萬噸となる。

五ヶ年計畫の實施は、「サヴェート聯邦」に於ける資本主義的因子を無力にし、國民經濟の社會主義的因子を益々強盛ならしむるものである。

五ヶ年計畫！、米國に追付き、更に之を凌駕する、と云ふのが、共產當局の絶叫するスローガン理想である。右の計算は所謂臆算で其數字にも大分不可解の點があるが、十億、百億位の相違は問題でないとしても、第一共產當局は五ヶ年計畫を眞面目に考へては居まい、唯民衆瞞着の爲めに或は、一時逃れの爲めに例の如く大聲叱呼して居るのであらうと想像し乍ら、私は莫斯科に着いた後、既に數年間ロシアに滞在し赤露の經濟問題を研究中の日本人の意見を尋ねた所、其日本人も、一時逃れの胡麻化しに過ぎないとの意見であつた。だから私も亦餘り五年計畫に就き注意を拂はずに居たが、共產黨の機關新聞は愈々益々五ヶ年計畫を宣傳した。新聞の宣傳文ならまだしも、國家計畫局長クルヂチャーノフスキー、スターリンの右腕たるモロトフ、更にスターリン迄が五年計畫を高唱し始めたから、赤露當局は實際眞剣に五ヶ年計畫の完成を期して居るのであらう、一時逃れ、民衆瞞着の方法としては餘りに執拗過ぎる、確信なうして餘りに宣傳し過ぎ、若し失敗の曉には責任を免ぬかる

る事困難になりはせぬかと、他人の痲氣を頭痛に病む次第ではないが、どうも少々驚いた。

赤露の財政經濟の真相を見れば、第一に五年計畫の骨子たる六百四十六億留の十分の一でさへ捻出困難と思はるゝのに、計畫局長は、昨年十一月三十日、中央執行委員總會に於て「我國の或る者は、此五年計畫の數字は夢想的であると思つて居たが、現在に於ては、この數字は確乎たる現實と結び居る、五年計畫に於ては八百億留（オヤ、第一回公表に於ては僅に六百四十六億留と明記して在つたが、一體何時の間に八百億に増加したのか知ら？）の費用を要する事になつて居るが、果して斯る巨資を作り出す事が出来るかを我國の或る者が深く憂いた。が、千九百二十九年—三十年度に百七十億留を投ずる事になつて居る。其中百二十億留は經濟建設に、約四十億留は文化建設に十七億留は行政費に支出する」と公言したのは一驚を喫せざるを得ない。ロシアの事だから十億や二十億の相違には驚かない我輩も、同じ計畫局長の口から、何時の間にか六百四十六億が八百億となり、一年間に百七十億留の支出が出来ると公言されたには流石の私も驚かざるを得ないのである。紙上丈の支出ならば百億も千億留も容易であらうが、實際之を支出するとなれば、松旭齋天勝以上の奇術魔術を要する。紙幣増發となれば、現今一留、二十五錢乃至三十錢しかせない留紙幣は益々暴落して反古同様となるは明白である、反古同様の留又はチエルウオーネツ紙幣を百億千

億支出しても、それはなんのたしにもならないのである。論者或は、露國紙幣の流通は國內丈に限定されて居るから、外國との爲替相場の高低は眼中に置く必要なしと辯護するが、そは一を知つて二を知らざる者の言である、現に露國內に於ける生活必需品の暴騰（世界の太勢に反し）は、不知不識の間に、紙幣増發に原因して居る事を察知せねばならぬ。紙幣増加と物價騰貴、即ち紙幣の價値下落、經濟學の初歩丈で理解が出来よう。

局長は結論して曰「要之、經濟界に時代後れの我國は、社會主義建設の重大使命を自分の雙肩に負ふて立つたのである。然かも外部からの援助を借りる事無くしてある。果して此計畫を遂行する爲に我々には十分なる用意があらうか。今や我國は醒めたる大衆が奮起して居る、勞働の戦野には、常勝的新勢が成長しつゝある」と大見得を切つたが、假りに千歩を譲り、ロシア大衆が大に五ヶ年計畫を援助する旨を誓つた所で、乞食同様の民衆が、何程の力にならう、？。漸く糊口を凌で居る勞働階級が後援を約した所で何程の役に立つか、？。況んや民衆は共產黨を呪詛して居るに於ておや。大衆をあてにして此尨大なる五ヶ年計畫を完成せんとするのは、猿猴が月を掴まんとすると同様である。

二 社會的競争

五ヶ年計畫の完成が困難なる事は、赤露當局が狂氣でない以上、内心少しく察知し居たと思はる。それかあらぬか、溺るゝ者は藁をもつかむ、共産黨員が苦心慘憺の結果考案したのが「社會的競争」と稱する迷案である。全露の各新聞は筆を揃へて此迷案を賞揚し、此の如き名案はブルジョワ國の經濟學者、實業家等が夢想だせざりし新案である、此新名案を實行すれば五ヶ年計畫の成功期して待つ可しと書き立てた。然らば此名案の内容は如何と云ふに、實は新發明でもなんでも無い、資本主義が成功した一大原因は、自由競争に在りとの舊説より考へ付いたもので、一工場と他工場との生産高を競争せしめ、或は一地方の農業と他地方の農業の成績を競争せしむると云ふ至極簡單無邪氣な考案である。唯資本主義の競争と異なる點は、資本主義的競争の場合に於ては、競争勝利者は其懐を肥やし或は昇進する事を得るが、社會的競争の場合にはたとい、競争に勝つても、各個人の懐には何等の影響をも及ぼさない、だからイクラ新聞で煽動しても到底ものにならないと高を括くつて私は其儘殆んど忘却して居た。此名案が公表されたのは昨年正月頃で、私の入霧當時即ち七月は競争の最高潮に達して居た。各新聞紙は、社會的競争の效果實に驚く可きものありと盛んに書き立て、居た

が、未だ玉手箱は開かれず、競争の結果を公表する迄には至らなかつた。讀者諸君よ、當て、御覽なさい。實は詳述する必要もない位であるが、共産當局が如何に低能で、又藁を掴かむに如何に汲汲たるかを示す爲に左に其顛末を書かう。

昨年早春より全露の新聞紙は、毎日ロシアの大衆、労働者等を社會的競争に加入せしめんと教唆煽動これ力めた。新聞の宣傳は大に其功を奏し、各工場製造所等は競争に加盟した。莫斯科の某工場はキーエフの某工場と競争を開始した、北高架索の一地はウオルガ方面の農村に對し穀物生産高の競争を挑んだ、レ市の紡織工場は莫斯科の一紡織工場と製品の優劣に就て競争を始めた、甚だしきに至ては學校に迄も競争の流行が波及し、學士院は大學に對しマルクス主義教授方法に關し挑戦した等々……枚舉に暇あらざる程毎日各新聞に掲載された、社會的競争の浪潮激甚なるを見て、莫斯科共産黨委員會の秘書役等は、國債を賣却せず最も長く懷中に藏する競争を組織する様、其機關紙に内命を下した。

策 政 濟 經
猫も杓子も社會的競争に加はつた、其效果期して待つ可きのみだが、其蓋を開けるのは尙早として半歳程も待つた。終に待ちきれず機關紙『經濟生活』は各地へ特派員を派遣して競争の結果を探るのであつた。特派員の報告によれば、競争の結果は概して好良の様と思はるゝが二、三の缺陷があ

る様だ。例令、競争に加入した工場の職工等は泥酔して、競争に加はらない工場の仕事を妨害して居る。ベルム鐵道の職工組合は、隣りの職工組合に對して「警笛の鳴る迄正確に時間を守り働かうではないか、警笛の鳴る三十分以前には仕事を止めない様にしやう」と申合せた所、其結果は却て正反對となり、爾來雙方共、警笛の鳴る三十分前に仕事を止める様になつた。又或る工場では社會的競争に加はり乍ら職工が大になまけて居たから、特派員は懇々其不心得を戒め、社會的競争の必要なる所以を説いた處、職工はイキナリ立ち上り「競争もへちまも有つたもんか、パンをもつと呉れ」と囀鳴つた、他の工場では職工は却て激昂して、パンと靴底皮を與へよと怒號した。

この様に特派員の報告は餘り面白からず、當局は一驚を喫した様であつたが、これは一部分の異例に過ぎまい、あれ程反響が有つたのだから大體成績好良なるに極まつて居る、もし辛棒して待つに若かずと、自ら慰めた。千九百二十九年も段々暮れかゝつて來た、新聞も社會的競争に關する記事を掲載せなくなつたが、當局としては競争の結果を知りたいものだから、競争加入の工場に人を派して調査した成績は「經濟生活」紙上に發表された。

先づ第一に需要の最も多い織物工場を調査した所、二十九年年度の製品の品質は前年度の夫れよりも劣悪になつた。即ち不合格品は二割五分、甚だしきに至つては五割の所もあつた。たとへば「無産者

織物工場」に於ては不合格品四割五分もある事を發見し、「トワレット、ラボーチー」工場に於ては、織物の一米突には必ずキズがあつた。「クレスチャニーナ」工場に於ては三百四十八枚の手巾の中瑕子のないものは一枚も無かつた。

「プレウエストニツク」靴製造所にあつては、靴の一等品三百十對の中百八對はきす物。「バリージスカヤ、コンムンナ」工場に於ては五百五十四對の靴中二百五十九對はきす物。「スコロホッド」製靴所では千四百十二對の中四百三十對は不合格品であつた。裁縫所の成績は更に劣等であつた。背廣服袖は長短を異にし、上衣とズボンとが或は長く或は短かく平均を失するものが多數であつた。

ゴム製上靴はロシアの冬季には缺く可からざるものであるが、其品質は頗る粗悪になつた。化學的製品も亦粗悪、マツチも其品質數量共不成績、電氣ランプも亦永く保てない、一定期の時間丈もてないのである。紙製品に至つては言語同斷、不良品一割五分乃至八割に達した。

以上、迷案社會的競争の成績で、機關紙の公表する所である。實際はより以上不良だつたかも知

れない。明けて悔やしき玉手箱、開けない方がよかつた。

猫も杓子も名案に共鳴して競争に加入したのだから、こんな不成績に了はらうとは流石の共産當局も神ならぬ身の全く預期せぬ所であつた。所が其真相を観察すれば、我もくくと競争に加入したのは、加入せなければ、眼玉を頂戴するのを恐れて名儀上丈加入したが、競争の必要條件たる個人的利益が伴つて居ないから、各個人各労働者は内心却て反感を抱いて居たから不成績に了はるのは當初より判り切つた事である、今更誰をか恨み、誰をか咎めんや。

三 工場一頭制

第二に五年計畫完成の手段として、共産當局が腦漿を搾つて案出したのが所謂一工場一頭制である。従来、工場の管轄は、工場の支配人、工場委員会及黨細胞の三頭政治に近いものであつた。そして此等三者の間には明確なる権限及責任が分擔されて居らず、其上、黨機關、職業組合等が事業に容喙し、事業に統一、節制なく頗る紛亂状態に陥つて居た。で、この弊害を除く爲めに斷然、一工場一頭制を採用する事に決定し、工場の支配人に事業の計畫、預算、及雇人の進退に關し全權を與ふる代りに全責任をも負はしむる事にした。成る程此新制度は大改良に相違はない。然しながら

ら全く権限を剝奪された黨員及労働者が、其儘だまつて引込むであらうか。そして彼等が支配人の命令を従順に遵奉するであらうか、それは甚だ疑問である。新制度實施後まだ數ヶ月を経ざるに、既に砂上の偶語を聞くではない乎、且や新制度が實施された後も労働者の懷中に何等の影響を及ぼさないのだから、其結果知る可きのみだ。共産當局の施設中、表面上紙上に於ては實に堂々たるものがないでは無いが、常に其精神、骨子が缺如して居るのは、歐米の個人主義に反對した其反動として全く個人の利益を無視し、共産主義社會主義に捕はれて居るからである。この捕はれから翻然として脱却せざる間は、百の設備、千の名案も全く畫餅である事を茲に忠告する。尙ほ筆の序いで一言し置く可き事は、共産黨は階級的争闘の熱に犯され、恒産無き者には恒心なしとの東洋の格言に反し、恒産ある者は有産的心理状態を助長するから、恒産者を撲滅せよ、クラーク(富農)を征伐せよ、ネツブマン(新經濟成金)を葬れと號叫して居る。私有財産を認めざる共産主義より見れば一應一理ある様に思はれるが、それは人間の本能、人類の心理状態に反して居るから大衆の反對を受くるのは當然である、而して他方大衆を頼みて五年計畫を實行し米國の産業を超越す可しと豪語して居るがそれは明かに自家撞着ではないか、共産黨は常にチレンマに陥り前後矛盾、自家撞着を繰返して居る、共産主義的、社會主義的極樂は未來永劫實現する事は出来ない。何んぞ大死一番、恒産恒心主義的極樂に向て邁進

せざる。これ彼等が生地に就く唯一の道であらねばならぬ。

四 無休操業制(工場の連続生産)

第三の名案は、共産黨中人ありと知られたるラーリンの案出した「無休操業制」である、其内容は
大體左の通り。現今でも電車、鐵道、水道、電話、電燈等の従業員は休日と與へられて居るが此等の
事業は年中無休である。然るに他の諸企業は一年間に約三百日操業し、六十日以上を日曜其他の祭日
として休んで居る。だから今若し一年三百日の代りに三百六十日操業したならば、工業生産高を二割
増加し得る譯である。

よつて諸企業の全休日とを年五日とする。(一月二十二日レーニン記念日。五月一、二日のメーデー。
十一月七、八日の革命記念日)として一週を五日とし、労働者職工等は四日働いて一日休み、土曜、
日曜日は全廢し、一ヶ月を六週即ち三十日とすれば、一年は十二月三百六十日となる譯であるが、
前記休日の五日は曆外とし全休日とするから差支ない、又閏年には一ヶ年が三月六十六日となるが、
この一日は餘分の日として全休日とする。
連続生産實行の有利なる諸點は概略次の様である。

- 一、増産設備の爲め新たに投資する必要なく、工業生産高を二割増加し得る事。
 - 二、同一設備にて二割増産するから、生産原價は低下し、商品が安價となる。
 - 三、連続生産は失業者を著しく減少せしめる。
 - 四、日曜日廢止は、耶穌教の安息日と云ふ舊思想を打破し、宗教心撲滅に効果がある。
- つまり之を言換へるとこの名案は、一石二鳥の目的を有する、第一、生産増加、第二、宗教迷信打
破。

第一の生産増加にあつては従来一ヶ年間に六十日以上休業して居た企業が、六十日以上操業するか
ら、それ丈生産高が増加する予定ではあるが、果して算盤玉に合ふや否やは大疑問である。
此案が提出された當時、老練な一技師は斷然起つて反對論を述べた、その理由とする所は

- のほ
- 一、困難な事情を顧みず無理に實施しても果して豫期の目的を達し得るや頗る疑問である。と云ふ
 - イ、原料の不足なる場合を生ずる恐れがある。
 - ロ、合格せる労働者、職工の不足を來たす。

ハ、夫れでなくてはへ不足を告げて居る技師、技師の補充が極めて困難である。

ニ、機械器具等の損耗が益々甚だしくなる。

ホ、重工業はいざ知らず、熟練技能を要する軽工業に於ては、必ず製品の品質が粗悪になる。

ヘ、以上の理由により生産の数量又は或は増加するであらうが、收支相償ふや否や、誰も保証する事は出来ない。

老技師の反対説は堂々たるものであつたが、藁をも掴まんとする當局者は反対論を一蹴し、ラーリの原案を採用し、昨年十月一日より實行する事に決定し、各官廳も無休日となつた、そして正直なる老技師は免職！

無休操業實行の日、尙ほ淺きを以て其成績を批評するのは早計たるを免ぬかれぬが當路者は非常の好成績であると宣傳して居る。そして私の受取つた報告によれば色々な故障が既に起つて居る様である、其大要は左の通り。

第一、労働者の不平。従来労働者等は日曜日は全体であつたから、生計は苦しい乍らも妻子相携へて或は散策に或は活動、芝居見物にと夫れ々、一家團樂の樂を享けて居た。だが、無操業實施後は其休日が別々になり、又夫が夜間家に居る場合には妻は不在、妻が居る時は夫は不在である等妻子兄

弟互に顔を合はす事も稀になるのであつた。朋友の家に遊びに行つても、友達は工場に働いて居ると云ふ始末で、従来様な休日の樂しみを味ふ事は出来ない。だから或は自暴自棄に飲酒する様になつた者もある。

第二、鐵道運送不完全なる爲め、原料又は燃料が不足勝ちとなり折角の無休操業も有名無實となつた工場も現出した。

第三、技師、技師不足の爲め悲鳴を擧げて居る工場も増加した。

第四、労働者職工の能率が低下した。

第五、同案の目的たる宗教壓迫は却て反対の結果を生じた。例へば、機關紙「ブラウダ」の報道によると、「工場地帯の「アレーホウオー、ズーエオ」、「エカテリノフラーフ」地方の寺院等は、今迄は土曜日の晩及日曜日丈しか開門しなかつたが、無休操業實施後は、寺院も無休日を公布し、毎日開門祈禱説教を爲す様になり、休業日に當つた労働者等はドシ／＼寺院へ押しかけるから、寺院には牧師不足を告げ、工業地帯に非らざる他の地方より牧師を増聘する様になつた。そして民警は之を監視して居る、労働者等の信仰心を撲滅する事は困難である」と悲鳴を擧げて居る。

然らば生産増加は如何と云ふに、國民經濟部委員で共產黨の中堅たるルズダークの報告によれば、

「無休業制は、當分の處失敗に歸した、之を成功せしむるには更に多大の努力と日月を要する」と「經濟的生活」紙の報道によると、「労働者は高言して曰く『無休業は政府には必要だらうが、我々労働者には何等其必要を認めない』と、労働者は不平を鳴らしてゐるとの事である以て無休業に對する労働者の意向を察する事が出来やう。

要するに無休業の名案も紙上の空論で、直ちに其効果を期待する事は出来ない、前途頗る遠慮である。機關紙が大成功なりと公表する其インキ未だ乾かざるに、之を打消す報道を他面に小さく掲げて居るのは何故か、之も不思議な現象であるが、毎日露字新聞を讀んで居る人より見ればそれは日常の茶飯事である。赤露を研究せんとする人士は、常に其表と裏とを見なければならぬ左もなければ、飛んでもない誤解に陥るのである。前後矛盾、自家撞着は、現代赤露の共産黨の特有性である事を寸時も忘れてはならぬ。

工業に關しては、最近一年間に右の三明案の外、流石の共産黨にも最早奇策妙計の持ち合はせが無いらしい、否、否、大々的迷案が有つた。工業とは少し異なるが、筆の序に書いて見れば、第一、豚を莫斯科其他各都會（莫市丈でも年七十萬頭）の不用殘物で飼養すれば年々數百萬頭の豚をロハで飼養する事が出来ると一黨員が發案したら、機關紙でも名案として太鼓を叩いた。又或る黨員が全口數十百

萬の囚人にパンを食せて置くのは不經濟だから、大に彼等に働かしむ可しと發案した所（尤もソローフカ島では數萬の流刑の囚人を酷使して居る）これ亦新聞では賛成したが、惜哉兩案とも未だ實行されて居ない。讀者諸君、一つ大名案を赤露に提出されては如何。先方では大に歓迎しますよ。但し豫め辭はつて置くが、泰山を挾んで北海を一飛する位の大大の迷案でなければ駄目だ。

五 五年計畫の失敗（中央委員會の檄文）

去る一月廿六日、中央委員會が五年計畫の失敗に關して檄文を全露の新聞に發表したが、今その大要を記すと次の様である。

昨年十月、十一月、十二月三ヶ月間の成績を見るに、産業計畫は、生産高、生産力の向上、及生産費低減の三大要點に於て失敗に了つた事を公表せざるを得ざる事を甚だ遺憾とする。

五年計畫の失敗が、産業の凡ての重要な部分、即ち石炭、冶金業、機械製造業、セメント、製紙、紡績業等に於て認められた。不成績の一原因は、曩に公布されたる工場一頭制が嚴守されない事である、中央委員會は工場の各員が嚴重に此法令を實行されん事を要求する。

策 政 濟 經

第二の原因は、黨の有能なる分子が産業化の爲めに十分に動員せられず、しかも動員せられたる部分

も其適所を得ず、従つて其技能を發揮する事が出来なかつた事である。全黨及共産青年黨は新打撃旅團に加入し活動せよ。

以上が中央委員會の檄文の大意である。いや、大變な騒ぎになつたものだ、然しながら今になつて何もそう狼狽するには及ぶまい、これは當初から分り切つてゐる事だ、借問す、無休操業大成功の報道は、日本にも波及し、某々の我大新聞すら宣傳に來て之を翻譯掲載した程であつたが、それは眞赤な嘘であつたのか、無休操業は右記載の重要産業にも無論採用されて居た、そしてそれが成功したとすれば、工場一頭制の不實行、不成功は少くも帳消しになつた筈だ、それなのに産業の不成績を一頭制の不實行と適材適所を得なかつた事にのみ歸するのはこれ亦明かに自家撞着前後矛盾ではないか。

六 新農業政策—其動機と結果

共産黨員は口辭の様にレーニンズムを遵奉するのレーニンの遺策を實行すると云ふ、しかも其口の下から、レーニンの新經濟策を打破し、ネツプマンを征伐し、特に農民に對しては凡ゆる苛斂誅求を極めるのである、だから、耕地は分割、減少せられ、農産物は激減し、労働者、及都會住民の生活を脅威する破目に陥るに至つた。こゝに於て當局者はサア大變だと許り四苦八苦の末案出したのが所謂

「ソフ、ホーズ」『コルホーズ』の大擴張案である。尤も此兩ホーズはレーニン時代から多少あつたが、當時は餘り力を入れなかつたから發展せなかつたが、一昨年頃より唯一の救濟策として全力を傾注し始めたのである。特に「コルホーズ」の成否は、共産主義共産黨の死活に關する大問題であるとして、此問題に對し全力を注ぐのも當然ではあるが、此の様な破目に陥つたのは要するに、従來の農業政策が其當を失し、大農は分家して土地を分割し、一般農民は自家を養ふに足る丈しか働かない様になつたからだ、即ち自業自得である。

ソフホーズとは直譯すればサヴェート經濟であるが實際から云ふと國營農場なのである。其内容は、未耕地或は未開地を政府が共産黨員監督の下に農民に月給を拂ふて開墾せしめ、農業を經營せしむるものである。蓋し月給制度の農業は赤露が最初であらう、此制度は未開地の開墾に對しては確かに有効であらうが、収入相償ふや否やは頗る疑問である。米國人は此ソフホーズに對しトラクタアール及農業器具機械を貸與して居る。昨年末迄の耕地積は約百五十萬町歩位である。「コルホーズ」は赤露當局が全力を盡して居る制度で、此成否が經濟上共産黨の死活に關するものである。此制度を目して社會主義的建設と稱して居る位である。「コルホーズ」とは協同經濟の意味であるが、農業に關して居る事だから、協同農場と譯して差支ない。

此協同農場の意味は、農家二十乃至五十を一團とし、(場合によつては一郡全體)政府は之に相當する土地及トラクター等を貸付け、農民は其所有する牛馬及農業器具を持ち寄り協同して農業に従事し、其代りに自家食用以外の餘分の生産物は極く安價にて政府の買上げに應ずる仕組である。しかし獨立自尊の精神に富み且多少の牛馬及資産ある農民は中々協同農場に加入せないのである。當局も頗る手古摺て居る。さうかと云つて裸同様な怠惰な貧民が加入すれば、何から何に迄一々政府が世話焼かねばならず、非常なる経費と努力を要するので、當局も頗る閉口して居るが、前述の如く相當な農民は加入を欲せないから、己むを得ず貧民を加入させ、尙ほ暴力を以て大中農民をも加入せしめて居る。當路者の報ずる所によれば、協同農場の成績頗る見る可きものがあり、此勢を以て進むなら、農業の五年計畫は預期の如く進捗するであらうとの事である。モートロフはかう高言して居る。曰く。「農業振興問題では、黨は今、農村に於ける社會主義の發達に特に重心を置いて居る。農村よ、進め、大協同農場へ」と云ふローズングを基本的標語として掲げた第十五回黨大會に於てさへ、我等の中誰れも、農村社會分子の發展速度が、最近一年半に於て、斯く急激なのを豫想し得た者は無かつた。協同農場及國營農場の統計は、明瞭に夫を證明して居る。五年計畫には、千九百二十八、二十九年度分として六個の最大國營農場合同の爲に、耕作地百四十萬町歩を豫定して置いた、然るにその

實際では百五十萬町を超えたのである。協同農場建設の方面では、發展速度が更に高い。昨年の協同農場の耕地は、百三十八萬町歩に達した。千九百二十九年中には四百四十萬町歩に達するであらう。即ち二十八年度の三倍強である。協同農場建設は此の如く急速且つ確實に進んで居る。協同農場が大きくなり、耕地數千乃至數萬町歩を有する巨大なるものが設立されるのは殊に重要である」と。次に農業に關する所謂五ヶ年計畫を見るに、其大要に曰く。千九百二十三年より二十八年に亘る農業に對する投下資本額は百五十億留であつたが、向後の五年間には二百三十二億留を投資し、五ヶ年の末には、農業の收穫高を三割五分増加し以て粒穀の市場出廻高を戦前時代と同様ならしめんとする。そして千九百三十二年の國營農場の穀物の市場出廻高は三千四百萬「ツェントネル」を下らざる可く、協同農場に於ても亦五千萬ツェントネルを超ゆ可く、合計八千四百萬ツェントネル即ち五億萬布度の粒穀類の市場出廻高を生産す可き豫定である。國營及協同農場の播種面積は千九百三十三年度には二千六百萬町歩に増加し、之に従事する人口は二千一百万人に達するが故に、勢、個人により生産額の増加は停止せざるを得ない、停止しても差支ないのである。

なんとすばらしい計畫ではない乎、但しこれは表面紙上の計算であるから、例に依て一寸其裏面を覗いて見やう。

協同農場の面積が増加した事は確かに事實である。だが其内情の如何が寧ろ重要問題である。協同農場關係者は、其剰餘の農産物を、政府が豫め決定せる廉價にて政府に賣却する事を拒み、高價でこつそりと之を個人商人に賣拂つてしまつたから大變な事になつた。之より前に政府は、各協同農場に對し數千留宛を貸附し、農業用機械器具も信用貸付し、又個人農民より取り上げたる上等の土地をも貸與した。其代りに協同農場は、其剰餘の穀物を政府の定めたる安價にて政府に賣却する義務を負担したるに、協同農場は政府に賣却せず、個人商人に賣飛ばした、即ち百姓が政府を瞞着した事になつたのである。

かうした不正行爲を敢てした協同農場が、一、二ヶ所位なら大問題ではないが、「クラスヌイ、ウオストーク」、「グバーネツ」及「クバン」地方に於ける二十の農場、及其他の地方に於ける「ノーワヤ、ジーズニ」、「クラスヌイ、バルチザン」、「五月一日のホルホーズ」、「十月」、「希望」シヤーク、ク、ソチャリズム、「自由努力」、「クレスチヤンスキー、インテルナチヨナル」、「赤旗」、「貧民」等と命名せられたる拾數個の農場で、しかも何れも優良なるものとして將來を囑目されて居たものだから、流石

に當局者もあつと驚いてしまつた。上の好む所、下之に習ふ。當局者が常に虚偽、誑詐を事とし、權謀、術數を弄するから、百姓も之を眞似たのであらうが、其善後策が大變だ。此等の農場は既に政府より大金を借りて居る、之を取り返す事は出来ない、已むを得ず、土地と機械器具は取り上げ、之を他の農民に貸付け新たに協同農場を作るより外に方法は無いであらう、しかしそれ等の新農場も、他の農場も亦此惡例に習はぬと誰が保證し得る乎。之に關し國民經濟省の役人の曰く、「資金を受取り又機械器具や種子をも受取る時には百姓連中は争ふて協同農場に加入したが、イザ計算、粒々辛苦の穀物を非常に安く政府に渡す段になると、急に慾が出て來たのだ、政府の貸付金は莫大であるが最早取り戻しも出來まい。政府は何か他に適當の手段方法を講ずるであらう。」云々と。

實に呑氣千萬な役人である、自分の懐には關係がないから他人事の様子に言つて居るが、實際どうしたら好いだらう?、「コルホーズ!」「コルホーズ!」よとスターリン御大迄が、社會主義の死活問題、否、共產黨の死活問題として、虎の子の様にしてゐるコルホーズ、協同農場が、實際こんな情ない有様とは、鬼の眼にも涙だ、ロシア人の慣用語で云へば、鰐の眼に涙だ。

然し鬼や鰐は何時迄もめそくして居ない、スターリン一派は猛然として立ち上がった。さあ、何をするか?。最も憎む可き奴は、協同農場から高價に穀物を買取つたチャストニキー(個人商人)

だ。彼等を征伐せよ、彼等を撲滅せよ。果せる哉、機關紙を讀むと、個人商賣人で銃殺せられ、或は拘留せられ、或は投獄、流刑に處せらるゝ者枚舉に暇あらずだ。彼等は新經濟策のお蔭で今迄息ついで居たのである。新經濟策はレーニンの遺策ではあるが、レーニンも其當時、新經濟策は當分の中だと言つた。永久とは云は無かつた。スターリンの公言其儘を直譯すれば『新經濟策が、社會主義的建設に役立つ間は其儘にして置くが、若し妨害にでもなれば、鬼に喰せてしまへ。今日之を破壊してもレーニンの遺志に背くものではない』。(實際これ迄大部分破棄して居たのだ)

第二はクラーク征伐だ(註、クラークは現今大農又は富農の意味に用ゐて居るが、實際は牛馬二頭以上を有する小農に過ぎない。ロシアの土地は礪礪で寛度の耕作を爲し、且冬季が永いから、二頭位の牛馬では僅かの土地しか耕やせない、一家七人位の家族で日本の小農の上程度の生活を営むには二十町歩を耕やさねばならない、そして二十町歩を耕作するには少くも牛馬四、五頭を要する)。

クラークはプロ階級の敵である、而して彼等は頑強にも農産物を隠匿し、又協同農場に加入する事を峻拒して居る實に不都合千萬である。農村に於ける社會的的不良分子だ。階級的仇敵である、彼等を撲滅して其土地を取り上げ、牛馬を没收し、協同農場を擴張せよ!

かう絶叫しながら、クラーク征伐が始められた。さあ大變!、最も勤勉なる農民IIクラークIIは鬼

の金棒で粉碎し始められた。クラークも必死の抵抗を試みたらしい。機關紙を見ると、クラークがゲーペーウの手先を殺した、共産黨員を袋叩きにした、コルホーズを焼いた。クラーク何名死刑に處せられた、牢獄に投ぜられた、財産全部没收された、流刑に處せられた等等、公報文でも實にウンザリする程である、實際は幾許の暴虐が行はれたか想像する事も出来ない。

かうした古今未曾有の恐怖政治、惡逆無道の虐政により所謂社會主義的農村、農業が建設せられつゝあるのである。社會主義とは虐殺主義、恐怖政治の變名か、協同労働は社會主義建設か否かは今議論する場ではない、茲には唯、事實を事實として記述するに止むるが、鬼に角、現代のロシア共産黨は、此の如き暴戻無比の方法手段を以て、彼等の社會主義的建設に向て邁進中である。果然、協同農場は大に擴張せられた、少くも其面積は大に増加した。機關紙は得々然として報道して曰く。

最近協同農場へ加入申込者の増加したのは驚いた。例令、北高架索方面は規定よりも八十割、烏拉地方は三割二分九厘、上ヴォルガ地方二割七八、中ヴォルガ方面七割五分、下ヴォルガ方面九割六八に達した。他の地方よりの報道によれば、殆んど一郡舉て加入を申込みとする形勢の所もある。クルイム、北高架索、西伯利及高原地に於ては實に大舉して加入を申込み、縣は勿論莫斯科に於ても、一々書付ける事が出来ない位である。農民が一朝にして數百年來の習慣を放棄し、社會的

建設に變心するとは誠に驚く可き事ではない乎、農民の心理状態が此の如く急變するとは、何人も夢想だもせざりし點である」と、

「コルホーズ」への加入の流行は、機關紙の報ずる様に、或は非常なるものに相違ないであらうが、其流行の動機は果して何處にあるか？ 機關紙は農民の心理状態の一變であるとして簡単に之を取扱はんとして居るが、これは皮相のみに過ぎない。或は機關紙の故意の捏造に非らざるやを疑ふ。私は既に「クラーク」征伐當初より之を豫期して居たのである。「コルホーズ」へ加入の激増—裏面—農民の生活大難である。苛斂誅求、虐殺、流刑、投獄、飢餓等より免ぬかれんが爲めに憫れなる農民は、「コルホーズ」へ押しかけたのである。決して生産者として行くのではない。「コルホーズ」に行けば兎に角パンが食へる。虐殺流刑はまさか「コルホーズ」迄は來ないであらう。「コルホーズ」にては獨立獨行は出來ないが、飢餓虐殺より免ぬかるゝ事が出來ると思ひ、避難所として潮の如く殺到したのであらう。心理状態の急變などと機關紙は空トボケて居るが、避難所として飛込んだ農民は果して眞剣に働くであらうか、若し五年計畫の豫定の通り二千一百万人の農民を國營、協同農場に入れたとして、此等の農民が働かなければ、そこには棍棒とピストルが有る。最近の報道によれば、政府は「コルホーズ」の監督整理の爲に二萬五千の勞働者の「打撃旅團」及赤兵十萬を農村に派遣する計畫なり

と云ふ。嗚呼、二千餘萬の奴隸、奴隸の社會主義團！これは必然の勢であらねばならぬ。スターリン一派が大露の權力を掌握して以上は、最早免ぬかる可からざる運命である。

扱二千餘萬の農夫は奴隸の境遇に甘んずるとして、幸に豐作の年續けば乞食同様又は奴隸の状態にても露命を繋ぐ事が出來様が、不幸一朝にして大凶作の年でも來らんか、露西亞は其土地廣大なる丈け非常の大規模の凶作がある。帝政時代に於ては幸に準備餘分の穀物があつたから大凶作の歳でも其被害を局限する事を得たが、現今に於ては豫備の穀物なし。機關紙の報道によるも各地方に於て既に種子を食盡した所あり、種子不足の地方敢て尠くない。大飢饉は避く可からず、實に人道上的大問題が勃發するのは必然である。否、現今の状態でも實に人道上的大問題である。宗教以上、現實の大問題である。露國民を信教迫害より救済せんものと道德的新十字軍を起した英國民始め歐洲大陸の人士は、更に其眼光を大にして奴隸、飢餓の慘状より一億數千萬の人民を救出する策を講ずるであらうか。又常に正義人道を高唱する米國人は、此人道的大問題を對岸の火災視するであらうか。將た又平生義侠心に富む日本人は之を雲烟過眼するであらうか、七千萬人中唯一人のガリバルディーが現出せないであらうか？

第十二章 スターリンの退却と更生

四月上旬、諸外國の新聞紙上にスターリンの新々經濟政策なる電報が掲載された。しかしその内容すこぶる漠然たるものがあり、且從來の私の研究から判断すればスターリンが急に新々經濟政策なるものを案出したたり、また實行したりする筈がない。これはスターリン暗殺説と同様、何等かの誤解があるひは爲にせんとする者の宣傳であらうと考へてゐた。果してその後の情報は、泰山鳴動して鼠一匹といった程度に過ぎない。ただ最後に、スターリンが大いなる失策を演じた事があるが、これについて概略を述べて見よう。

既に記した様に、クラーク征伐及び強制的コルホーズ擴張は失敗に終り、農民はなす所を知らず春蒔季節を眼前に控へて、コルホーズ及び獨立農民の播種準備が甚だしく遅れ、本年度の農作物が非常な不作を來さんとする徴候明かとなり、且農民出身の赤兵中には對農虐政に對する不平が起らんとする形勢になつた爲、スターリン一派は非常に驚いた。

そしてこれが對策として先づ第一コルホーズ組合法を制定し、コルホーズの新加入者に従前の不支拂租税、罰金等を免除あるひは半減し、家畜税をも減免あるひは二年位延期し、剩餘の農作物は市場

にて販賣する事を許可し、最後に五億ルーブルをコルホーズに貸付する事を決定し、一般個人農民に對しても地租を軽減し、あるひは取立不能の税金支拂を延期し、農産物の市場販賣を許可するのであつた。しかしながら、この緩和策はすこぶる時期を失したから、本年度のロシアの農作物は恐らく不良であらう。

要するに、昨年右傾派が提唱した對農緩和策を、本年春に至り、必要に迫られて實行したに過ぎないのである。決して新經濟政策ではないのである。しかしながらこれがために一面スターリンは、全く、右傾派の説に服従し、他面、左傾急進派の信望を失つた事は明白だから、責任を轉嫁する爲にモスコイ黨委員會及び黨組織配分局の第一秘書バウマンを免職したのであるが、これはスターリンにとつては、確かに一大失策であつた。

バウマンはスターリンの兩腕であるモロトフ、カガノウイツチと並び稱せられ、スターリンの三人男の一人として、黨組織配分局の第一秘書役といふ重要な椅子を占めてゐた。彼は、スターリンの味方及び部下を黨の機關並びに樞要部に引き入れるためには大いに盡力し、また昨年以來、コルホーズ擴張のためには骨身を惜まず活躍し、スターリンのためには實に忠勤をぬきんでたのである。しかしこれがかへつて仇となり、「暴力壓制を以てコルホーズの不自然的擴張を招來したものと」

して諒旨免官されるに至つた。こゝにおいてスターリンの威信は少からず傷つき、黨の下層部は猛然としてスターリンに向つて反對運動を開始した。また一方、従来スターリンに對して窃かに敵意を含有するた黨の上層部もこの好機に乗じ陰謀を運らし始めた。過去五ヶ年間微動だもしなかつた。スターリンの権力が、足下から動搖し始めたのである。

この六月廿五日は、中央委員會、政治部員並びに秘書役長を改選すべき全露共産黨大會が開かれる日である。つまりスターリンの第二回の運命が決せられる日が一日々々と近づいて来る譯である。

近頃に至つて漸く反對派も、スターリンのヒタ隠しに隠してゐた権力カラクリの秘密を覺り、今度は黨の機關において雌雄を決せんとしきりに潜航艇式秘密運動を起してゐる。

一方スターリンは最近ひそかにその失策を覺り、御用紙イズヴェスチャ紙に内命を下して、バウマンを黨中央委員會の秘書役に昇任させるであらうといふ様な事をほのめかしたのである。しかし一度傷つけられた威信は、容易にこれを恢復する事が出来ず、権力の権化スターリンも萬策つき、遂に最後の奥の手を出し始めた。

既に述べたやうにスターリンは権力維持のためには何ものをも犠牲にし、如何なる手段方法をも選まず、また如何なる事でも斷行するのである。反對緩和に施す策なしと見た彼が、反對派の犠牲を要

求する位は當然である。果して、反對派の猛者と目指されてゐたシエロフ及びラビノーウイチの兩名は行方不明になつた。そして彼等はどこへ行つたか。ゲー、ペー、ウー本部の秘密室へ、そして一發の下に生命を絶たれたであらう。

その他右傾及び左傾の反對派青年達數百名は、あるひは拘留され、あるひは流刑に處せられつゝある。ゲー、ペー、ウーがスターリンに盲従する限り、六月廿五日の決戦においてもスターリンは無論勝利を得るものと思はれる。しかしながら彼の大磐石の如き地位にも今や大きなヒビが入つた事はどうしても否定し得ぬ事實である。

對農緩和策實施に少しく遅れて工業方面においてもスターリン一派は後退した。社會的競争、無休操業、工場一頭制等の名案が實行されたに拘はらず、工業は豫期の効果を奏する事が出来ず、二大目的たる生産費減少及び品質の改良は見事失敗に歸した。従来専門家、非黨員たる技師等を冷遇し、黨員たる支配人あるひは工場長は、工業不成績の責任を専門家の怠業または故意の事業妨害に歸し彼等を虐待してゐた。

然し、最近當局もその非を覺り専門家優遇の途を開き、非黨員の専門家でも支配人または工場長に任命し、その食糧分配量も第一級労働者と同様にし、黨の支配人または工場長でも事業に精通

しないものはその職を免ずると共に、彼等に専門的知識を習得する義務を負はしめた。しかしながらかくの如き姑息な改良位では到底所期の目的を達する事は困難である。

機關紙ブラウダ紙等は、スターリン一派の退却を以て「それは決して後退したのではない。中農を援助するための一辦法に過ぎない。共産線より一步も退却したものである。しかも、退却したといふのは、右傾派が故意にねつ造したものである。我等の仇敵は依然右方にある」と大いに辯解に努めてゐるが、實に苦しい言譯である。

議論は別として、に見のがす事の出来ぬ事は、去る四月八日林業において強制労働を公認し、木材輸出増加を計る事となつたのである。即ち法令を以て奴隷制度を定めた譯である。奴隷制度は、後退か、あるひは共産主義への前進か、我等のあへて聞かんとする處である。

英國下院議員ベルラス氏は、四月廿一日「奴隷國より物資を購入するのは文明國の恥辱である」と述べ、ロシアの木材及びその他の貨物の輸入を禁止すべき旨を下院に提言したのである。米國ではこの七月ロシアの貨物は奴隷的勢力の生産物として陸上を禁じた。ロシア各機關紙は、これに對して果して辯解の辭を見出し得るであらうか。

附記、六月廿五日開會された全露共産黨大會は、豫定の通りスターリンの大勝に歸し、右傾派の頭

目と目されたルイコフ、トームスキー、ウグラーノフ等は後悔演説を試み、漸く醜首を免ぬかれ、中央委員會に新選された。この第十六回大會は、歐洲列國が非常の興味を以て注目して居たに拘はらず、何等の變哲もなく七月十三日無事閉會した。會議の様子は、こゝに事新しく記載する價值もないのである。スターリン權力「カラクリ」の章に於て私が明言して置いた通り。幹部の提案は満場一致を以て可決せられ、スターリンの粗野なる演説は大喝采を博した。

閉會に先つて、例の通り中央委員會各員、政治部長、秘書役等が改選されたが、降参人ルイコフ、トームスキー、ブハーリン以外の者は悉くスターリン一派の者で別に斬新な顔觸れは無いが、後日の爲め其重なる者を左に掲載する。

中央委員會各員七十一名の中新選された重なる者は、スターリン、カガノーウイチ、モーロトフ、カリーニン、ウオロシロフ、ルズダーク、クイブイセフ、ミコヤン、カシオール、ヤココフ、メンゼンスキー、キエロフ、等。

そして新中央委員會が改選した政治部長、秘書役等は左の如し。

新政治部長　スターリン、モーロトフ、カガノーウイチ、カリーニン、ウオロシロフ、キエロフ
クイブイセフ、ルイコフ、ルズダーク、カシオール、

を抽んづる者の爲めに殊更に第二番目を明けて置いたのか、改選後日尙ほ浅いから私も其真相を知る事が出来ないのを遺憾とする。

同上候補者 ミコヤン、ヂユバー、プロトロフスキー、アンドレーエフ、シユルツォフ、
新秘書役 スターリン、モーロトフ、カガノーウイチ、バウーマン、ボスチーセフ、
秘書役長 スターリン

バウーマンはスターリンが約束した通り秘書役に昇進した。トームスキーが永年勤めて居た政治部より遠ざけられたのは所謂右傾派の頭目と目指された爲めであり、ブハーリンも同様、且つ大會に缺席した事がスターリン一派の反感を招いたが、多年の功勞にめんじて漸く中央委員會員に改選されたものだ。有名なカリーメネフが見えないのは淋しい感じを與へる。ジノウイエフは本年の始め全く敬遠せられ、カザン大學校長の名儀の下に漸く其目を暮らして居る。右共産黨幹部の顔觸を一見した丈で、當分の中スターリンは、萬々歳である事は明かである。こゝに注目す可き點は、スターリン丈は秘書役長に再選された事が明記されてあるのに以前第二秘書役はモーロトフ、第三秘書役はカガノーウイチであつたが、今回の公表を見るに、アルハベツト順に新秘書役の姓名を書いた丈で、第二、第三等の順番が書かれて居ない事である。順序よりすれば第二は無論モーロトフ、第三はカガノーウイチである可き筈であるのに全く之を記載してないのは何故か。スターリンがその後繼者を決定する事を好まない爲めか、或はモーロトフより其後釜を狙はるゝ事を恐るゝ故か、或は今後一層自分に忠勤

第十三章 スターリンが死んだらロシアはどうなる？

ロシア唯一の主人公——獨裁官スターリンが死んだら、赤露は土崩瓦解するであらうか？、共産権力は滅亡して新たに資本主義或は他の主義の國家社會が創立されるであらうか。或は共産黨は依然としてロシアを支配するであらうか。この大問題を解決するのは實に容易の業ではない、また此難問題に答ふるのは無鐵砲無謀であとの非難を蒙るやも知れないが、私は窃かに信する所あり、大膽不敵にも茲に解答を試みるのである。

前章に於てスターリンが其一身上の利害關係と其拔擢した人物より觀察して、右傾して新政策を執る事の出来ない理由を述べた。スターリンは赤露唯一の實權者であるから、右傾して新政策を執る事も出来る様に思はるゝが、現今に於ては既に時機を逸したから、右傾は最早不可能である。何となれば彼が選抜した黨の樞要地に据へ置いた黨員其者が却て大なる障礙物となるからである。だから萬一スターリンが實際上方向を轉換して新政策を執らうと決心しても、最初に黨機關内の編成を全く一變せねばならない。之を成すには數年間の歲月を要する。のみならず意外の妨害が勃發せぬとも限らぬから、現今の状態に於ては右向傾は全然絶望である。しからば假りにスターリンの代りに現時の共産

るなうどはアシロらだん死がンリータス



内外貿易大臣格ニコヤン

黨中の有名なる者が實權を掌握したとすればどうなるか。假りにスターリンが急死したとせば誰がロシアの天下を取り得るか。ルイコフか、ブハリンか、ルズダークか、カリニンか、或はニコヤン、グイブイセフ等の連中か、否、否、實權は必らず、スターリンの右腕たるモノロトフに移るに相違ないと思ふ。彼はスターリンを除けば、共産黨權力のカラクリに最も近く、スターリンに次ぐ第二者である。スターリンが暗殺されたと假定せば、必然の勢、彼はスターリンの地位に就き、そしてスターリンの總ての組織及政策は、其儘、襲踏繼續せらるゝであらう。此趨勢を觀破したスターリンは、秘書役改選に際し態々と第二、第三の秘書役を決定せなかつと思ふのである。しかし秘書役の順番位でこの趨勢を覆がへす事は出来ないのである。假りに百歩を譲り、ルイコフ、カリニン、ルズダーク連中の一人が實權を握つたとしても、其根本政策に於て變化を來たさうとは思はれない。以上黨古來の人物の外、共産黨中の何人が實權を掌握するとした所

が、現今の一般政策が變更されやうと想像し難い、何となれば彼等の思想、一身上の利害に關する考慮、一般政治的觀念が、スターリンと類似して居るからである。この個人的考慮が、彼等の右するか、左するか、決定的一線を劃するものであるが、尙ほ此外スターリンが數年間一定の方針に向て拔擢した黨の幹部、機關が、資本主義右傾に對しては大なる障礙となるのである。

最後に、スターリンがナポレオンや亞歷山大王或は豐太閣の様に、その個人的非凡の手腕と識見によりロシアの實權を掌握し聯邦を平治して居る大豪傑であるとすれば、スターリンの死は即ちサヴェート共和聯邦の土崩瓦解或は共産黨滅亡の最大原因となるであらう。しかしながら彼の實權を掌握する根元は、たゞ共産黨の組織の利用であつて、巧妙に共産黨の幹部及機關をあやつり、權力のカラクリにより權謀術數を以て漸く權力を保持し居るに過ぎないから、彼の死亡は一時的シヨックを與ふるのみで、共産權力の大勢には大なる影響を及ぼさない。獨逸隨一のロシア通セツフェルは、スターリン死亡せば共産黨も衰滅に歸すと説いて居るが、これは彼がスターリンを買被つて居るからである。

右の様に各方面から觀察すれば、スターリン死後と雖も、革命が勃發し或は改革が行はるゝものと思ふのは大なる誤解と云はねばならない。尤も數年前に於ては改革又は革命の見込が多少共あつたのである。何となればスターリン一派の幹部黨員が、黨の機關の上下を通じて未だ全く充實されてゐな

い許りでなく、共産黨上層の一部分に於て共産權力を撲滅し新政策を實行せんと陰謀を抱いた者があつたからである。フルゼン將軍の如きは其一人である。

フルゼン將軍はトロツキーに代つて陸海軍大臣に任命され大に赤軍を改良し、赤軍の將校中に右傾の人士を集めナポレオン式變革を試みんとしたが、スターリンの爲に胸中の祕計を觀破され、スターリン一流の巧妙な方法を以て殺害せられたが、其夫人も夫の後を追つて自殺したのである。

フルゼン將軍の死後、共産黨上層部に於ては、内部より革命を企つる様な人物は顯微鏡で探がしても見當らない。共産黨萬々歳か。

當分の中、共産黨は倒れさうもない。假りにスターリンが死んだとて、かの組織整然たるゲー、ペー、ウーが共産黨の爪牙となり黨の爲めに懸命に働く間は民衆はどうする事も出来ない、共産權力は持續するものと解するのが至當である。半狂氣の共産黨に支配され、奴隸の境遇に墮落しつゝある善良なるロシア人民こそ實に見る眼も氣の毒千萬ではあるが、世界の文明國民が人道上的新十字軍を起すか、或は何にかの理由で大戦争でも勃發せない限りは彼等を救済する事は至難の業である。ゲー、ペー、ウーの中堅として近東及埃及方面に於て辣腕を振つたアガペーコフが巴里に於て、自發的にゲー、ペー、ウーに對し反旗を翻したのは、ゲー、ペー、ウーの一角が破れつゝありとの感を抱かしむ

る様に思はるゝが、まだ、まだ、これ位の事は蒼海の一粟、大海の一滴に過ぎない。前途頗る遼遠と云はねばならぬ。

第十四章 赤軍の内容

帝政ロシアのミタリズムは、世界の恐怖であつた。西に、東に、南に、北に、アジアを縦横に席卷したその侵略は、如何に世界の平和を脅威したことぞ。

今や帝政ロシアに代つて、共産ロシアが建設された。平和論は新ロシアの絶對主張である。先年、國際聯盟會議に出席したロシア代表、リトウイノフ（現外務大臣）が、軍備全廢論を眞つ向に振りかざして列國の代表者を煙に巻いた事がある。

戦争は悲惨である。平和を高唱するに對して、我々は何等の異論もある筈はない。だが、共産ロシアの侵略が帝政時代のそれよりも更に甚だしからんとするを、何んと説明してくれるか。戦争を否定し、軍備全廢を主張する赤露それ自身が、實は世界第一の軍國主義者であり、帝國主義者である事を何と説明してくれるか。

ソヴィエツト・ロシアの陸軍は、帝政時代のそれにも増して強大である。試みに、世界列強の陸軍勢力を左に比較して見よう。

	平時兵數	戰車數	高射砲數	飛行機數
露	六十四萬	六二	四四	一、一〇〇
(外に民兵四十二萬)				

英	三十四萬	七〇〇	九六	一、五〇〇
米	卅一萬六千	一、〇〇〇	三〇九	一、五〇〇
佛	五六萬五千	一、五〇〇	二〇〇	四、〇〇〇
伊	三十九萬	七四	一四四	一、八〇〇
獨	二十五萬	條約で禁止	二八	條約で禁止その代り 民間大飛行會社あり
日	二十萬	四〇	四〇	六〇〇

右表の示す通り、赤軍兵數は實に世界第一である。その強大な兵數を擁してなほ口に軍備全廢論を唱へるのだから、何んと御返事申上げていゝのか、まことにハヤ痛み入り申すのである。

ロシアが最も力をそぐ點は飛行機隊である。モスココ郊外には世界一と稱せられる飛行場も設けられてある。飛行家の養成にも細心の注意を拂ひ、その技術は西歐諸國に毫も劣らぬ。戦時においては、飛行機數を三千臺以上に増加する事は何んでもないとは當局者の高言する處である。

次いでロシアの力をそぐものは化學的戰術である。特にタンク、毒ガス入爆彈、破裂爆彈等の製造には驚くべき進歩を見、一三年前から大砲の製造改良にも全力を傾けてゐる。今ロシア常備軍の内譯を示すと次の通りである。

- 一、歩兵 正規 廿八師團
 民兵 四十二師團
- 一、騎兵 正規 十師團及獨立旅團十
 民軍 二師團
- 一、飛行隊 九十九中隊
- 一、戰時聯隊 十五
- 一、裝甲自動車隊 九
- 一、ゲー・ペー・ウの精兵 十五萬

これらの常備軍中、赤露の最も誇りとするものはその騎兵である。現在、ロシアは士官學校が合計卅五校あるが、各兵科によつて獨立し、入學年齢は十八歳以上廿二歳まで、修學年限は步騎三年、砲兵は四年である。

ロシアは國民皆兵主義で徵兵制を布いてゐるが、昨秋フブノフが文部大臣に就任して以來、軍國主義を更に徹底せしめる爲、小、中、大學校における軍事教育を大に擴張獎勵してゐる。

赤軍の内容

海軍は漸く整理時代の第一期を終つたばかりで、列強のそれに比較すればすこぶる貧弱である。しかしながらバルチック沿岸の諸小邦を威かくするには充分な勢力である。その概要を示すと次のやうである。

噸	型	隻	數
一、戰	闊 艦	一、二六、〇〇〇	四
一、大	洋 巡 艦	七〇、〇〇〇—一、五〇〇	三
一、中	巡 洋 艦	六、八〇〇	二
一、大	驅 逐 艦	一、二〇〇—一、七〇〇	一三
一、小	驅 逐 艦	三五〇—六〇〇	一九
一、潛	水 艦	五〇〇—一、〇〇〇	九

ロシア當局者の最も恐れてゐる人物は、ポーランド獨立の元勳ピルスードスキー將軍である。若しロシアとポーランドの間に戦争が起る事があれば、波軍を率ゐて一舉赤軍を撃滅し得る唯一のポーランド人こそ、ピルスードスキー元帥であるといつても、決して過言ではないと思ふ。即ちピ元帥は、クレムリン宮殿喜憂のパロメーターとなつてゐるのである。

容内の軍赤



フローシロオウ員部治政會員委央中

ピルスードスキー元帥が、あの常に喧騒を以て有名なポーランドで、政權を一手に掌握し始める時は、クレムリン宮殿はこの上もなく狼狽する時である。これに反し國會の議員達が英佛社會民主黨の虎威をかり、喧騒を極め、ピ元帥が政權より遠ざかる事があればクレムリン宮殿のお歴々は胸をなで下してホツと息つくのである。

赤露當局者は、ポーランド軍の強弱が、その總司令の人物にかゝつてゐる事を充分に察知してゐる。しかも面白い事には、赤軍の總司令官及び幹部の人物に關しては何等の注意も拂つてゐない程無關心である。

といふ事よりも、むしろロシアのナポレオンや蔣介石が彼等の中から突然、飛出して来るのを恐れてゐるのである。だから、ロシアのナポレオンともなり、蔣介石ともなりさうなトロツキー及びフルンゼーの代りにウオロシローフを總司令官に任命し、參謀總長ツハチエーフスキーの地位にシヤボシニ

コフをすゑたのである。これらの人々の間には、その人物に非常なる相違がある。しかし、スターリンは、たゞナポレオンの飛出す事のみを恐れてゐる爲、むしろ劣等な人物にかうした地位を與へて満足してゐるのである。

カ・エフ・ウオロシロフは無能にして無邪氣なる人物である。彼は政治部が懸命に嚴秘とする事項をうっかり口に出す事が珍しくない。

最近の事であるが、ウオロシロフは、陸軍士官學校の卒業祝賀式に出席したものである。彼は時めく陸海軍大臣として一席演説をやり出したまではない、のだが、多分の無能さと無邪氣さを持つ彼は、演説してゐる中にすつかりいゝ氣持ちになつてしまひ、政治部の秘密作戦をしゃべつたものだ。「友達よ、若し戦ひが開かれたなら、諸君は敵をして、戦争を國境内に開始せしめず、短き、強大なる打撃を敵の主力に加へ、速に戦争を終結させることを疑はない」と。

ポーランド軍に對するロシア側の根本作戦は、疾風迅雷的に一氣敵の主力を破るにある。これは政治部が絶対に嚴秘とする作戦方針なのである。ところがウオロシロフ御大は政治部の秘密をすつかりしゃべつてしまつたのだ。

ある人が、ウオロシロフに「政治部の極秘とする作戦方針を公表するなど不都合ではないか」と

容内の軍赤

詰めよつたところ、ウオ將軍は驚いて答へた。「おれは何も政治部が決議したとはいはなかつたよ」と。以て彼の無能と無邪氣さ加減がうかゞはれよう。

筆の序に素ツ破抜くが、共産黨の軍事上の秘密を知らんとする人は必ずブラウダ新聞、わけてこれに掲載されるウオロシロフ御大の演説を讀むがいゝ。何となれば、ウオ大臣は軍事上の秘密でも、どしどし洩らす程の無邪氣なる天性の持主であり、またブラウダ紙は、赤いロシアにあつて陸軍の檢閲を受けざるたゞ一つの機關紙であるからだ。

軍事上の秘密があまりに漏れる爲め軍事當局者が、恐るゝ政治部に對し

「最近數ヶ月の間に、ブラウダ紙は四十二回も軍事の秘密を洩らした。是非ブラウダ紙に對しても軍事檢閲を許可されたし」

と願出た事がある。すると政治部では非常に御機嫌を損じ

「我黨の中央機關新聞を小役人共に檢閲させるなどは以ての外だ」と一喝の下にどなりつけたものだ。近來赤軍幹部の更迭が頻々として行はれる。殊にスターリンが、フルンゼ將軍の陰謀を知つて以來は、その更迭が特に甚だしい。フルンゼ將軍が自ら選定し採用した陸軍の幹部は、共産黨の立場から見ると、その大部分が不良分子であつた。即ち共産黨に反對の者、またよし反對でないにしても共産

黨に好意を持たぬ者であつた。

この事實を知つたスターリンは一方ならず驚いた。彼は、何とかして速かに陸軍幹部の不良分子を驅逐し、共産黨に柔弱なるものと代へねばならぬと苦心した。そして、この目的遂行の爲には、自己



前軍火匠故ルフセル

に全く柔順であり、むしろ無能に近い者をその首領に据ゑる事を最も得策とすると考へた。

よつて、フルンゼ將軍の陰謀を知ると同時に、彼はウオロシロフをその後任者に定めるのであつた。ウオロシロフは、スターリンの命を體して就任後、直ちに幹部更迭にどうか、つたが、その斷行した最も重要な更迭は、ツハチエフスキーを左遷し、シヤーボニコフを後任とした事である。

ツハチエフスキーはまだほんの若年者である。しかも軍事にかけては驚くべき天才を持つてゐる。不撓不屈の精神と溢るゝ元氣とを持つ彼は、若年ながら戦術にかけては、何人にも敗けをとらない。

その彼が、ウオロシロフの爲に左遷されてレニングラード地域の守備大將に轉任の止むなきに至つたのだから、少からず憤つてゐるのである。

だが、スターリン自身の立場から見るときは、かうした天才的人物はこの上もなく危険なのである。何となれば、いつ何時、機に乗じてナポレオンとなり、スターリンの地位を奪ふかも知れないからである。國家の大事より、自己の安全を先に考へるスターリンの特性はこゝにもよく現れてゐる。

平時にあつては、赤軍は共産黨に全く服従してゐる。といふのは黨委員會や黨細胞やゲー・ペー・ウーの軍隊等により、四方八方から嚴重な監視を受けてゐるからである。即ち内心は如何に不平不満を持つてゐても、身動きもならず、黨の命令に服従するより外、仕方がないのである。

赤軍の内容

だが、一度戦争となれば、形勢は俄然一變するであらう。軍隊の勢力は急に増し、スターリンが最も恐れてゐるボナバルト式變革及び革命の氣勢は刻々増して來るであらう。即ちさうした時、ツハチエフスキーの如き腕力が參謀總長といつた重要な地位にあつて全軍を指揮し、動員及び作戰計畫の實權を握り表面共産黨員を装ほふ士官を幕下にして、叛旗をひるがへすならば共産政府の運命は眞に累卵の危きものがある。この點から見て、ツハチエフスキーの左遷は避け得ざるものであり、またスターリンは早くより彼を左遷せんものとねらつてゐたのである。

スターリンはフルンゼ將軍の後任者としてウオロシロフを選んだ時、彼は順序としてウオロシロフをモスコー軍管司令官に任命した。この時分モスコー警備軍參謀長を勤めてゐたものは、帝政時代からの古きシヤボシニコフ參謀官であつた。

フルゼンの死後、ウオロシロフが革命軍會議長(陸海軍大將)に任命されるや、シヤボシニコフはウオロシロフに代つて、モスコー軍管司令官に任ぜられた。しかし、更にツハチエフスキーに代る下準備として「軍隊の頭腦」なる書を著す事を、ウオロシロフに命ぜられるのであつた。専門家の言によると、この書物は實に平凡極まるものであつた。しかしながら中央委員會の内命により各新聞は一齊に賞讃を浴せかけるのだつた。その後間もなく、シヤボシニコフはツ將軍に代つて參謀總長の重位についたのである。

赤軍内のいはゆる不良分子は、以來相次いで免職された。第一の槍玉に上つたものは半共產黨員：共產黨の候補者……ではあるがツハチエフスキーと關係の深いコルクといふ優秀な士官である。續いて更迭されたものは白露軍管司令官(ポーランド戰線司令官)である。その後任にあげられたものはエゴロフといふ俳優出身のヨイドレである。彼は數年前、例の南支に活躍した例のボロチン一派と共に、支那革命軍の參謀になつた事もある。盲從的人物で、ポーランド國境の軍司令官たる重位

容内の軍赤



フネメーカ

の明はないが、至極從順で、仕事好きで忍耐力もあり、コセくと小事にいそしんでゐる。だが、ど

うひいき目に見ても次官の器ではない。

だが、事務的才能と忍耐力と組織的能力が必要な場所には、彼はすこぶる便利な男だからよく派遣

につく資格は全くない。

要するにフルンゼ及びツハチエフスキー一派の連中は、こゝ二三年來絶え間なく免職され左遷され

昨今大體放逐の目的が達した様に思はれる。

しからば、この免職及び左遷の結果はどう

なつたかといふと、赤軍の首脳部が甚だしく

貧弱になつたといへるのである。陸海軍大臣

であり參謀總長であるウオロシロフは、前

述の如く軍事的見地から見ればほとんど零で

ある。彼を輔佐すべき陸海軍次官ウンシリフ

トも彼以上には出ぬ。

ウンシリフトはポーランド人である。先見

されたものだ。たとへば一九二三年の秋、彼がゲー・ペー・ウーの次長だつた時の事、政治部の秘密命令を受けてチエキスト（ゲー・ペー・ウーの役人）の大部隊を引き連れてドイツへ乗込んだ。彼はドイツにおける革命を指導するいはゆる五人組の一人に任命されてゐたのである。當時、好機會をねらつて武力的革命を實行する爲に「赤百人組編制」の重任を背負つてゐた。だが、今日にあつては軍隊内でも権力の機關内でも、彼は何等の勢力を持たぬ。たゞ陸海軍次官の虚位を擁するに止まつてゐる。

（本年六月三日、ウンシリフトは國民最高經濟會次長に榮轉し、陸軍次官には、日本軍浦鹽撤退の際赤軍側の司令官として來浦したウボレーウイチが昇進し、海軍次官にはガマルニツクが任命された。軍備擴張の結果として一人にて陸海軍次官を兼ねしむる事は不便となつたのである）

赤軍の上層部には裝飾的人物が多い。エス・カーメネフやブヂユンヌイの如きその適例である。

カーメネフは無論、軍事行政に關與した事もなくはまた軍隊を指揮した事もない。しかも彼が赤軍の總司令官に任命された理由は多數の舊將校を赤軍に誘引せんが爲であつた。總司令官としての仕事は彼にはなく、またこれを仕途ける軍事的才幹も勿論持合はさぬ。そして現在では裝飾的價値もなくなつた彼を、今なほ名譽職に据置くゆゑは、これによつて戰爭の際、豫後備の舊將校を多數集めんがために外ならぬ。

赤軍の内容



トフリユシンウ長次界濟經高最民國

ブヂユンヌイはカーメネフと同様裝飾的人物に過ぎない。彼は帝政時代一兵卒から昇進して軍曹に上つた者で、舊士官階級の代表者として飾り者になつてゐるのである。

彼は内亂時代、驚くべき勇敢振りを發揮した、殊に殺人に關してはその巧妙と迅速さに斷然他を抜

いてゐたから、一部の馬賊に推されて隊長となり各所に出没して強盜を働いたものだ。所がある時、白系の軍隊と衝突してこれを破つて以來、彼の名聲が大いにあがり部下に馳せ集まる者がおびたゞしかつた。

共産黨はこれを見ていゝ道具だと考へ、巧みに懐柔してその味方となし、參謀士官や兵器彈藥類を送つて彼を聲援した。内亂が鎮ま

つて後、彼は共産黨員となり裝飾物の待遇を受けてゐるが、無學無智、たゞ無邪氣と勇氣と野心のないのが彼の取柄なのである。

かくの如く赤軍上層の人物にどれ一人として満足なものはないが、こゝに見逃す事の出來ぬもの

はフブノフである。

フブノフは昨年九月、文部大臣に昇進した。彼は共和國政治局々長で全國の軍事に關するあらゆる政治事項はその管下にある。陸軍部内においても、大いに重きをなしてゐた。彼は教養ある人物で事務的才幹を有し、勤勉力行、部下の氣受も甚だよかつた。だが果して文部大臣として適任なりや否やは今批評するは早計である。

かく述べ來ると、何んだかロシアにこれといふ軍人がない様であるが、決してさういふ譯ではない。相當の手腕もあり、識見ももつた軍人はある事はあるが、そうした人物は結局共産黨の恐るゝ所であるから、彼等は何等の權勢も持つ事が出来ない。軍の行政事務に干與する事などは思ひもよらぬ。彼等は結局下積みで満足し終らねばならない。

スウエーチンの如き、戰略家として有名であるが、陸軍大學の單なる一教師の椅子を與へられてゐるに過ぎない。もつとも彼はマルキストの假面をかぶつてはゐるものゝ、共産黨は用心して責任ある地位を與へない。

ウエルホーフスキーは帝政時代からの古い軍人である。軍事上の諸問題には深い研究があり、陸軍大學教授といふ閑職についてゐた、最近マルクス主義を謳歌した一論文を提出し、まんまと北コーカ

赤軍の内容



イヌンヨシア 將大的飾裝

サスの參謀長に榮轉する事が出來た。クイブイセフはシベリア陸軍行政の重要地たるノウオシビルスク方面の司令官として有名だつたが、極東軍總司令官たるブリユヘルと意見の衝突を來し、つひに免職された。彼の後任にはエム・レバノドフスキーがなつたが大した人物ではない。

以上述べた所を一言でいふなら赤軍幹部は頗る貧弱である。赤軍の最も重大な弱點はここにあるのだ。この弱點をまさか知らない共産黨でもあるまいが、彼等是一向これに無關心であるのは何故であらうか。それは、いざ鎌倉となると戰略戰術を決定するものは、ウオロシロフでもシャボシニコフでもまた參謀總長、軍總司令官でもなく、黨の政治部

であるからだ。所が、この國家危急事の鍵を握つてゐる政治部の内容は年々惡化しつゝあるのである。有爲の人物は退けられ無能奸佞の徒が横行しつゝあるのである。この事實は即ち戦時において赤露の最大弱點と

なるのは明がである、この弱點を彼等は理解してゐないのである。

赤軍幹部の内容は前述の如くであるが、その部下の將校も幹部の異動につれて最近數ヶ年頻々として更迭され、今日では古き將校はほとんど全部驅逐され、新將校がこれに代つてゐる。上層部に残つてゐる舊將校もたゞ専門家なるが故に利用されてゐるのみで、何等の勢力もない。たゞ事務にこき使はれてゐるのみである。

次に、軍隊の教育について少し記して見よう。

赤軍兵士は、いづれも小さな苦しい兵舎にぶち込まれてゐる。彼等は一日の中僅か數分の餘裕さへ與へられてはゐない。半日は軍事、半日は政治に關する教育を絶え間なくつめ込まれるのである。

軍紀は嚴肅である。軍の政治局は全力を盡くして兵士の教育に當つてゐる。軍隊内におけるゲー・ペー・ウーの特殊部隊は要所々々に網を張り、反革命、反共産運動の如きは直ちにその萌芽を抜きとられるのである。赤軍の兵士達は帝政時代と同様に、その故郷より遙か遠き地方へ送られてゐる事は注意すべきである。たとへばウクライナ出身者は、中央アジアへ、シベリア出身兵士はウクライナへといふ風である。

赤軍の内容

平時においては、赤軍は共産黨の強大なる武器となつてゐる。共産權力に赤軍が反抗するといふやうな事は絶対にない。だが、假りに内亂、騒動が起るとしてもその鎮定には赤軍は必要ではない。その任務を遂行するためには、ゲー・ペー・ウーの國內軍が嚴然として存在してゐるからである。平時における赤軍はかくの如く共産黨の武器であるが、一度び戦争が起つた場合は、形勢が俄然一變する恐れがある。

假りに戦争が勃發したとして考へて見よう。赤軍の兵士は大部分農民の出身であり、その現役兵はまだ十分に共産主義を吹きこまれてゐない。従つてまだ本當の共産黨員にはなり切らず、いはゞ中ぶらりの形にある。この時、敵國が共産黨のみに對して宣戦を布告し、共産黨の暴政より農民を救ひ出す事を目的とし、かつその政治上の綱領も農民兵士の意向と一致する所ありとせんか。赤軍の大家は共産黨より脱し、解體するであらう。

これに反して、若し敵國の宣戦理由がロシア農民並びに兵士の意志に反するものであつたなら、兵士は團結して共産黨を擁護すべく共産當局は得たりとばかりに赤軍を煽動利用し、奮戦させる事であらう。

この外最も重大なる問題は、赤軍將校の意向である。現在の赤軍將校は純然たる共産黨員であるか

ら、共産黨擁護の爲に奮闘する事であらう。だが數ヶ月の戦ひを續ければ、彼等の中に死傷者が多數出る事は當然である。その場合、これを補充する者は一體何者であらうか。いふまでもなく先きに免職された舊將校達である。共産當局は彼等を不穩分子と見なして免職はしたものの、彼等は今なほ豫備將校として残つてゐるのである。

すべて、これらの舊將校、知識階級出身の士官達は現在、日夜職業を求めて奔走してゐるが中々見つかからない。といふのは、彼等は軍事上の知識の外、別に専門的教育ともなく、また不穩分子として黒表に上つてゐるからである。彼等は無論共産黨をうらんでゐる。彼等が共産黨出身の將校と代つて兵士を指揮するやうな事になつたら、その結果は推して知れよう。

ヨーロッパロシアにおいては、一九二八年から二九年頃と、極東においては一九一八年から二一年と、現在とを比較すると、國內の事情は一變してゐる事を忘れてはならぬ。その頃にあつては舊將校の大多數はロシア國家の爲、ロシア民衆のため、はたまた自らの爲と思つて共産黨の味方となり、いはゆる白系露人と戦つたが今ではさうした考へはすつかりなくなつてゐる。

ポーランドとの戦争を、ロシア當局者が非常に恐れてゐるのは、財政難の外、以上の理由も含まれてゐると思ふ。

赤軍の内容

赤軍の最も長所とする所は、その兵士がいづれも體力強健なる事と、飛行機の数が多くかつ優秀なる點にある。またドイツと秘密條約を結びドイツの専門技師として新銳の軍器特に強烈なる爆彈、毒ガス、タンク、大砲等の製造中であるから、赤軍を侮ることは出来ない。

最後にロシアの財政状態と作戦一般方針とを述べて見よう。

ロシア當局者の目ざす敵はポーランドである。ルーマニア、フィンランド、エストニア、ラトヴィヤ等は毫もその眼中にはない。今かりにポーランド一國と戦ふにしても、ポーランドの三十師團に對しては新兵器を有し且つ充分訓練された兵士は、少くも百萬乃至百二十萬を要するといふのが、ロシア軍事當事者の見解である。

しからば第一に必要な軍費は如何にしてこれを得べきか。(一)内債、(二)豫算の編成變更、(三)租税、(四)紙幣發行の四つに待つより外に方法は無い。今一つ外債があるけれど、これはたとひロシアが起したとて何國も應ずる事はあるまい。以上はこれを約言すると、戦時において國民收入、國民の富の分賦を變更して、その大部分を戦費にあてる事になる譯だが、ロシアの現状からすれば、この可能性は甚だ疑問といはざるを得ないのである。

先づ、ロシアの財政的機關信用制度はお話しにならぬ程貧弱である。政府が一手に掌握してゐる大

商工業の流動資本は、平時においてさへ常に不足を告げ、その補充に苦しんでゐる位だから、この流動資本の一部を戦費にあてるやうな事があれば、國民經濟組織は忽ち破壊しなければならぬ。貸付貯金はどうか。帝政時代においては、國民貯金二十億金ルーブルに達したが、一九二七年の夏には、僅か一億五千ルーブルしかなかつた事は、當局者の公表する所である。これを全部利用するとしても半日の戦費にも當らない。

しからば内債は如何、個人の資本なるものは最早現在のロシアには皆無であるから、内債に應募させる事は不可能である。國家の商工業流動資本を利用することの不可能なる事は、既に述べた通りである。困窮せる農民に應募さす事も望まれぬ。最後の手段として労働者、使用人及び役人から、強制的にその月給の一部をさかして應募さすより外に途はない。だがこれは彼等の不平を招くに役立つのみである。

支出豫算繰替は如何、即ち大いに行政費を減じてこれを戦費に充てる場合、雇人及び役人の大部分は失業者となり、官廳の事務は停滞しなければならぬ。

かう考へて來ると、紙幣増發以外に金の出道がないのである。だが紙幣は既におびたくしく増發され金貨準備は益々減少せんとしてゐる、即ち一九二七年秋頃には準備金貨四億に對し……この中三億

は信用維持のために外國に預金し一億だけ國家銀行に保管……既に廿億の紙幣を發したが、一九二九年の十一月末には發行高實に二十九億六千一百五十萬の巨額に達した。現在では恐らく三十億臺を突破してゐることであらう。従つてルーブル相場は低落の一途をたどり二七年頃ルーブルの相場は四十錢内外だつたが、今では三十錢乃至二十八錢に暴落した。だから紙幣増發といふ事も現在では全く不可能であるといへる。

しかもロシアには物資が甚だしく缺乏してゐる。これは偶然ではない。共産黨の經濟組織そのものが物資の貯藏を許さないのである。共産黨の見地からすれば、この物資缺乏は、共産主義に敵意を含む、安逸、富裕なる階級の生長を防止するから、共産權力には有利なのである。しかしながらその半面においては物資は缺乏せざるを得ない。機關紙ブラウダの公表する所によればロシアには一週間か多くて二週間を支へるだけの物資しかないとの事である。

財政當局及び専門家は、物資、財政の二方面から見てポーランドとの戦ひは二ヶ月以上繼續出來ぬ旨を報告した。流石の政治部もこれを承認せざるを得なかつた。その結果、今は失脚したツハチエフスキーが「ポーランドとの戦には一擧ワルシヤウを衝くべき」作戰計畫を樹てたのである。

第十五章 宗教撲滅と新十字軍

鐘が鳴る。鐘が鳴る。夕べ静かに厳かな鐘が鳴る。人々よ、聞け、あの平和の響を。人の世の凡ゆる醜きもの、姿は、影を没するであらう。そして荒める我等の魂に希望の光を投げ與へてくれるであらう。

ロシアの民衆は信仰心厚き人々である。わけてロシア農民程の厚き信仰心は、世界のどこにも見出す事は出来ない。ロシアの民衆が限りなく善良である事も、その信仰に歸因するといへよう。

宗教は、貧しき人々にとつて、最大の慰安であつた。疲れたる人生に再生の喜びを與へたものはその信仰であつた。頼りなきこの世において、たゞ一つ頼りとなるべきものは神があるばかりだつた。

遠近の教會から打ち出される鐘の音が、暮れ行く野や山や町の空に、いとも平和な響を傳へる時、神の御前にぬかづいて敬虔な十字を切る農民の心は、世にも尊きものであつた。うら、かな日曜の休日に、貧しい暗れ着を着飾つて、教會に詣でる農夫の家族は何んと平和な満足をもつてゐた事であらう。慈愛深き神の姿を胸に畫き、神と共に動き神と共に生活する彼等は幸福だつた。

だが、ロシアの民衆よ、信仰深き農民達よ。御身達の祖國は滅んで新しきロシアが建設された。し

かも何事ぞ、新しき國は御身達の宗教を、信仰を奪ひとらんとしてゐるのだ。宗教を失はんとする哀れなる農民よ!! そして呪ふべき共產主義盲信者よ!!

「宗教は民衆にとつて阿片である」とかつてレーニンは唱へた。彼は宗教を全露から驅逐すべく、猛烈なる無神運動を起したのである。レーニンなき今日も、共產黨はその遺志を奉じて更に激烈な宗教破壊をつゞけてゐる。到る處の教會は片つ端からぶちこはされ、偶像は手當り次第に焼かれた。形の上の宗教は着々と破壊され、共產黨は勝ちどきをあげてゐる。だが笑ふべき事には、民衆の心中深く懐かれる信仰心がこれによつて破壊されたと考へてゐるのである。

帝政時代において、ロシアの僧侶が甚だしく腐敗してゐた事は事家である。彼等は富める者の味方となり、有福なる生活を營んだものである。

彼等は、農民の知識が向上する事を能ふ限り妨げた。ロシアの民衆、わけて農民の殆ど全部が無學であつた事も、その責任は僧侶達の上にある。雷が鳴れば、それは神の怒りであると説いた。飢饉があれば、それも神の怒りであると説いた。地震があつても、暴風雨が起つても、すべての自然現象を神の怒りであり、仕業であると教へるのであつた。そして農民達は、その度び毎に、神の怒りを解くべく祀つたものである。

共産黨員は、かうした僧侶達に絶大な反感を持つてゐた。やがて彼等が天下を得た時、その反感の遣り場を宗教の破壊に求めたのである。だが、それは何と憎むべくそして笑ふべき事ではあるまいか。共産主義者達、否、赤露當局者は人類に宗教は不必要であると考へてゐる。不必要どころか、害毒をさへ流すものであると考へてゐる。果して宗教は人類に不必要なものであらうか。

否、宗教は断じて必要である。うるほひ少き人生に、絶対に必要なものである。それは、富める者、貧しき者、強き者、弱き者の凡てに缺くべからざるものである。若しも、この世に宗教を失つたなら、それは沙漠の如き無味乾燥なものとなるであらう。宗教なくして、我等はどこに、何者に、疲れたる魂の糧を求め得るといふか。宗教は人生のオアシスである。そのオアシスを破壊せんとする者は、何人といへども人類の敵である。

人類の知識は高速度を以て高められて来た。古代の人々が夢にだに想ひ得なかつた色々の發明が成し遂げられた。見よ、我等は空を飛ぶではないか。見よ、我等は水を潜るではないか。遠く隔つた友の姿を目のあたりに見、その聲をも如實に聞き得るではないか。否更に、人類の知識は擴大なる宇宙の謎をさへ解き得たのである。しかし、人類は偉大なる科學の殿堂を築いた。そして私は、今日の文明を形づくるに努力した人々の功績を、讚歎する事に躊躇するものではない。否、彼等の前に喜ん

でひざまづくであらう。

だが人類よ、科學萬能の夢に耽り過ぎてはならない。いはんや偉大なる造物主の存在を否定してはならぬ。

一片の雲もなく晴れ渡つた空を仰げ、そこには深き神祕をたへた星がまばたいてゐる。彼等のあつたものは、その驚くべき光りの速度を以てさへ、幾百萬光年の後初めて地球に光りが達するといふばかり知られぬ遠隔な地位にある。だがそれらは、何れも貧しき人類の知識を以てかすかに窺ひ得るに過ぎない。その星の更に向ふに、その向ふの星の更に向ふに、如何に無限に大宇宙がひろがつてゐる事ぞ。

大宇宙の神祕さは、大宇宙の廣大さは、恐らく永遠に人類の知り得ない存在であらう。我等がうかがひ得たるは、大宇宙の微粒子であり、我等が知り得たるものはその微粒子の更に一部分たるに過ぎない。しかもその知識でさへ、大自然の眼から見ると、滑稽極まるものであるかも知れない。

共産黨の幹部諸公は、貧しき人類の科學を振りかざして、宗教を否定し神の存在を無視せんとしてゐる。

今一步を譲つて、我々が無神論者となつたと假定して見よう。我々の中何人が、死の刹那まで無神